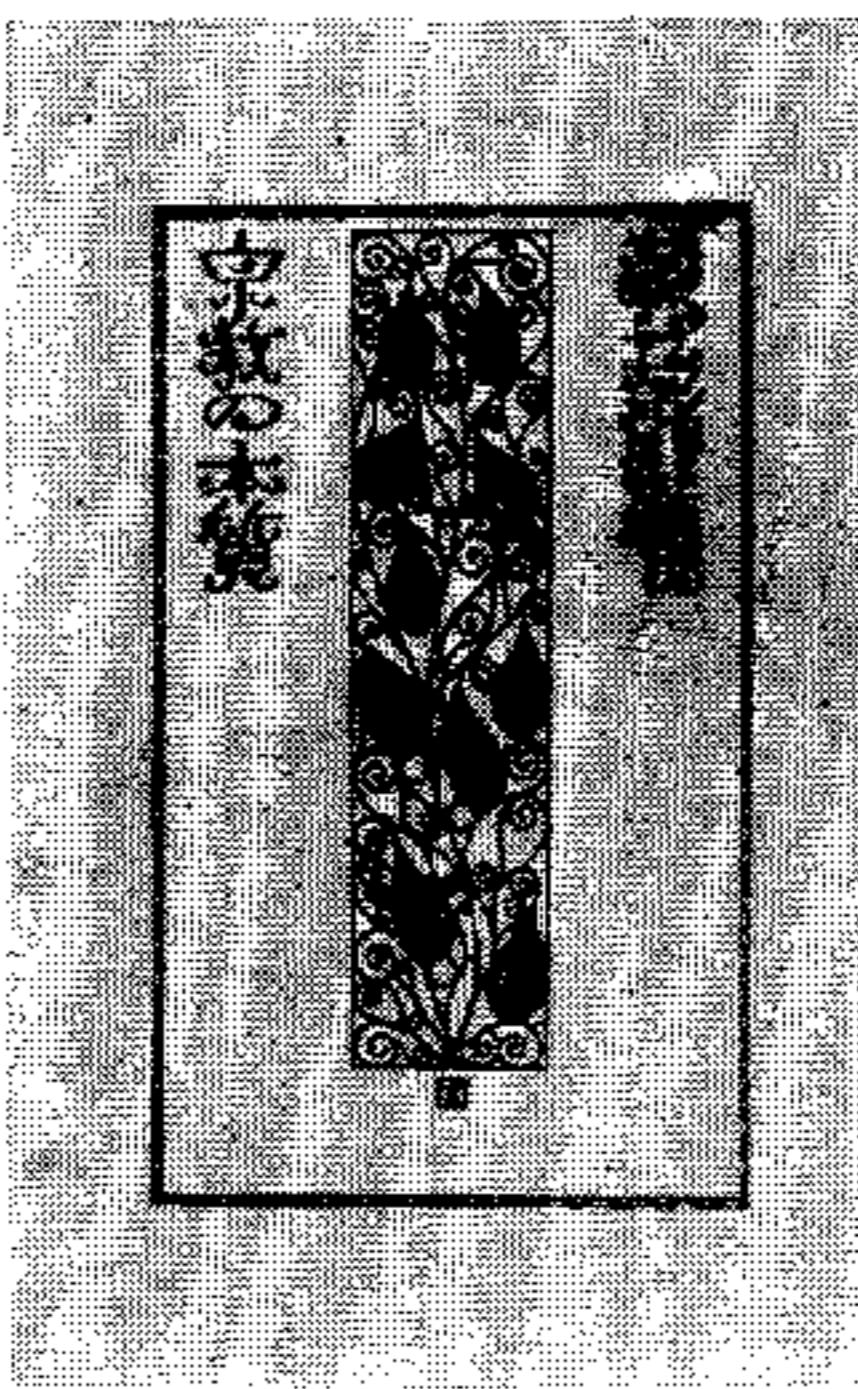


宗
教
の
本
質

〔解説〕一、原著者ヴィルヘルム・ブッセット（一八〇〇—一九〇〇）は、ゲッチャンゲン大学教授で独逸歴史学派の重鎮であった宗教学者である。

一、訳者大川博士は本書の内容に関して、紛糾を極むる宗教生活の事実を、宗教進化の跡を辿りつつ、公平と同情ある學者の態度をもつて整理し、宗教に対する明瞭なる概念を与へている点に於て、本書は「此類の著作の間に高い地位を占め得るものである」として、特に基督教の本質及び其の将来を論じた最後の二章は最もよく教授の面目を發揮している、と推称されている。但し仏教に関するブッセット教授の知識は殆ど原始仏教に限られていて日本佛教史の知識は全然欠けて居る。また当然論ぜらるべき支那の宗教にも論及されていない点を指摘しておられる。



一、そして博士は、ブッセット教授のみならず總じて「歐米学者の欠陥」として「東洋意識に対する徹底せる理解の欠乏」を指摘し、「歐米人の能くせざりし又は能くし得ざる完全な宗教研究」は、東洋を理解すること「歐米人よりも更に恵まれた地位に在る」日本人の手によつてなさるべきことを強調しておられる。

一、この訳書は大正三年の出版で實に大川博士の処女出版である。そしてのちに大正九年には博士自らの手によつて自著「宗教原理講話」（前掲）を著作されている。（参照）「宗教原理講話」

一、尚ほ本訳書に於て、仏陀を「完全なる懷疑論者」とするブッセット教授の見解（第六章解脱教）に対しても、博士は晩年の著「安樂の門」（第一卷七八五六六頁）に於ても論難しておられる。（大正三年一月刊、菊版三四六頁、隆文館刊）

序

紛糾を極むる宗教生活の事実を斯程まで手際よく取扱ひ得た学者は少なからう。ブッセット教授の『宗教の本質』は、最も簡潔なる叙述の間に、宗教進化の跡を忠実に辿りつゝ、凡ゆる重要な宗教現象を、殆ど洩れなく披瀝して、宗教に対する極めて明瞭なる概念を与へる点に於て、總て此類の著作の間に高き地位を占め得るものである。吾等は教授がその所有する豊富なる材料を、吾等が要求し得る限りの公平と同情とを以て取扱はれた學者の態度に対し、心の底から敬意を表せざるを得ぬ。殊に基督教の本質及び其の将来を論じたる最後の二章が、最もよく教授の面目を發揮して居る。ブーキーの門には、第一門に『大胆なれ』とあり、第二門に『大胆なれ大胆なれ常に大胆なれ』とあり、第三門には『余りに大胆なる勿れ』と書いてあつたと云ふ。基督教に関する教授の解釈は、ブーキーの門に書かれた文句を読んで居たと思はれるほど、大胆で自由で奔放であり乍ら、而も尚ほ基督者の最後の謹慎を失つて居らぬ。此点に於て吾国の正統基督者は本書に学ぶ所多いだらうと思ふ。而して吾等が特に教授に多とする所は、教授が單に複雑なる現象の奥に潜める至深の中核に徹し得る鋭き理解を有して居るのみならず、真正なる宗教研究者の最後の資格たる純一にして力強き信仰と、之より流れ出づる敬虔な充実せる氣分を具へて居ることである。されば吾等は本書を読んで啻に宗教に関する知識を得るに止まらず、脈々として叙述の背後に流るゝ嚴肅な氣分によりて、真摯な信念の吾衷に作興せらるゝを感じず居られぬ。

さり乍らブッセット教授の『宗教の本質』は固より完全無欠なものでない。従つて吾等は最初より最後まで教授によりて満足せしめられはしない。教授の仏教に関する知識は殆ど印度の原始仏教に限られ、殊に此の偉大なる宗教の至

醇の姿を實現せしめた日本佛教史の知識を全然欠いて居る。支那の宗教即ち儒教系統の信仰及び老莊の自然神秘教の如きも、当然論ぜらるべきものであり乍ら論ぜられて居らぬ。而して教授が基督教の将来如何と云ふ問題は、取りも直さず宗教の将来如何と云ふ問題として居るのは、教授の叙述が到達すべき自然の帰着ではあるが、こは余りに遅しき結論ではあるまいか。若し仏教に関して更に深き更に豊かなる知識を有して居たならば、或は如是の結論に達しなかつたのではなからうか。孰れにもせよ吾等は比点に於て容易に教授に同意する事が出来ぬ。吾等は歐米人の手にされる宗教学上の名著を読む毎に、歐米人よりも更に恵まれたる地位に在る吾国民の間に、其等の学者の著作に常に附纏ふ欠陥、即ち東洋意識に対する徹底せる理解の欠乏を補ひて、更に完全なるものたらしめる偉大なる学者の出現を翹望せざるを得ぬ。想ふに真に公平無私なる宗教の研究は吾国民の手に待たねばならぬ。西洋人が東洋を理解するよりも、遥かに公平に遙かに無私に西洋を理解し得る、東洋に於ける唯一の優秀なる此の国民の手によりて、歐米人の能くせざりし、又は能くし得ざる完全な宗教研究が成し遂げらるべしとの希望は決して空しき期待ではないと思ふ。若し此の翻訳が之に向つて多少の刺激を与へ得るならば、訳者の最も本懐とする所である。

終りに附記す可きは、原著者ブッセット教授の快諾を得て本書を翻訳するに当り、難解の個處に遭遇する毎に常に恩師文学博士姉崎正治先生を煩はしたこと、恩師松村介石先生が種々なる便宜と策励とを賜はつたこと、及び恩師文学博士加藤玄智先生が多忙の時間を割いて出版に関する斡旋の労を取つて下されたことである。茲に更めて三師に対して至深の感謝を表白する次第である。

大正三年二月

訳 者

第一章 序 論

宗教は人類の精神的生活に於て最も力あり且つ最も意義ある事実である。従つて之に關する知識を得ることは決して容易の業ではない。

凡そ人の相寄り相集る所にして宗教のなきはない。或は地球の一隅に全く宗教を有せざる小部落を発見したと云ふ学者があるかも知れぬ。而してそは強ち觀察の正しからず且つ遍ねからざりしためであるとも云へぬ。或はまた宗教的生活の遺跡が旧石器時代の發掘及發見には殆ど之を認め難く、新石器時代に至りて多く之を見ると云ふのも事實である。されど此等の新石器時代の發掘でさへ、今を距る幾千年の昔に於て、已に人類が宗教を有して居たことを吾等に物語る。宗教的生活が孰れの時に始まりしにもせよ、人類の生活が高き程度に進んだ時に、宗教も亦現はれたと云ふ事は距み難き事実である。

宗教は人類を導いてその到るべき至高処に到らしめた、而してそれは今日でも同様である。現代に於て多数の人々が宗教を離れて居るのは事実である。されどここは文明中毒の時代に於て常に見る所で、寧ろ過渡的現象となす可きものである。蓋し近代歐米人並に近代歐米文明は十重廿重に宗教と纏綿して居る。吾等は基督教が廿世紀の初頭に於て今より百年乃至百五十年以前よりも、更に強大なる勢力と、確固たる基礎とを得て居ることを忘れてはならぬ。或は毫も國家の庇護を蒙ることなき、飽迄も自由なる米国の宗教団体が、充実せる活動を為しつゝあることを忘れてはならぬ。或は高き教養ある人士、又は思想界の先覚者間に設ひ現存の宗教と離れて居るにもせよ、宗教に対する関心と研究的精神とが勃興して來たことも、また看過してはならぬ。精神的廢穢が其の極度に達した時代に於ては、或は

全く宗教的生活を見ぬやうになるかも知れぬ。されど宗教と提携せざる文化にして、未だ曾て向上し進歩し充実せるものありしことなく、将来に於ても亦決してあり得ぬことであらう。ゲーテは言つた『人は宗教的なる間のみ詩と芸術とに於て独創的であることが出来る、これなくば只模倣と反覆とに墮する』と。

かくして宗教は最も根本的な影響を人生に及ぼして來た。總て人類の高等なる生活は宗教と相結んで發達したと云つても決して過言ではない。人が母胎より生れ出でし如く、文明は宗教から生れ出でた。人類が動物的生活より脱却するやうになつた最初の契機^{モメンツ}たる火の使用の如きも、吾等の知る所では此驚くべき元素を宗教的に崇拜したことにより因して居る。吾等は幾多の遺跡によりて、火を点すること、之を護持することが宗教的行事なりしを證明し得る。または人類が如何にして火を創り、又は如何にして之を使用するかを知らなかつた以前に、之を宗教的に崇拜して居たことを信じ得るだけの証拠もある(註一)。未開人が牛馬を飼ひ馴らしたり、または家畜を使用したりしたのも、その初め此等の動物を宗教的に崇拜したことと密接なる關係をして居る。人類の最初の藝術的感情も設ひ全然宗教的ではないにしても、これまた宗教と不可離の関係があつた。蛮人が其身を粧へる裝飾、其身に施せる文身、其身に描ける絵画は、みな重要な宗教的意義を有し、一種の咒符で又は護符であつた。人間の最古の舞踏もまた宗教的舞踏即ち祝祭の時の歛舞、供犠の時の聯舞であつた。イスラエル人は黄金の犠^{ヒガネ}の犠^{ヒガネ}の周りに舞ひ、ダギデ王は神の匱^{ハシ}の前に舞つた。宗教的舞踏に伴ひて宗教的音樂が出来た。最初のイスラエルの予言者等は、瑟^{ゼウ}と鼓^{タム}と笛^{フル}と琴を前に執らせて現はれて來たと記されて居る(註二)。人類の最古の生活、即ち旧石器時代より既に存在せし石・角・及象牙の上に試みられた多様の半成形及形成美術が、果して宗教的動機に出たものか、又は單に模倣衝動及遊戯衝動に因つたものか、又は純然たる美的衝動に基いたものかに就ては色々な議論がある。但し總て文明國民の間に發達した成形美術は、恰も建築術の進歩が墳墓・三角塔・祭壇・神殿の構築に最も多く負ふ所ありしと同じく、神の姿を描き出さむとする要求

と最も密なる関係を有して居たことだけは確實なる事実である。他人の権利を侵害す可からずと云ふ観念も、また宗教を根柢として居た。そは神の怒りが神を崇める団体に向つて侵害せられた権利に対する贖罪を要求し、且つその贖罪が行はれるまで神の怒りが続くと云ふ信仰に基いて居た。人間の最初の知識も、また宗教と離る可からざるものであつた。古のバビロンの賢者等は、最も厳かな敬虔のこころで、人生の運命を支配するものと信じて居た天上の星辰を仰ぎ見た。而して人間の知識の基礎は之から出来た。即ち天体の忠実なる觀察、精確なる時間の計算、測量に関する智識、数学の最初の考察が、此信仰から生れたのである。而して最後に道徳と宗教との関係に至りては茲に吾等が更めて言ふを要せぬほど明白であり且つ密接である。

時代を経るに従つて、從来宗教の指導の下に在りし精神的生活の個々の方面が、次第に宗教より独立するやうになつた。こは人類の歴史に於ける大いなる進歩で、宗教自身もまた此事によつて利益を得て來た。宗教はこの為に何ものも失はなかつた。宗教はその間口に於て失へる代りに深き奥行と集注された力とを得た。個々の方面の活動が宗教を離れて自由となりしに拘らず、宗教は常に精神的生活の中心となつて來た。而して人生の荒浪が最も激しく寄返す時、人生の内部の葛藤が最も深刻に行はれる時、その根柢には常に宗教が横はつて居た。

吾等の目的は、宗教と呼ばれるこの現象に関する知識を得るに在る。されど宗教的現象の多様を極むる、之を観る吾等の眼を眩まし、之を聴く吾等の耳を聾せしむるものがある。此處には歡喜に充ちたる信仰があり、往生の確信があれば、彼处には靈魂を碎き去る恐るべき苦悶あり、最も赤裸々のエゴイズムあり、または人身を犠牲にし、男女の節操を犠牲にする事に於て其の最も恐るべき姿を現はせる供犠を喜ぶ精神がある。吾等のこゝろを酔はしむる最も優しき詩的情調と相並んで宗教戦争・宗教拷問の如き野蛮な血腥い酷薄が行はれて居る。苦行者や隠者や修道僧の出世間的な氣分と相並んで、世界と人民とを足下に踏み付けた祭司や教主の勝誇れる世間的感情がある。宗教の世界は

天使の音楽の聞ゆる世界であり、而も直ちに之と相接して凡ゆる種類の魑魅魍魎や惡鬼羅刹やらが、已がじし勝手に振舞つて居る世界である。此處には莊嚴なる静寂と安住と純一とがあり、彼処には狂ひせわる情熱の焰に沸り立つ呪ひの釜がある。

さらば吾等は如何にして此紛糾せる現象の間に、吾等の行くべき路を開拓す可きか。多くの人々は一見簡単に思はれる路を吾等に教へる。彼等は宗教とは何ぞとは、基督教とは何ぞと云ふことに過ぎぬと言ふ。基督教のみが眞実の宗教で、其他の總ては偽りの宗教である、而してそれは人間が進歩するに従つて益々墮落すべき宗教である、何となればそれはアダムの墮落以来不斷に淪落しつつある人間の宗教であるからだと彼等は言ふ。または旧約並に新約の宗教のみが神より啓示せられたる宗教で、自余の總ては自然の宗教である、その眞実なる事に就て、何等の保障をも有せざる、人間の思想または空想の所産に過ぎぬと言ふ。

吾等は世に行はれて居る此の見解に対し、三つの点から其の謬見なる事を論じよう。第一に神が旧約並新約の啓示に接せざる總ての国民をして、迷ふが専に迷はしめ、益々暗黒と墮落との奥底に淪落せしめると云ふ見解は、之を公平に批判すれば啻に偏狭にして悲観的なるのみならず實に無神無靈魂の立場から世界の歴史を觀察せるものである。若し基督教の神学者が、飽くまでも公明なる知性の命令に従つて、啓示宗教たる基督教の尊嚴を増そうとして、一切の自余の宗教を迷妄と断じ、之を以て人間の空想と生活欲との所産に過ぎぬと論証せんとするならば、そは極めて危険なる試みである。かくの如き護教論は、自らが他に加へたと同じ鋒先が、何時かは己れの上に加へられ、同じ方法を以て基督教も亦迷妄に過ぎぬと論断せらる可きことを想はざるものである。

第二には人類の精神的生活の歴史全体が、此説を裏切つて居る。吾等は世界に於て、人類が高きより低きに下り、または盲目的な力が勝手に動いて居るなどとは、如何にしても認めることが出来ぬ。時々の停滞があり、局部の退歩

があるにも拘はらず、全体としては非常なる進歩があること、高等なる形式と充実せる生命とが、遅々なれども休みなく自己発展を成し来れること、而して宗教的生活の發展も亦之と伴ひ来れることを、吾等は明かに認める事が出来る。高等なるものより堕落したと云ふ見地から宗教の歴史を説明せんとする神学者は、如何に彼が人類の精神的生活の総ての知識と相背馳して居るかを気付かぬ人である。

第三には宗教史自身、並に公平なる宗教史の研究が、此説を裏切つて居る。旧約並に新約の歴史は、四國の国民及び文明と非常に親密なる関係を有して居るので、彼を啓示宗教とし、此を自然宗教として區別するやうなことは殆ど不可能なることを吾等に物語る。旧約宗教の歴史は、劣等より高等に、不完全より完全に進めるものなることを吾等に物語る。而して基督教の教会史も、福音の中に含まれたる精神と真理との宗教が次第に醇化されて来たことを示して居る。如何なる場合に於ても、吾等は眞実の宗教が然らずば虚偽の宗教と云ふような事實を認める事が出来ぬ。吾等は只だ到る処に宗教の生成と、進化と、完全に向つて進み往く不完全とを認めるのみである。

かくて吾等は如上の説とは異なる見解を以て研究を始める。而して其当否は叙述を進め行く間に自ら明瞭になるであらう。吾等にとりては、人類の全宗教史は偉大なる神の仕事であり、曾て絶えざる招喚であり、神と人との不斷の呼応である。基督教は後に吾等が述ぶる如く、宗教の最も醇なる姿であり、福音は在來の宗教の最も高き且つ完き體現である。乍併基督教のみが決して唯一の宗教ではない。そは只だ宗教の種類の中で最も完全なるものたるに過ぎぬ。」

従つて宗教とは何ぞと云ふ問題を、實際上の便宜の為にはあらで、學術的に之を取扱ふ場合には、一般に宗教の本質と云ふ問題が最初であつて、基督教の本質と云ふことは次に来るべき問題である。吾等は『^{ダクトランク}類』の比較研究によりて始めて十分に明瞭に最も完全なる『種』を知る事が出来る。例へば人間が最も發達した有機体なることは、比較解

剖学によりて始めて十分なる根拠を与へられたのである。基督教の本質と云ふ問題の解釈は固より容易の業でない。

されど若し吾等が宗教の要素中より、本質的なると然ざると明瞭に別ち、時と處とによりて様々に現はれる形相の奥に横はる永遠の根柢を、確實に認識せんとするならば宗教史の比較研究に優る方法がない。

されば今宗教とは何ぞと云ふ問題を解くに当りて、吾等が最も安心して頼り得るものは、宗教全体の歴史である。宗教史を領会する事によりて、吾等は雑多なる宗教現象を分類し、適當なる順序に之を配列し、現象の背後に潜む本質的なる且つ永久的なるものを把握し、宗教進化の原則を認識し、之を過去に鑑みて現在と将来とを推断し得るやうになる。

されど複雑を極むる宗教現象の研究に入る前に、予め宗教の本質に就て概括的な説明を加へて置くことは読者に取りて便宜なことと思ふ。固より此の説明が充分なる歴史的研究の結果であるとは云はぬ、または歴史的観察の歩を進むれば、必ず此の説明に達するとも云はぬ。ただ非常に宏壯な建物に入る前には、予め見取図を見て置くことが便利なると同じ理由で、吾等は茲に大体の方向を示す説明をして置くだけである。従つてこは単に概略的な鳥目観に過ぎない。一々の内容と生命と光耀との説明は、之を後章の叙述に譲る。

第一に吾等は、宗教が人類の精神的生活に於ける根本的現象なること、第一義的のもので決して副産的のものでないことを主張する。少くとも従来の如く宗教を吾等の精神的活動の单一なる機能に還元せんとする試みは謬りである。従来試みられたる種々なる説明は、或は宗教を以て『原因を知らんとの欲』即ち認識衝動より出でたるものとし、或は之を『表象の相をとれる思惟』と名づけて、絶対的精神が概念の相をとりて現はれる以前の開展の段階となし、或はまた宗教の教説を道徳の根柢たるべき要求仮定として領会せんとして居る。併し乍ら吾等は宗教を以て思惟感情意欲と云ふ人間の精神的生活の範疇の孰れか一つより導き出し得るもの、又はその一つに還元し得るものとは思

はぬ。吾等は宗教を以て人格的生活の中心にして且つ本原的な機能とし、精神的生活其者の中に之を領會すべきものであると思ふ(註三)。

かくて吾等は宗教を以て『生きんとの努力』とすることが正しき見方であると思ふ。宗教の歴史は常に生きんとの努力の発現であり、常に幸福を求むる努力の発現である。色々な種類の幸福、即ち現世に於ける個人的生活の幸福としては、降雨・豊作・日光・大漁・健康・無病など、団体的生活の幸福としては、威權・戰勝・平和・商工業の安全・権利・自由・一般の繁昌など、更に高き彼岸の生活の幸福としては、死後の幸運・神々若くは神と偕なる生活・罪惡の宥恕・贖罪・内心の平和・道德上の正義などが、到る處に求められて來た。全心身を挙げて神に歸依する神祕主義者さへも、また生を断じて無上安穩に入らんと求むる仏教僧さへも、心ゆくばかり彼岸の風光に憧憬することが、現世の多苦に引きくらべて多幸なることと考へて居る。宗教に於ては到る處に生きんとの努力、幸福を求める努力がある。

かくして吾等は宗教の範囲と、自余の高等なる精神的生活の範囲とを、確實に且つ鮮明に區別することが出来る。本来の道徳的行為に於ては、意識に現はれ来る動機は、幸福を求める努力でない。固より道徳的行為でも、結局は無上の価値と幸福とを創造する事にはなる。併し乍ら、道徳律なるものは、一切の欲望を無視する要求として、即ち『汝かくす可し』と云ふ命令として吾等に臨み、吾等の閑知せざるやうな重荷を吾等の生活に負担せしめるものである。真理を求める努力もそれが全く利害の念を離れて居る時にのみ善なりと謂はれて居る。學問は自由でなければならぬ、總ての実際上の利害と没交渉でなければならぬ。學者は人生の最高の利害をさへも、真理其者に対するインテレストの下位に置かねばならぬ。美に對して感ずる吾等のインテレストは、道徳や學問の場合に於けるよりも更に内面的な、全人的なものである。されど此の場合に於ても聰明なる一美学者がいみじくも道破せる如く、利害を離れた

るインテレストであり、且つあらねばならぬ。そは純乎たる直観より来るインテレストで、その対象は現にインテレストを感じて居る当人とは懸け離れて居らねばならぬ。若し此美をわが物にせんとの欲望、之を所有し度いと云ふやうな念慮を起せば、最早厳格なる意味で審美的とは云へぬことになり、純乎たる直観の態度を失ふやうになる。

然るに宗教は總て此等とは著しき対立を為して居る。宗教に於ては最も高き、最も強き、全人的なる利害関係がある。感情と意欲とは激しく緊張せられ、獲得の欲求あり、所有の欲求あり、而して何者かたらんとの欲求がある。宗教は吾等の衷に最も昂潮せる感情を喚び起し、一切の吾等の力を解放し、激しき情感を燃え立たしめる。一切は蒸しかへり沸えかへりて、善悪両素の狂瀾怒濤が逆巻く。

而して宗教は生きむとの努力なるが故に、人間が幸福を求めるがために尽した總ての努力、即ち文明を齎らさんとの努力に對しては、極めて親密であり乍ら、而も互に相敵視する不可思議な關係を有して居る。此の特異な關係は、宗教と學問・芸術、又は道徳との間には存在して居ない。此等との間には相助けて互に利益を得るやうな關係を結ぶことが容易である。此處では両者の矛盾衝突は、一方が自己の領域を超えて他の領域を侵すために起るもので、勿論時としては非常な困難があるけれど、結局は相和して行けるものである。

然るに宗教と文明との關係は、遙かに深奥な且つ難解な問題である。宗教は文明が獲得せんとするのとは異なる方法で、人間に与ふべき幸福を獲得せんとして居る。そは文明に対して、同時に友人であり且つ仇敵である。そは常に新文明の先駆者となつて來た。凡そ新文明の与へる幸福は、本来その文明に屬して居たものではなく、始めは宗教的生活の發表であり結果であつた。前にも述べたやうに、總て火を使用する事は、恐らくは火を崇めることに始まつて居る。而も人間が自由に火を駆使し得るやうになつてから、特別な例外を除けば、火の崇拜は止んで了つた。かくて宗教的信仰の一対象であつた火は、一転して最も重要な文明の一方便となつたのである。而して之よりも更に適切

な且つ明瞭な例証は、下の事実である。即ち神は一個人の犯せる罪に對して、其個人の屬する全部族、又は全都市、又は全国民の上に復仇を加へると云ふ信仰は、全体の部族・都市・国民をして相互の利益のために、各個人の違法行為を防止するに至らしめた。而してこれが公法の觀念の基礎となつた。其後かくの如き信仰は消滅したけれど、公法の觀念そのものは、文明の進歩を促がす最大の一因となつて來たのである。文明は常に宗教の幸福なる後繼者であつた。されど文明は決してその相続した遺産に満足しなかつた点より言へば不幸なる後繼者でもあつた。宗教は人生の一領域を文明に与へて、之を世間的に用ゐる事を許すと同時に、直ちにまた一切の現世の幸福の彼岸にある、更に新しき、更に高き幸福を人間に示す。そは不斷に文明に向つて、汝の生活は決して無上の幸福でないぞと叫ぶ。そは文明の造れる總てのものに向つて、一時的なもの、目的を達する為の方便に過ぎぬものと宣告する。そは人生の眞実の価値を現實の世界を超越せる彼岸に置く(註四)。

宗教と文明との關係を考へ来れば、宗教を以て單に生きんとの努力、幸福を求める努力とする事の不当なる所以を明かに認めることが出来る。こは恰も音樂を定義して、騒がしき音なりと云ふやうなものである。生きんとの努力、幸福を求める努力は、一般に文明全体の根柢であつた。されば吾等は更に明瞭な宗教の特質を見出さねばならぬ。既に橋田の一つの中心を求め得た吾等は、他の一つを求めねばならぬ。

吾等は先づ此生きんとの努力が、如何なる形に於て宗教内に存在して來たかを尋ねて、そは高き力、精靈、幽鬼、神人、多神、一神、真神と相結んで來たことを知る。何となれば吾等は宗教の第二の要素として、多神又は一神に対する信仰を、一切の宗教に於て認めるからである。たゞ仏教のみは唯一の例外であつて、此の宗教には神の思想が存在せぬ。而して之に就ては後章に論じ度いと思ふ。

宗教の第二の要素たる神に対する信仰は、之を第一の要素から導き出すことが出来ぬ。但しそは屢々試みられた企

てであつて、或は神を以て人間の生活上の必要から生じた欲望の射影なることを示さんとし、或は神に就て人間の描ける種々なる観念は、人間の抱ける種々なる欲望や理想としつくり符号することを証明せんとした。乍併かくの如きは現に吾等が取扱つて居る宗教と云ふ精神的現象の境外に逸出した仮説を立て、居るもので、宗教現象本来の面目を傷けるものである。何となれば宗教的生活に於ては、神は常に最も眞実なるもの、人生其者よりも眞実なるものとせられて居る。されば若しも神に対する信仰は、純乎たる幻想として考ふべきものであると云ふ仮説を承認するならば最も低度の宗教に於て、恐怖及び畏懼の感情が極めて大なる勢力を有して居る事實を如何にして説明するか。若しも神の起原は人間の欲望の中にありて、神とは人間の生活上の欲求が生み出したものに過ぎぬとすれば、如何にして宗教に於ける此の根本的な氣分を説明するか。

此故に吾等は^{あわだ}遠しき綜合と説明とを避けて、先づ宗教的生活の心理には、生きんとの努力と神に対する信仰との二重の与件があるとして置く。むしろ吾等は、此等の高き力とは何ぞ、多神又は一神を拝するは何の意味ぞ、人が其の周囲の力の中で、一を尊んで他を尊ばざるは何故ぞ、如何にして信仰が起り、宗教が起つたかと云ふ問題の方に、吾等の研究の歩を進めて往かう。

宗教的生活の歴史を観察して第一に吾等が認める事実は、奇怪なもの、驚嘆すべきもの、不可測なもの、偉力あるものが、宗教的崇敬の念を喚起したことである。信仰と驚異との間には、最も早くから親密な関係があつた。極めて早くより、人は既知の世界と未知の世界とを分ち始めた。最も下等な野蛮人すらも、既知の世界を有して居る。彼等の住する洞窟、その使用する獣具、その飼育し駆使する家畜、又はその耕やす少許^{わずか}の地面、その建てたる掘立小屋などは、即ち蛮人にとりて既知の世界である。されば吾等は人間が無邊無際の全宇宙から、少許の部分を自己の世界として分ち取る真時に、測り難き驚嘆のこころに充たされて、宗教的崇敬の情を起し来ると想像することが出来る。而

して宗教の本原は、取も直さず既知と未知との世界を分つ境界線上に在るのである。

野蛮人を取囲む森の中には、多くの精靈が住んで居る。彼処には噪めく音、軋りあふ音、吹き鳴らす音、歌ふ声、騒立つ声が聴える。森の精、半人半羊の木の神、山野の神、樹神、男体女体の一寸法師が林の中に遊び戯れて居る。高山の絶頂も不知の世界である。多くの人は之に登つたきり再び降りて来なかつた。其処からは雪崩落ちかゝり、氷が轟きくだる。其処には悪戯好きな森の妖鬼、石を投ばかける半人半馬の神、牧者を脅かすパン、大衆の荒くれ者を率ゆるディオニソスが居る。而して此等のものの外にまた多くの幽靈が居る。野蛮人の小供らしき心は、死者が幽靈となつて長く存続して行くのは当り前の事だと考へて居る。而して此等は特別に強大なものとは思はれて居らぬ。彼等は生者が供へる食物なくしては生きて行けぬものである。或は『憐れな幽靈』とさへ呼ばれて居る。乍併彼等は奇妙なもの、不可思議なものであつて、神秘な未知の世界に住んで居る。或は黄昏の薄暗がりに、或は真夜中の黒闇に或は墓や四ツ辻に、彼等幽靈は彷徨て居る、ヘカーテや其の一族恐しき獣人や其の獣犬も彷徨て居る。妖精や幽靈に対する此の迷信は近世の人々の心にまでも非常に深く刻み込まれて居るではないか。

驚く可きドラマがこれから始まる。人は間断なく彼の世界を拡げて往く。而してその知られ、開拓され、支配された世界からは、妖精や幽靈が影を潜める。されど未知の世界、信仰と宗教との世界は決して消え去らぬ。未知の世界の奥底は、測るに従つて深さを増す。支配する世界の拡がるに従つて支配せざる世界は益々神秘に、不思議に、広大に見える。世界に関する知識の進むに従つて、世界は益々不可解になる。一つの謎を解き去れば、直ちに新しき十の謎が出て来る。而してこの知不知の世界の境こそは、宗教の発する源である。

地上の妖精に注がれた人間の目は、転じて天上の力を仰ぎ見る。風を起し、颶々たる音を立て、嵐を呼び、雷を鳴らし電を閃かし、光り輝き、生命と光明と繁栄とを与へる天上の力を仰ぎ見る。又は大地の奥に潜む力を俯き見る。

野に豊饒と収穫とを齎らし、生命と死滅とを支配する地中の力を俯き視る。人間は最早や不思議なもの、忽然として出没するもの、測り難きものにのみ神を求めることがせぬ。彼は更に神秘な、更に驚嘆すべき宇宙の永遠の秩序に神を求めるのである。希臘人はモイラ即ち運命を以て、諸神さへも其前に跪く至高の力となし、印度人はリタ、波斯人はアシヤてふ言葉を以て、常住の法則と云ふ觀念を表白して居る。かくして神々は犯す可からざる永遠の法則に従つて、国民の運命を神聖と正義とに導く精神的勢力となる。されどかの根本的な宗教感情、即ち神の神秘な卓絶せる力に対する恐怖は、常に人のところに残る。希臘人が『神々は人よりも勝れり』と言つたのは、最もよくこの感情を言表はしたものである。

吾等は之が発達して如何なる結果を齎らすかを考へて見よう。これは吾等近代人にとりても、一切の宗教の根柢となつて居る。吾等の知れる世界が如何に広まりとは云へ、知られざる世界は更に宏漠である。あらゆる力を尽しても吾等の生活は竟に一小遊星の外に出でぬ。コペルニクスの天文学は、吾等の地球は昔の人の考へたやうに宇宙の中心にはあらず、乾坤の一極微に過ぎぬことを教へる。譬ふれば吾等は一命を扁舟に託して際涯なき大洋に浮ぶ身である。吾等の四圍には到る処に眩めく深淵がある。或は望遠鏡を藉りて無限大の天を仰ぎ、星辰の世界が互に回転し合つて居るのを見る時、或は顕微鏡によりて無限小の世界を覗く時、或は想ひを天上の銀河に馳せる時、或は宇宙を築く極微の石たる分子や原子を考へる時、吾等は常に、吾等の生命を眞理む深淵の目眩しさを感じざるを得ない。而して總て此の無限大と無限小との間に、犯し難き厳粛なる法則に従つて動く凡ゆる種類の解き難き生命の努力と向上とが、またしても吾等をして驚嘆の眸を見張らしめる。予は思ふ、吾等を取囲む偉大なる実在に対するこの恐懼と畏敬のこところこそ、現代の人々に取りても總ての宗教の限本的感情である。凡そこの氣分を感ずる人は、宗教を感じ得る人である。

併し乍ら單に宗教を以て、生命と幸福とを求める努力と言つただけで不充分であると同じく、宗教は精靈や神々や又は唯一神の偉力を認めて畏敬の情を抱く事なりと云ふだけでも充分でない。上の二つは宗教と云ふ橢円形の二つの中心である。吾等は此の中心によりて橢円形の全周を描き出さねばならぬ。

先づ吾等は上の二つを結び付けて、一面に於ては下の如く言ひ得る。即ち宗教は単に幸福を求める主我的の努力ではない。そは周囲の世界に自我を確立し、而して之によつて神に対する従属的関係を密ならしめんとの企てのみではない。そは同時に更に高き何ものかである。そは神の生活の中に自己を没せんと希ぶ純一なる感情である。吾等は宗教進化の総ての段階に於て、此一面を極端に鮮やかに示す多くの現象を認めることが出来る。吾等は殆ど狂乱に近きまでに、一切の所有、然り生命や節操すらも神に捧げることを喜ぶ現象を認め得る。例へば色々な苦行、滅罪の難行、神に奉仕する娼婦の如きがそれである。又は何等の利己的欲望なくして、絶対的に神に帰命するあり、又は神秘主義者の如く、精神的に神の中に還沒する事によりて、全然自我の滅却を希ぶあり、又は神の真生命を掴まうと努めて、不斷に神を慕ふものもある。而してこは『われ若し汝を得ば天地也要なし』と言ふに至りて、その至高至醇の境に達したものである。

他の一面に於ては、また下の如く言ひ得る。宗教にして健全である以上は、決して全然主我的感情を離れる事が出来ぬ、そは一切の欲望を離れたる神に対する単純なる畏敬又は単に『絶対帰依の感情』たることが出来ぬ(註五)。健全なる宗教は、常に全人的なるインテレストを感じるもの、生命ある人格的關係、与へて而も受けんとの欲求である。

宗教は神と人との人格的交通である。吾等は今少しく精密に此の事實を吟味し、且つ宗教的生活に現はれ来る著しき対立を吟味しよう。

如何なる宗教に於ても、常に併せ考へねばならぬ二つの方面がある。即ち一方には崇拜の対象たる優越せる力があ

り、而も其力の本質は人間の閑知せざるもの、奇怪なもの、時としては厭ふべきものなることである。人間は此力の羈絆を脱せねばならぬ。畏懼し戰慄して彼等より隠れねばならぬ。併し乍ら他方に於て人間は決して之を離れることが出来ぬ、または敢て之を欲しない。彼は其力に頼り縋り、其力と自分とが結付けられて居ると感じ、彼はその力にその力は彼に依属して居ると感じて居る。彼は雙手を挙げて之に訴へる。彼は受けんが為に之に与へる。即ち犠牲を之に供へる。彼は神々がその言に耳を貸し、彼及び彼の行ふ事にインテレストを持つて居ると信する。而して此等の二つの信仰が相結べる時にのみ、始めて眞の宗教がある。最も低度の宗教的生活に於ては、一般に劣等なもの、自然の中の小さな幽鬼、死者の精靈などが崇拜の対象になつて居る(註六)。固より彼は嵐を起し、颶然たる音を立て、光り輝く偉大なる天上の力を知つては居るが、そは單に朧氣なる宗教的感情たるに止まりて未だ宗教ではない。何となれば彼は此等の方が自分の為に存するものと信することを敢てせぬからである。人間は極めて遅々たる歩みを進めてかくの如き信仰に到達し茲に始めて想ひを天に輝く日月星辰に馳せ、風雨を生じ電雷を鼓する天上の神に向つて、『汝はわが神、わが父なり』と呼ぶに至つたのである。かゝる信仰は總ての宗教の中にある。而も基督教にて全能の神に向ひ、『汝はわが父なり』と言ふに至りて、此の信仰は到り得べき至高處に達した。總ての宗教は、而して進化すればする程、深淵の中に自己を投じ去る事である。そは人間の信頼の驚嘆すべき奇蹟である。

かくて一切の宗教的生活には二重の根本的氣分がある。従つて恐怖と信愛との孰れが宗教の主力なるかと云ふ古き問題に於て、单に其一つを挙げて之に答へる事が出来ぬ。一切の生命ある宗教に於ては、二つの原動力、即ち求心力と遠心力とが常に並び存し、両者の作用によりて人のこころは一定の距離を描きつつ中心点たる神の周囲を回転して居るのである。神に対して恐れ戦く感情のない処には眞の宗教がない。何となれば人は決してわが身を神に引き較べわが身を神と同位に置くやうな矜高自負の心を起し得ぬ。若し之れを敢てするならば、そは希臘人がヒュブリス(註七)

と名づけたる宗教的罪惡の最も根本的なものである。人は常に自らと神との間の懸隔を意識して居らねばならぬ。

『神と等しきものなりと思ひあがる事なかれ』とは宗教の第一則である。されど他面より言へば、單に恐怖の感情のみでは宗教が成立たぬ。此感情のみが跋扈して居る間は決して宗教はない。人は何等かの方法で神に巻き付けられて居る事を感ぜねばならぬ。然り、宗教の進化するに従つて、慈悲と信頼との要素が益々強くなつて往く、併し乍ら最高の宗教に於ても恐怖感情が全然消滅し去るのでない。そは常に信仰と信頼とが流れ出づる背地となつて居る。『天地の主なる父よ、此事を智者達者に隠して赤子に顯はし給ふを謝す』と言へる耶穌の祈禱の中にさへも、此二つの要素の対立を認めることが出来る。而してルーテルが、我等何者よりも神を怖れざるべからず、何者よりも愛し且つ信せざるべからずと言つたのは、最も適切に之を表白したものである。信仰は常に暗中の光明である。前進であり且つ退却である、慄へあがる悲憂であり且つ躍りたつ歓喜である。大なるパラドックスである。されど之が事実である。

吾等が宗教をかくの如く解する時、一切の生命ある宗教に於て、始めは単に末梢に位するやうに見える一つの思想が、如何にして次第に宗教の中枢に近づき来るかを領会する事が出来る。その思想とは解脱の思想である。即ち現実以上の生活に対する信仰である。吾等は一切の宗教が、既知の世界と未知の世界との隠れたる対立を根柢として居ることを述べた。人は外面的にも内面的にも、己れを取囲む小さき世界、その支配、その拘束、その制約、その逼迫より脱せんことを希ぶ。日毎の重苦しき束縛、人生の狭隘なる屋牆、高貴なる真我を累はす煩惱の羈絆より脱せん事を希ぶ。

最低度の宗教生活に於ては、此の解脱衝動は殆ど重要な地位を占めて居らぬ。此処にては、主我的なる根本衝動が全権力を握つて居る。されど斯かる低度の宗教に於てすら、解脱衝動の徵は已に顯はれ、全心身を神に委ねてその懷に抱かれんとの欲求がある。而して宗教が進化するに従つて、此の方面の現象も亦益々鮮やかになつて往く。吾等

は既に凡ゆる種類の苦行、自然的感覺的生活の断滅、意識を離れ形骸を脱する浩蕩境、神憑狂又は魔憑狂、全心を神に還沒して全く現世の生活を出離する神秘家が感じて居る『神と僧に生きる』と云ふ氣分などに就て述べた。多くの大宗教殊に印度の婆羅門教及び仏教には、この氣分が極端に且つ深刻に現はれて居る。この両宗教に於ては、生死を出離して永劫の安穏に入らむとの仰望が、宗教生活の中核であつて、一切の自余の希望は其為に影を潜めて了つた。解脱衝動の極端なる發動は、宗教生活にとりて甚だ危険なものであると同時に、そは一切の高等なる宗教にとりて最も根本的な原動力である。従つて解脱に対する信仰の強度、現実以上の生活に対する思想の確度を標準として宗教進化の段階を定むることは、極めて正当なる方法であると思ふ。而して此の標準によれば、後期希臘文明の間に生れたプラトー中心の宗教は、仏教及び婆羅門教の上に位し、基督教は更に其上に位して、進化の絶頂に在るものである。上に述べ来れる宗教の概括説明は、單に大体の方向を示すまでのものである。吾等は進んで宗教の内容と生命とを探らねばならぬ。吾等は宗教的生活の茫茫たる世界を旅せんとするものである。吾等は宗教を以て人類の精神的生活に於ける最も力あり、且つ最も眞実なるものと信ずるが故に、厳かなる敬虔のこころを以て旅立を始めざるを得ぬ。宗教を吾等の考へる如く考へぬ人々、宗教的生活を以て生活欲より生れ出でた空想と幻影とに過ぎぬとする人々は、到底同行の伴侣たることが出来ぬであらう。吾等と彼等と孰れが正しいかと云ふことは、それ自身で一箇の問題であるが、そは吾等が茲に論すべき当面の問題ではない。併し乍ら聊かにても宗教的経験のある人々、少くとも人生の此の一面を研究せんとする人々は、總て吾等の道連れとなる可き人々である。此等の人々は吾等と共に研究の歩を進めに従つて、人類の全宗教的生活及び其の歴史は、偉大なる神の御業なりとすること、神はこれによりて迷妄より眞實に、不完全より完全に、利己より相愛に、感覺的より道徳的に、自然的より精神的に人類を導き給ふものなりとすることの当否を判断することが出来るであらう。

註一 希臘人は竈の火を崇拜して居た。やがて後代に至りて家庭を守護する女神 Hestia も崇拜されし時也。希臘の Hestia に相当するのは羅馬の Vesta である。Vesta の神殿の裡には國家の生氣を象徴する永遠の火が不滅に燃えられて居た。聖火の護持は羅馬の公共生活に於ける極めて重大なる奉仕で、始めは四人、後には六人の处女が之に拘つて居た。波斯人及び印度人も火を捧して居た。而して波斯人に在りては火は遂に宗教的生活の中心となり、印度人に在りては火神 Agni の崇拜となつた。捧火は現時に於ても普く未開人の間にに行はれて居る。

註二 費金の禮に就ては臣約出埃及記第十一章、神の匱に就ては同上第十五章第十乃至二十五節、及び撒母耳後書第六章第十一乃至五節参照。手禮物と音楽に就ては撒母耳前書第十章第五節参照。

註三 J. Kaftan, Wesen der Religion; O. Pfleiderer, Wesen der Religion; W. Rauwenhof, H. Siebeck, A. Sabatier 種氏の宗教概論。C. P. Tiele, Elements of the Science of Religion; M. Jastrow, The study of Religion; Runze Katechismus der Religionsphilosophie; B. Duhm, Das Geheimnis in der Religion 等参照。

註四 宗教と文明との眞諦に關つては古ノ紳士 Siebeck, Religionsphilosophie の第一講義。

註五 Schleiermacher は宗教を以て總称體の眞諦 Das Gefühl der schlechthinnigen Abhängigkeit なつてゐる。

註六 姉何なる神が最初に崇拜せられたるかに關つては 1 指の説がなつ。此の眞諦に關する最も簡短なる説明を取らんとする。

A. Menzies, History of Religion 第二章を参照。

註七 ルイアリス Hybris は無恵又は不正を意味して居る。希臘の神話では、正義又は神人の間に行はれる永遠の法則を神々にやむを得ず Themis も又 Hybris は其の反対概念であると取る。

第11章 野蛮人の宗教及び部族宗教

人類原始の宗教的生活を探るに就りて、現存未開人の宗教状態を、吾等が研究の出発点となし得る如くも其事は、耳くからい議争された問題である。又は反対の意見を抱いて居る人々は下の如く輔へ——『人類の原始の生産』便

に高等なものであつて、今日の野蛮人の生活は之より堕落し退化したものだと云ふことは、直接に証明は出来ぬけれど、彼等の生活は何千年此かた化石して了つて、全く文明に後れた生活形式に囚はれて居る。それは停滞とも云へるけれど、寧ろ非常なる退歩である。故に吾等もし宗教的生活が初めて萌し来る本来の相を観んとならば、發育しつつある児童の精神を觀察せねばならぬ』と。児童の宗教的發達を觀察することが宗教研究の上に大なる価値を有することは、固より何人も異存のある筈がない。併し乍ら児童の宗教的生活に於ける發達は、外部の事情によりて定められて居る既存の形式を取るものなることを忘れてはならぬ。加之吾等は文明国民の祖先が営める宗教的生活は、今尚ほ最低度の文明に沈淪する現存未開人の化石したる宗教的生活に比すれば、内部的にもつと活潑であり、清新であり、旺盛でもあつたらうとは想つて居るけれども、今日文明国民の住居する諸地方から出て来る先史時代の發掘、並に比較神話学の研究が齎せる結果によれば、人類原始の生活状態と、現存野蛮人の生活形式との間には、種々なる点に於て驚く可き一致が存して居る。従つて吾等は未開人の宗教的生活を以て、最もよく原始時代の宗教を彷彿せしむるものと推定しても誤謬ではないと思ふ。

然らば吾等は孰れの国民及び部族を未開人の中に数ふ可きか。一般にはマレー・ポリネシア人種、アメリカ人種、蒙古人種の一半、殊にシベリヤの蒙古人、及び黒人種等を概称して野蛮人と呼んで居る。但しこは極めて大まかな言ひ方で、此等の人種は各々文化の程度を異にして居る。即ち最も下等なるは南アフリカのブッシュメン人及び中央アフリカの矮小種族等で、マレー・ポリネシア及アメリカ人種は其次に來り、最後に黒人種が最も高等で、或処では殆ど文明の域に進んで来て居る。野蛮人の此の三段階は、先史時代文明の三段階、即ち旧石器時代及び銅器時代に比較し得べくして二三の黒人種に在りては、既に鉄を使用するまでに進んで居るのである。

但し吾等は、今述べたやうな細かい区別を眼中に置くには及ばぬ。吾等は總て此等の人種を一様に觀察し、その共

通の特徴として、一方に於ては一般に共同生活を営む能力なき事、及び他方に於ては全く時間の測定を知らざるが故に、意識して伝へらるる伝説即ち歴史を欠く事の二つを挙げ得る。人々は共同生活を営むに必要な意識と熟慮とを根柢とする殆ど総ての訓練を欠いて居る。彼等は家族及び血族と云ふ自然的関係に結ばれて、粗漫な厖然たる団体を形成して居る。そはアフリカの遊牧群の朝に結んで夕に分るゝに於て見る如き、最も散漫な最も初期の部族生活である。その團結を後代に及ぼさんとすることなきが故に、単に一代の間に止まりて次の代には消滅し去る集団である。

言語の不齊一も亦これがためで、離合集散常なき間に、各種の言語や方言が不斷に影響し合つて居る。野蛮人中の最高位に在りて、比較的最強の組織を有する黒人國すらもこの動搖し易い一時的性質を脱却して居らぬ。此等の団体には人類の共同生活に最も根本的な保障を与へるもの、即ち祖父より父へ、父より子へと幾代にも亘りて伝へらるゝ一般の歴史的伝説を欠いて居る。彼等は此等の伝説の基礎たる可きもの、即ち時間の測定を欠いて居る。而して伝説を保存する最も有力な手段、即ち書写の術と名くべきものは何處にもない。斯くの如くにして歴史なく、過去なく、獲得したる経験の保存がない。斯くの如き人々の生活は、艶なき小舟を浮べて無涯の大洋に漂ふ如きものである。そは微かなる燈火を翳^{かざ}して黒闇裡を彷彿が如きものである。その光は僅かに身の周辺を照らすのみで、前後左右は悉く無限の黒闇に鎖されて居る。四辺を取囲む未知なる無辺の空間、不定なる永遠の時間の中に、人はその果敢なき生活を営んで居る。彼は過去を知らずまた未来を知り得ぬ。彼は只だ現在に生活する。刹那々々の偶然なる出来事に支配されて生活する。

この程度の文明に於ては、人類は根本的に自然に従つて生活を営んで往く。彼の意識には未だ自己と自己を囲む自然との区別がない。蓋し人類が人格的生活を営み、自我と外界との相違を感じるに至るのは、共同的生活、歴史的伝説及び歴史的経験によつて自由なる意識的生活を営み得る能力の獲得に待つのである。総ての未開人の思想中に発見

し得る次の如き特徴も、この自然に従へる生活と関聯して居る。即ち彼は自己を本位として一切の事物を観察し、一切のものは自分と同じもの、自分と同じ生命あるものと断定する。彼は自己の生活より推して一切を説明する。彼は一切の事物は彼自身と同様に感じ、考え、且つ行ふと信ずる。彼は人類と動物との相違に気が付かぬ。人間を動物と同様に取扱つて居る説話や童話などは、皆な此の程度の文明に發生したものである。獸は人の先祖であつて、人は獸に獸は人に變る。勿論動物は物を言ふ。黒人は驢馬が口を利かぬのは怠け者だからだと考へて居るし、アラビア人は朋友に対する如く其馬に話をするし、アメリカ印度人は動物の中にも魔法使が居ると信じて居る。ボルネオの土人は、虎には王様があると信じ、多くの童話には蛇にも王や王女があると書かれて居る。啻に動物のみではない、樹木も亦人間と等しい生命ある存在者である。そは物も言へば、歌ひもするし、血も通つて居る。樹木は人間の先祖で、人間は樹木の子孫である。ヘロスのカッフェル種族は、人を生む木があると信じ、或る説話の中には人を以て蘆から出たものとして居る。加之生物と無生物との区別すらも意識されて居らぬ、殊に生物が運動を有する場合に左様である。河や泉も生命あるものである。タンガニイカ湖畔の黒人は、白人が湖上で疾風巨浪に襲はれた時、船底に俯して祈禱するのは、怒れる湖に姿を見せぬやうにするのだと思つて居る。奔流激潭の中には、犧牲を待ち設くる悪鬼の声が聴こえその姿が見える。又は人が石に化り、石が人に化る。ツール一人は虹を以て嬰兒を浚ひ行く悪魔と考へて居る。茲に吾等が特に注意す可きは、野蛮人が全く事物の因果関係に無智なる事である。彼は常に原因と結果とを混同し、且つその誤れる觀察を基として、全く無関係な事物を因果関係で結び付ける。その殊に適切なる例証は、多くの国民間に行はる、春の鳥の崇拜である。フィンランドは呼子鳥を靈鳥として崇めて居る。呼子鳥が啼き初める頃から、花は開き草木が萌えて全地に春が来る。かくて彼等は呼子鳥を以て地に春光を齎らす不思議な鳥とするのである。同様にメキシコ人及びアメリカ印度人は、春が来ると蜂雀が現はれるのと一様な所から、蜂雀を以て神聖な鳥として居る。

エジプト人の鸚鵡崇拝も、此鳥の現はれるのと、全地に沃土を流し来るナイル河の氾濫とが時を同じうして起るからである。

かくの如く何等の精確なる觀察なしに、四圍の事物にも自己と同様の生命ありとする考へ方は、^{エニシスムス}精靈觀と呼ばれるもので、野蛮人が奉する宗教の精神的根柢も、また此の精靈觀の中に在りとせらるゝのである。

然らば此の精靈觀を根柢とする彼等の宗教は如何なるものであるか。先に吾等は宗教が多かれ少なかれ未知の力に對する畏懼の情を基礎とすること、而して其力は人生に生命を与へまた死滅を齎らし、幸福を下しました災害を釀し、親しくして而も相敵するものなることを述べた。吾等はまた人間が極めて早くから不可思議の力に充ちたる此の未知の世界に気が付き始めた事を述べた。一步を踏み出せば危険に脅かされる此の四辺の未知界は、今や大なる、又は小なる、又は極微なる精靈に充ちたる世界となる。一切を概括し統一して考へることは、未だ彼等の能くせざる所なるが故に、彼等は到る処に多数の小さい力を認める。而して上述の比論^{アーティスムス}によりて其力は自分と同じく生命ある精靈だと考へ、時に強く時に弱くはなるけれど、人間自身よりは不可測なもの、不思議なものと看做されて居る。されば野蛮人の目には、少數の日用品や勝手道具の如き毎日使ひ馴れて敢て怪しむを要せぬものを除けば、多くの事物は皆魔力を具ふる不可解なものに見える。かくて此の誤解から、彼等は自然を以て精靈が住居する大家屋とし、自然現象を以て、精靈が演じ出す氣恠な不眞面目な、時としては乱暴な、怖ろしい芝居だと思ふやうになる。

野蛮人の考では、全世界には精靈が充滿し大なるものにも小なるものにも普く精靈が宿つて居る。降雨、電雷、風雨の如き偉大なる天上の現象には、多くの精靈の力、または一つの大なる力が宿つて居る。泉にも河にも、草にも木にも、岩または山上や山中にも精靈が住んで居る。祖先の靈魂は動物の中に現はれ、蛇の如きは殊に屢々之を宿す。無生物の中にさへ精靈が潜んで居る、高い処の石が突然落ちかかりて崖下の人を殺すのは、自然力の作用でなくし

て、其中に住んで居る悪戯好きな精靈の仕事である。曲つた釘を踏み通した黒人は、之を自分の不注意から来た災難、または偶然の怪我事とは思はないで、釘の中に悪い幽鬼が宿つてゐるからだと考へる。即ち凡そ人目を惹くもの、奇妙なもの、異常なもの、不意に現はれるものは、悉く野蛮人の宗教的注意を喚び起す。天界の現象中で第一に彼等の心を惹くものは電雷である。月蝕、月の盈虚、その出没の際には殆ど總ての野蛮人が到る處で宗教的行事を営んで居る。唐突に起る旱魃、之に伴ふ枯渴、疾病、殊に熱病、頓死等は、總て有力なる精靈の仕事である。形容習慣の奇異なる動物、例へば蛇の如き、さては異常なる力を有するものとして人目を聳たしめる形態の石、及び其他の無生物が、皆な野蛮人の宗教的注意を惹き、之を以て精靈を宿せるものと想像せしめるのである。

次に吾等は此等無数の精靈中より如何なるものを野蛮人が特に宗教崇拜の対象として選び出すかを考へて見よう。かの精靈に対する一般の信仰、人生を取囲む幽鬼に対する恐怖だけでは未だ本来の意味で宗教と云ふ事が出来ない。此等の精靈の中から、一つ又は多くの精靈を選択して、固より初めは殆ど秩序も永続もないけれど、兎に角自分と其の精靈との間に一定の関係を結ぶに至りて、始めて眞の宗教が出来るのである。而して吾等の観察によれば、此程度の文明にある人類は専ら其こころを下等なる精靈に向けて居る。例へば大多数の黒人種は、一の偉大なる天上の存在者即ち天神を知つて居る。こは生命の神であつて、未だ個々の神格に分化せざる天其者に外ならぬ。而してそは雨水と生命とを与へ、嵐を起し、日月星辰の眼を開いて地上を瞰下する神様である。（吾等は黒人の此天上神の觀念が、歐羅亜の影響より出たものだとする必要がない）。黒人種の間には、一方にかくの如き神の觀念があるけれど、而も之に対する宗教的崇拜は、殆ど、或は全く行はれて居らぬ。黒人は此の天上の存在者は、彼等の事などを眼中に置かぬもの、之に祈禱を捧げても自分に都合のよい幸福などを賜はらぬものと信じて居る。又は其の神様が、地上の支配をば更に劣れる精靈どもに委ねて居ると信じ、又は其は白人の神様で黒人のではないときへ信じて居る。かくて黒人

は最も劣れる、最も小さい精靈、呪物及祖先の靈を崇拜して宗教的儀式を営むのである。而してマレー・ボリネシア人の間にも之と同様の現象がある。彼等もまた一の至高神を認め、その神話中には之を世界の創造者として崇めて居るけれど、其の神様に對しては殆ど何等の儀礼も行はれて居らぬ。此處でも實際の宗教は精靈崇拜と祖先崇拜である。

かくの如き根柢から出た宗教的崇拜は、偶然的な且つ變化し易い性質を有して居る。特別の崇拜を受ける精靈は、その時々の経験、小児らしい觀察、一時の思付きなどを基にして、偶然に且つ勝手に選択される。固より此場合にも伝説や風習が多少の勢力を有するけれど、そは常に個人の隨時の發意によりて左右されて居る。かくの如く其信仰の対象は、動搖変化常なくして難駁を極めて居り乍ら、儀礼の形式に至りては甚だしく一様であり且つ單調である。供養の方法の如きも極めて簡単で、或は之を聖樹に懸け、或は之を泉や河の中に投げ込み、或は之を死者や先祖の墓の上に載せて置くだけである。精靈に祈りて得んとする幸福も亦極めて單純な物質的なもの、即ち生命、健康、治病、降雨、豊作、大獵、子宝等である。かくの如き程度にありては宗教は一私事、即ち一個人の関する事たるに過ぎぬ。固より此時でも家族、種族、部族の如き人類の共同團体が、全團体の守護神として尊崇するに更に高等な更に有力な精靈があるけれど、各個人または各家族の守護神たる小精靈の方が、實際に於て遙かに重視されて居る。多くの黒人種間には個々の黒人に各々一個の守護精靈ありとの信仰が行はれて居る。加之黒人は、一つ又は多くの呪物を所有して非常に之を大切にし、決して他人の手に渡す事をせぬのである。されば此の段階の宗教的生活には、全く道徳的要素が欠けて居る。共同生活と云ふ觀念は、未だ何處でも勢力を得て居らぬ。宗教内に行はれる一切の事は、總て赤裸裸の利益、純乎たる感覺的主我主義の結果である。与へるは取らむがためであつて、供養は世間的の幸福を贏ち得るためである。人々は立所に御利益あれかしと待構へて居る。若し一つの精靈を崇拜しても、具体的の利益がなかつた

時には、他の精靈を以て之に代へる。精靈と其崇拜者との間には何等の道徳的關係がない。精靈其者すら決して道徳的存在とは考へられて居らぬ。之を畏れる心が之を尊ぶ心よりも勝つてゐる時があるけれど、そは善とも惡とも考へられて居らぬ。そは寧ろ一定の性格を有せざるものである。そは喜怒の程を測り難き、驚くべき、奇妙なもので、如何にしてその不思議な性行に対すべきかを知つて居る人には深切を尽すものである。

孤立せる事実のみが無限に多くして、而も宗教の中核となるべき實際の力が極めて乏しき此混沌の世界から、吾等は二三の具体的現象を捉へることが出来る。即ち吾等は最も低度の宗教的生活に於ては呪物崇拜及び魔術が行はれ、一步進んでは死者崇拜及び祖先崇拜が行はれることを知り得る。

呪物崇拜は黒人種に属する殆ど總ての國民並種族間に於て、特に弘く行はれて居る。呪物崇拜とは、夫れ自身ではなく無価値な小さい物、または極微な物を、恰も人体に人心の宿る如く、一個の精靈が其物に宿つて活動して居ると云ふ信仰の下に、之を崇拜する事である。一方に於て呪物崇拜は、其対象が微小な瑣末なもので、唯だそれ丈けでは崇拜を受ける理由の無いものなる点に於て、自然崇拜即ち自然力の崇拜と區別せらる可きものである。大木や泉や河なんどの崇拜は、何等かの点で人間よりも優れる力が崇拜されて居る限り、之を呪物崇拜と呼ぶ事が出来ぬ。而して他方に於て呪物崇拜は、厳格に偶像崇拜と區別す可きものである。呪物崇拜の対象は定形の有無に關せぬものであり人工呪物できても偶像の場合のやうにその形体並にその表はす意味が重要視されて居るのでない。されば呪物崇拜は高き力を有して居ると想像されたものに対する總ての呪捧の中で、最も根柢なきものと思はれる。

然らば斯くの如き呪物崇拜は如何にして起るか。そは上に述べた精靈の信仰を根本の予想として居る。此の信仰によれば精靈は到る處にあるもので、最も微細なもの、中にも宿つて居る。野蛮人は何かの機會に一定のものの中に有力な精靈が宿つて居ると信する。例へば先に述べたように、崖から石が落ちて人を殺したり、釘が野蛮人の足を突通

する事がある。すると彼等は誤れる因果関係を結び付けて此等を崇拜するやうになる。或る野蛮人が難破船の錨を持帰つたら間もなく死んでしまつた、其後近隣の人々は其錨を呪物として崇拜したと云ふ如きは、最も適切な例証である。而して伝説や習慣が之に纏綿してくる。呪物は祖父から父へ、父から子へと伝へられて行く。即ち何等かの事情で野蛮人が一物の中に有力なる精靈宿れりとの信仰を抱きさへすれば、唯だ夫れだけで呪物崇拜が起るのである。かくて野蛮人は此の精靈と交通を始める。而して交通の方法は簡単を極めて居る。彼はその呪物を吾がものとする。彼は之を小屋の中に飾り、又は肌身に着けて置く。彼はその精靈即ち呪物を、謹持し潤色し裝飾する、而して供物も捧げる。若し此の呪物を崇めてから、彼の生活が息災安穩であつた場合には、野蛮人は、精靈の冥加を忝く思ひ、氣強く感ずるのである。これが即ち呪物奉仕である。

乍併かゝる交通は一般に永く続かぬ。そは野蛮人の偶然なる生活経験を基礎とするものなるが故に、若し彼が或る呪物を自分の守護神として選んでから、彼の生活が幸福であつた場合には益々崇拜の念を高めるけれど、若し然らざる場合には、直ちに之を放棄して新たに他の呪物を選ぶのである。されば多くの野蛮人は、沢山の呪物を持つて居て第一の呪物は良き妻と多くの子女とを与へ、第二は旅路を安全にし、第三は疫病を防ぎ、第四、第五は大豊作を賜ふものと信じて居る。但し野蛮人と其の奉仕する呪物との関係に於ても、永続的な感動的なものが全く無いのではない。例へばドーデの『ジャック』の中には、黒人の子供が其の呪物に対する無限の信頼、其間の眞実にして敬虔なる関係が、最も巧みに描き出されて居る。

宗教が尚かくの如き程度に在る間は、本来の呪物崇拜よりも魔術の方が更に広く行はれて居る。宗教とは一般に精靈を信する事であるから、宗教的生活の指導者とは、精靈の性行を熟知し、如何にして之を取扱ふべきかを知つてゐ人々である。黒人間の呪術者及び降雨者、アメリカ印度人間の治病者、蒙古人間のシャマン、アラビアのデルキッシ

ニ、印度のファキル等は、皆な同一現象に外ならぬ。魔術者とは常に精靈の服従を受け、善良なる精靈に奉仕せられ、呪詛によりて悪靈を駆逐し得る人である。之を行ふ方法は秘密の儀式、魔力ある道具、秘密の呪詛である。この魔法の世界も、一見すれば複雑混沌を極めて居るけれど、実は其間の現象は極端に単調であり一様である。此等の観念は、野蛮人をして魔術者は單に精靈界と特別なる關係を結んで居るだけではなく、彼自身と或る一個の精靈との間に、最も親密な交通があると云ふ信仰を抱かしめるやうになる。若し精靈にして下は木石草木等の無生物に至るまで、凡そ物と云ふ物の中に宿り得るものとすれば、大なる又は小なる力を有する精靈が人間の中に宿つて、其人の自我を逐ひ出し、又は全く之を自分の為に使ふことも出来る筈である。かくの如くにして或る精靈が、永久的に又は一時的に人間の中に宿り、その驚く可き力を以て未来を語り、疫病を治し雨を降らし得ると云ふ信仰が起る。黒人間の呪術者と云ふのは、単に有力なる呪物を持つて居るだけではなく、其人自身が一個の呪物たる場合が多い。即ち精靈が彼に乗り移つて、彼と此とが人格的一致を遂げて居るのである。此等の觀念が原になつて、宗教上の修法が弘く行はれるやうになる。精靈を人体に呼び入れるために、最も奇体な、然れども全く無意味と云ふべからざる方法が講ぜられる。魔術者は数週又は数月の間寂寞の境を彷徨し、食ふ事をせず飲む事もせず、難行苦行に身を窶す。人間の精神的生活を極度の高調に達せしめ、其の反動として硬直痙攣を起し、魔睡的な、睡遊的な夢幻境に入らむために、在りと在らゆる手段を尽す。此際に音楽は最も大切な役割を勤める。懶けな太鼓の音、甲高い鉦の声、抑揚のない笛の音に連れ、初夜又は深夜に、怪しの松明を点し、立ち登る香の煙に包まれ、息を殺してじつと視入る大衆の前で、魔術者は狂乱の様で踊りまはり、遂には恐ろしき叫び声を上げて狂ひ立ち、最後に疲れ果てて其場に倒れ、口よりは泡を吹いて仮死の状態に陥つて了ふ。彼が此状態に於て言ひ又は行ふ事は、彼自身が之をするのではなくして、彼に憑きたる精靈の仕業である。此等の現象は、決して全然無用な根拠なき妄想の所産とすることが出来ぬ。そは人間の変

態心理的現象、宗教狂、宗教的昏暭、宗教的失神の現象である。そは神秘的な、或点は不可解な催眠状態、暗示、及び自己暗示の現象である。そは睡遊状態及び透視可能の状態である。そは神秘に富める人間の精神的生活の不可思議的一面である。而して總て此等の現象は、野蛮人の精神状態、即ち論理的思想の皆無、全く素朴な信仰、飽くまで精靈を信じて疑はざる氣分の為に、尚更力強く且つ不思議なものとなつて現はれるに違ひない。而して總て此等は、現に目前に存在する精神的生活の事実を根拠とし、之を以て動いて居る為に、之から生じた信仰も従つて弘く行はれ長く続いて来た。

次に吾等は此段階に屬する宗教の中で、最も理解し易き最も同情すべき今一つの宗教即ち死者崇拜を研究しよう。凡そ宗教の形式の中で、是程弘く行はれて居るものはない。吾等は一層進化した種族及宗教の中にさへ、其發達の根柢となれる死者崇拜祖先崇拜を認める事が出来る。支那の如きは今日でさへも死者の崇拜が最も盛んに行はれ、其余りに盛んなるが故に殆ど歐洲文明の普及を不可能ならしめて居る。吾等の眼の及ぶ限り、到る処に死者崇拜が行はれて居る。されば或学者は一切の宗教の起原を死者崇拜に求めて居る。

死者崇拜は人の生命と本質とに関するて普ねく行はれて居る素朴な観念を根柢として居る。其観念に従へば、人間の中には肉体より独立せる活物即ち靈魂が宿つて居ると云ふ事は自明の理である。そは奇妙な小さいもので、打つたり叩いたりして血液を脈管に流れしむるもの、憤怒して紅を潮する時に顔面に表はれてくるもの、吾等の思想や決断や行動の源になつて居るものである。そは夢の中では全く独立に動いて居る。そは人体を脱け出でて遠く彷彿、不思議なものを見て歩く。そは極微な、細緻な、柔軟な、殆ど目に見えぬものである。乍併野蛮人には少しも精神的存在と云ふ觀念がないのだから、固より無形のものではない。そは稀薄な微細な体躯を具へて居る。そは臨終の息と共に死者の唇から逃げ去つて了ふ。そは呼吸であり、風であり、影であり、幽靈である。種々なる人種が皆なかかる概念を

表はす名称を之に与へて居る。

死が襲ひ来れば人間の肉体は壊れて了ふ。乍併一般の人は靈魂は決して死なぬと確信して居る。そは肉体を脱け出でて、幻の如く影の如き自家の存在を続けて行く。人々は夢の中で、又は覚めて居る時でも四ッ辻や薄暗がりの淋しい場所で、生前の姿をした死者を見ることがある。そは實際見たのであるから事実でなければならぬ。靈魂と云ふものは、肉体の近所に残つて居て、暮のまはりに集まつて居るものである。其処を離れる事は出来るが、好んで復た帰つて来る。されば墓には幽靈の出入の為に小さい孔を明けて置くのが常である。その例は多くの古墳に認められるが印度及高加索の古い塚には殊に之が多い。或は又肉体が瓦壊して仕舞へば靈魂も滅んで了ふと云ふ思想も行はれる。屍体を割いて臓腑を去り、其中に填薬して腐敗を防ぐ事や、バルザムを塗り乾かして木乃伊とする事などが弘く行はれたのは、此の觀念が原になつて居る。人々は靈魂の命を長からしめるために凡ゆる手段を講じて屍体の保存を図るのである。而して此の信仰は埃及人の間に最も弘く且つ強く行はれて居た。

次で人間を取囲む死者の靈魂は、宗教的畏懼と崇拜とを喚起する。何となれば此等の靈魂は精靈其者になるからである。此思想にも宗教の根本感情、即ち未知のものに対する恐怖又は畏懼の情が着き纏つてゐる。彼等は滅多に人間の眼に見えぬ未知の世界に住んで居る。彼等は動物の姿をとりて再び体を表はすこともある、殊に不思議な神秘な蛇の姿となりて子孫の前に現はれることがよくある。藪原を踏み分けて獲物を探し歩く猟師の前に、突然思ひもよらぬ異形の動物が現はれて、じつと其猟師を見入つたとする。爾來彼は自分の先祖がかかる姿を取つて現はれるのだと信じて了ふ。死者とは墓の辺りに彷ひて逢魔あぶきがどき時にのみ見得る靈魂たるものにもせよ、又は再び何等かの姿をとりて体を表はし得るものたるにせよ、兎に角彼等は神秘の力をもつて動いて居る。仮令彼等は色々の事で生者の力を頼つては

居るとは言へ肉身を具する生者よりも力あるもの、少なくとも異れる力を有するものである。死者は飽くまでも自分の権利を主張する。されば死者に對して約束に背くものは禍である。死者は影の如き目に見えぬ手を伸べて、有無を云はせず自分に屬するものを引き寄せて丁度。ゲルハルト・ハウプトマンは『フールマン・ヘンシェル』の中に最も見事に此間の消息を描き出して居る。而して一方にはまた生者と死者との間に、共同交親の情が起つて、死者は生者に、生者は死者に依属し合ふやうになる。死者は其の子孫の供養を受けその報償として彼等を護つてやるのである。

死者崇拜に於ては、不可思議なもの奇異なものに対する恐怖、神怪な世界に対する畏懼、及び之を脱却せんとの努力が、往々にして信頼相愛の情よりも勝つてゐる事が多い。死者崇拜、殊に墳墓崇拜は、多くの点に於て死者が再び還り來りて災を加へぬやうにとの不斷の用心に過ぎぬ觀がある。南アフリカの黒人間には、酋長が死ねば悉くその住居をたたみ、部落を挙つて遠き旅に出で、年経てから帰つて来る風習がある。彼等は其地に彷彿死者の靈を怖れるのである。死者の小屋には長い間何人も敢て之に入らぬ、又は何時まで経つても之に入らぬ。そは死者の所有であるから無暗に踏込めば復仇を受けねばならぬのである。中央アフリカ及びアフリカには或種族（恐らくはホッテントット）の南下の道筋を示して居る累々たる石の塚がある。而して今日も尚その前を通る人は、塚の上に石を投げて行く習慣が残つて居るが、こは死者の害を免れる禁厭だと解釈されて居る。もと此等の石塚は死者の埋葬地で、之に石を投げるのは、死者が帰つて来るのを困難にするため又は生者と死者との間に全く縁が断れた事を示すためであつた。此点で殊に吾等の興味を喚ぶのは古代印度の葬式である。印度では既に其頃から火葬が行はれて居た。而して遺骨は小屋又は村の近處に埋めるのであるが、其時に下のやうな文句を唱へる。『われ汝に土を撒く、吾には災なれ』。死者を生者から遠ざける第二の儀式も之と密接なる關係がある。即ち葬式後日数が経つて、最早死者の力が無くなつたと思ふ頃に、再び墓を發いて遺骨を遠方に移す。遠く路を離れて村も見えぬ所に墓を選び、帰路を死者に分らぬやうにする。

そして人々は死者が如何にしても村に帰る事の出来ぬやうに色々な方法を講じ、下のやうな事を云ひ乍ら帰つて来る。

「吾は死者と縁を断つた、今日の祈りは幸だつた。これから帰つて踊つたり騒いだりしよう、神様は吾等に長命を賜はつた」この火葬の風習は弘く行はれて居るが、始めは主として死者の災を免れる一種の禁厭であつたと思はれる。屍体を焼くのは、滅び行く五体に着き纏へる總ての恐ろしいもの、總ての幽靈の怖れを、出来るだけ速かに逐払ふためであつた。天上に立ち登る純淨なる炎は、一切のものを運び去りて、心を傷ましめる幽靈の怖れを払拭してくれると信せられて居た。かう云う風の禁厭は今日に於ても全く消滅して居らぬ。即ち死者を運び出す時には足を前にして置かなければ屹度また家に帰ると矢筈しく云つたり、棺が出ると今迄明けて置いた窓を周章^{あわて}て締切つたりするのは、皆之と同性質の迷信である。幽靈に対する恐怖の念は、深く人心に刻み込まれて、今日までも全く之を根絶することが出来ぬ。

乍併生活と死者とを結び付けるものは始めより唯だ恐怖の情のみではなく、親愛の情、敬虔の念が固より存在して居る。彼等は死者に必要な供養をする。死者と云ふ憐れな精靈は、色々なものがなければ生きて往かれぬ、食物も要るし着物も要る、寒暑も感じ飢渴も感する。されば人々は之に食物や着物を供へる。而して死者は水氣のものを啜ると云ふ想像と最もよく適合するので、飲物を供へる事が一番弘く行はれて居る。供儀の方法は極めて無造作で、例へば地下に通ふ孔を明けて置いて、之から単に水を注ぎ込むのである。古代エジプト人は棺を納めて置く屍室の前に、小さい入口によつて之と相通する一室を設け、此處に飲食物其他の供物を上げて居た。印度人は其の祖先を祭るに当たり彼が崇める先代の数に応じて、田圃の中に三条の溝を掘り、其中に御供の饅頭を置き、跪いて敬虔なる祈禱を捧げ、先祖の靈が來り饗けんことを願ふ。そして祈禱が終れば祖先が屹度供物を饗けたものと信じて其の饅頭を取り去つて了ふのである。埋葬が済んでから、及び毎年の命日に当りては、一族挙りて墓の近處に集まり、死者と一緒に食事を

する。多くの国では毎年一度死者の祭日がある。此日に死者は墓を出で生者の処に来りて供物を求める。人々は家の前に食物や着物を出して置き、又は墓を綺麗に飾り立てる。そして最後に死者に向つてもう帰つて下さい」と丁寧にお願ひする。こは希臘人の『死者の靈、門より出でよ』と云ふのと同じである。而して人々は箒を取つて精霊の住家を掃除するのである。ペルシャのフラヅルディガン祭、ギリシヤのアンテスティル祭、ゲルマンの死人祭、孟蘭盆会其他同様の会式は、總て非常な類似を有して居る。

此等の風習は固より単に敬虔の情から起つたものではない、死者は犠牲を要求する。若し人々が其要求に応じなければ祟りがあるかも知れぬ。若し鄭重に供養してやれば、福が授かるかも知れぬ。かくの如き打算は此等の風習の一つの原因になつて居る。乍併之と同時に他方に於て敬虔、畏敬、相愛の念が常に伴なつて居る。迷信や利己主義の厭ふ可き分子を交ふるに拘はらず、死者崇拜が宗教として高き価値を有して居るのは實に之あるが為である。

人の眼は見えざる世界に眺め入り、生に始まり死に終る人生の運命を見窮めんとする。祖先崇拜は父祖と子孫とを結び付ける連鎖である。子は死せる父を供養し、其子はまた彼を同様に供養するであらう。家族は其家の墳墓を中心として相集り、各家族が共同の祖先を崇拜するに至れば家族は即ち部族に発達するのである。

野蛮人の多かれ少なかれ非秩序的な生活と、國家を根柢とする国民的生活との中間に位するものは部族生活である。部族生活は常に動搖して止まざる過渡的組織なるが故に、その特質を領会し、その眞面目を捉へることは極めて困難である。部族生活の傾向は到る処に之を認め得べく、所謂未開人の中にも既に茲に至らんとする徵候がある。乍併其組織の強弱及びその到達せる文化の程度に至りては決して一様でない。此点に関して宗教史は吾等に示すに彼等の間に非常な差違のあることを以てする。秩序ある部族生活は、宗教が精霊信仰の低級なる利己的形式を脱して新し

き形式を取り、茲に全団体の最大の関心事となつて、団体生活に強固なる土台と内部的一致とを与ふるに及んで、始めて可能である。かくの如き部族宗教の絶好なる例は、小亞細亞に於けるセム種族の宗教である。旧約の中に現はれたる彼の古き部族生活の跡、及び諸所に散見する古代セム文明に関する記事、マホメット以前のアラビア人の生活、及びマホメット並に其の後継者が到達せる文明より退化して、再び部族生活を営むやうになつた今日の多数の亞拉比亞人の生活に関する吾等の知識は、總て此等の部族宗教を論ずるに當りて看過すべからざるものである。アメリカ印度人の部族生活も、前者に比して低級ではあるが同種類のものであり、最後に中央及南アメリカの諸国に於て見る停滞し化石した古代文化の跡も、心に留めて置かねばならぬ。

純粹なる部族生活に於ては、血族關係と云ふ思想が団体の至要の中核となつて居る。而して国民生活との相違点は取りも直さず此の中心觀念に在る。固より事實に於て大なる部族間に悉く血族の關係があるのでなく、又は決して一家族から出たのでもない。一つの種族は實際は種々なる家族の結合より生じたものに違ひないが、夫にも拘はらず血族の關係と云ふ假定は動かすべからざるものになつて居る。

一の種族に入ることは同じ血族の人となることである。但し此の同血族と云ふ觀念は、全然物質的であり具体的である。一般の觀念に従へば、生命は血液の中にある、従つて共同の血液とは共同の生命を意味し、従つてまた血族關係を人工的に結ぶ事も可能になる。兄弟を契る總ての儀式は、皆此の觀念を基礎として居る。例へばある地方人が一部族に來りて加入を請ひ、その許可を得たりとせば、彼は該部族の酋長又は其他の人に対して兄弟の誓立てねばならぬ。即ち雙方で脈管を切りて血を流し、互に其血を啜り合へば、茲に両者の間に同じ血液が流れ、同じ生命が通ふことになつて、血族關係が成り立つのである。かくして新來の者も全部族と同血族になる。時にはまた全部族の一人一人に兄弟の誓を立てる事もある。次で其の部族が神聖なものとして崇めて居る動物を屠り、全部族が其式に連なつ

て、式の第一目的たる動物の血の分前に与かる。この聖餐式では、屠つた動物の肉を料理する事なく、血の垂れて居る其体を生で食ふ習慣さへ行はれて居る。

かかる共同生活は、共通の血液と云ふ事を基礎とするが故に、その根本の原則は、種族の各員が絶対的に此の共同生活の神聖を保つ事に在る。されば部族の無上法は、血に血を以て報ゆる復仇である。個人の生命を護る事及び『目には目、歯には歯、命には命』と云ふ原則に従つて、傷けられ又は殺された個人の仇を復すと云ふ事は、種族が履行すべき絶対的に神聖なる義務であつた。されば種族生活には、復仇を目的とする族闘が間断なく行はれる。或る種族に属する一人が他種族の者に殺された場合には、殺害者又は其の家族の生命を奪ひて、死者の為に仇を復す事は種族全体の負ふべき責任と定められて居る。而して復仇された種族は更に之に対して復仇を企てるから、一方の種族が全く殺し尽されて滅亡し終るまでは鬪争が止まぬ。かくて此の族闘は、種族生活をして国民生活に発展せしむべき一切の道を杜絶して了ふ。總て發達の行はれた処は、大なる努力の結果によつて、此の族闘が矯正せられ、此怖るべき風習が廃止せられた処である。

此の階段に在る宗教がとれる形式は、頗る特徴に富んで居る。吾等は一見してその進歩の跡を認める。種族生活に於ては、一般の神々、又は一の普遍なる神格に対する崇拜が、最も勢力を占める。宗教は最早や一個人の私事ではない。固より個人的崇拜は、共同の崇拜と相並んで或る程度までは行はれて居る。生靈や呪物に対する信仰、魔術及び禁厭、並に一家族の祖先崇拜は依然として行はれて居る。乍併共同して神を崇拜することが、次第次第に勢力を得てくる。従つて崇拜の対象を選ぶに当りても、最早や偶然の出来事、又は個人隨時の發意による事なく、更に根柢あり更に確實性あり、更に永続的の關係あるものが選択される。信仰は一の伝説となり、或は已に一の歴史となる。而して同様の程度に於て畏敬の念は人間以上の力に對して向けられる。此處で宗教は一定の發達点に到着したのである。

孤立の生活を営む野蛮人は、人間以上の力に對して、只だ漠然たる驚異の情と、臆病な畏怖の念とを抱く。彼は此等の力が自分の為に存在して居ると考へる事が出来なかつた。然るに共同生活に於ては、人間の宗教的機能が發達してきた。今や彼はその生命の根源を、超人的威力に對する信仰の中に見出したのである。

かくて此の段階に於ては、天及び天体に対する崇拜が明かに現はれてくる。生命と光明とを与へる光り輝く日と月とは、就中崇拜の対象となつたが、殊に月の方が余計に尊ばれた。月は夜を照らす不思議な星と思はれて居た。恐らく彼等は、昼の光が太陽から来ることを知らなかつたのである。月は天上に在りて最も捕捉し難き、自在な運動を為して居る。そは隠れては現はれ、死しては蘇る。最古の暦は月の変化と其の進行とを基礎として造られた。かくて月神は日神よりも余計に尊敬せられ、独逸語を始め多くの國語に於て、月には男性を与へ、日には女性を与へるやうになつた。次では風雨神が最も多く崇拜された。イスラエルの神なるエホヴも始めは風雨の神であつた。天神の崇拜、即ち未だ上述の如き種々なる個々の力に分化せずして、或は雷を鳴らし、電を閃かし、或は雨を降らし、嵐を起し、或は光り輝き、或は光を失ふ天其者の崇拜も、最も広く行はれた。ドヤウス・ピタル（印度）即ツイオス（希臘）即ジユビテル（羅馬）即ティウス（日耳曼）と云ふ有名な言語学上の発見により、吾等はインド・ゲルマン人種が、尚ほ未だ個々の種族に分れぬ以前に等しく同一の天神を挙して居たことを知り得た。大地の神々に對しても特別なる尊敬を払つて居た。少くとも吾等が熟知して居るセム人の部族宗教に於ては左様であつた。沃野を与へる地の神々は、シリア・アラビヤの砂漠に住む遊牧人種の間に盛んに崇拜された。一遊牧種族が旅路に上つたと想像せよ。目も遙なる水平線の彼方まで、茫漠として一面の砂原が怖ろしく单调に拡がつて居る。見渡す限り生命の跡を止めぬ。焼くが如き太陽は真上から照り付ける。体中の毛孔には細かい砂が隙間なく入り込む。人も獸も殆ど死なん許りである。然るに忽然として光景が一変する。水平線の彼方には亭々たる喬木聳え、大地の色は次第に變り行き、一足毎に緑が濃

くなる。進み行く程に身はやがて亭々たる椰子の木蔭に在る。泉は滾々と湧いて、渴き切つた体に水分を与へ、鬱々たる草木が全地を蔽うて居る。そは恰も生と死との対照をなして居る。砂漠の只中に此の驚嘆すべき生命を創り出せるは何者なるぞ。驚嘆すべき大地の偉力でないか。かくて人は此處に其の偉力を現はしたる大地に對して心の底から崇拜の念を起す。人は此神を女性と考へて、之を母なる地の神と呼ぶ。カナン及フェニシア種族の神なるバール及びアスターは、もと豊饒の神、地の神であつた。然るに茲で注意すべきは此等の豊饒神が全く異類の神格と結び付けられた事である。蓋し一般の信仰に従へば、地下には死者が居る、少くとも火葬によりて全然滅び果てざる死者が居る。而して人々は死者も亦自分等と同じく共同生活を営み、多かれ少なかれ畏敬すべき死者の神々を酋長として戴いて居ると考へる。かくて此等の死神は屢々豊饒の神と結び付けられる。其最もよき例は希臘の神話である。デメーテル、ヘルセフォーネ、ブルートー等は、皆な二重神格を有して、一面に於ては下界の神、他面に於ては豊饒の神、收穫の神となつて居る。

大体に於て部族が崇める神々の数は少くなつた。部族としての生活は本来单一なもので、従つて多くの神を必要とせぬ。その生活は極めて単純で、生活の範囲は未だ分化して居らぬ。従つて其関する所は二三の大なる生活要求に過ぎぬ。されば此の要求に応する神は多きを要せぬ。次には一つの部族が只だ一つの神を有する場合がある。こは固より一神教でない。或は其の部族は次の日には二つの神を崇めるかも知れぬ。他部族の神も、已れ等の神と同じく、神として許されて居る。同一の神が男神女神に分化する例も沢山ある。バールとアスターの如き其一例である。

部族と其神との関係は全然自然的である。その根本の原則は、自然的關係即ち血族關係である。神は種族に生命を与へたもので、文字通りの意味で種族の父または母である。されば種族宗教は屢々單純なる祖先崇拜に本づいて居てこれが特別の方法で超人力の崇拜と結合されたと思はれることがある。此世の始めに天上の諸神が人間の相すがたをとりて

地上に降り、種族の先祖となれる子孫を遺して行つたと云ふ神話又は人間が大地から生れ出でたと云ふやうな神話は到る處に在る。また或種族、若くは国民の先祖は、母なる地の神が親ら産んだのであるとも言ぜられて居る。此の祖先崇拜並に英雄崇拜は低級の種族生活に於て極めて奇異なる形式を取つて居る。吾等は今ここに詳述する暇がないから簡単に之に言及して置く。こは部族の祖先は或動物でそれが人間である該部族の母と結婚したと云ふ信仰である。かかる信仰は人類と動物との間に明瞭なる区別が意識されず、且つ人間の靈魂は動物の相すがたをとりて現はれ得ると信せられた時代に発したものと思はねばならぬ。而して先祖の中で父の方が常に異形のもので、母の方が人間になつて居ることは此等の思想の起原が一般に母系相続が行はれて、血族關係・主従關係は、母を本位として居た時代に在る事を示して居る。この信仰の結果として、或る部族の父祖として現はれた動物の種類は、該部族にとりて神聖にして犯す可からざるものとなる。この奇異なる信仰の最も良い例はトーテム崇拜と呼ばれるアメリカ印度人の宗教であるが、セム種族の間にもトーテム崇拜があると信ぜられて居る。其他多くの有名な説話、例へばツォイスが動物の姿を現はしたり結婚したりする話、またはロムルス・レームスの話の如きは、同じくトーテム崇拜の形跡を示して居る。

上の如き文化の程度に在る人類の間には、血族關係と云ふ事を根柢として種々な奇異なる儀礼が行はれる。部族と神との関係は血族の關係であるから、この關係を新たにし且つ強くする事が、屢々儀礼の最後の目的となつて居る。かかる關係は部族の犯罪、または神々の憤怒によりて容易に強くも弱くもなる。従つて神と部族とが更めて同族の好讐を結ばねばならぬ場合がある。かかる時には多くは該部族の神聖視する動物を屠つて之を神に捧げ、其血を祭壇に満ぎて神に供へ、残れる血を部族が飲めば、部族との間には再び同じ血液が通ふやうになるのである。出埃及記の第廿四章第一乃至第八節に記されたモーゼの『誓約の供儀』は、之と密接に関係した実例で、吾等に教ふる所多い記事である。之によればモーゼは屠れる牛の血を鉢に容れ、その血の半ばを壇の上に満ぎ、残りの半ばを人々に満いだ

とある。此場合に血を飲む事をせずして単に之を灌ぐに止めたのは、人間が生血を味ふ事を厭ふやうになつたからである。而して此際に明かに『こは契約の血なり』と宣言されて居る。かくして供犠の儀式は神と人とを密接に結合する云ふ見地から、一種の聖晩餐のやうなものになつてくる。メキシコの宗教で行はれる儀礼の中には、特に此種の仰々しい式がある。而してかの最も怖るべき人身御供と人肉頌食の風習とが之に伴つて居る。かかる場合に人身を犠牲にする事が最も神聖視されるのは、極めて当然の事であるが、メキシコの宗教には斯くの如き最も厭ふべき儀式が余りに夥しいのでスペイン人が始めて此等の風習を知つた時に、之を以て悪魔に教へられて基督教の神聖なる密儀を模倣せる漬神の所業と思つた位であつた。乍併こは出来得るならば肉身までも神と一致せん事を渴望する至深の宗教的衝動が、低級の部族の間に厭はしき形をとりて現はれたので、後にカトリック教の密儀の観念となり、堂々たる形に於て最も弘く行はれたのも、実は此根本的衝動の発現に外ならぬ。

斯くの如くにして今や神々は部族生活の保護者となつた。而も部族を守護するは神々自身を守護する事で、部族の滅亡は神々自身の滅亡に外ならなかつた。故に神々は血を以て血に報ゆる復仇や族闘の守護者となつたのである。後代のギリシャ人の国民的信仰の中にも、光明の神なるオリュムポスの諸神によりて其の権力を奪はれた昔の憂鬱な夜の神々が、部族間の犯すべからざる法律と族闘との守護者であつたことを明かに認め得る。かく言へば諸君はかの復仇を事として常に殺害者の後を追ふオイメニーデやエリンネの姿を想ひ浮べるであらう。『夜の怨靈なる彼等は、常に讐敵の跡を追蹤して居る』部族生活の守護者として、神は先づ戦争の神であつた。吾等は最古の聖殿及び契約の櫃等によりて、エホブも昔はイスラエルの軍神であつた事を知り得る。次に種族の神々は地に豊饒を賜ふ神であつた。人々は心勇む收穫時に、最も篤く神々を念ひ、喜んで之に供物を捧げ、身も心も神様のものだと感じて居た。セム種族に於ては神様を單に主人・女主人・王・女王などと呼んで居た。而して神に対する絶対的献身の余弊として、か

の怖る可き人身御供の現象を生じ、小児及び女子の節操を神の犠牲とするに至つた。メキシコの人身御供のことは前に述べた。モロホに小児を擣げる風習は、エレミアの頃まで行はれて居た。フェニシアより来れる北アフリカのブニ人の間には、ハミルカー及びハンニバルの頃まで人身御供が盛に行はれて居た。テルトゥリアンは紀元後二世紀に北アフリカに行はれた人身御供の事を書いて居る。カナン・シリア人の間では、アスターに娼婦を奉仕せしむるのが普通の事になつて居た。ハムラビ法典の中にさへも、神に仕ふる処女及び神に仕ふる娼婦の事を記して居るから、この風習は極めて古くから行はれたものに違ひない。

吾等は可なり研究の歩を進めて來た。宗教的生活は既に一層高等なる形式に向つて努力を始め、個人の勝手な要求や空想の域を脱して、普遍の信仰に入り始めた。宗教は共同団体の関心事となり、人類の共同生活の基礎になつた。共同の信仰に於て人々は超人力を崇拜し始めた。宗教生活は最早エゴイズムの舞台ではなくなつた。宗教の中に道德的分子が入つて來た。固より始めは全く部族生活の制限と束縛とを受けて居たけれど、兎に角何等か道徳的のものが動き始めて來た。一人は他人のため、団体は一人のため、部分は全体のために存在すると云ふ感情は、義務の感覚を喚び起した。尤もこは上に述べた復仇・族闘・人身犠牲・節操犠牲の如き最も怖るべき形式を取つて現はれて居る。されど之と同時に絶対的畏敬の情が動き始めた。神は王者としての全権を有し、人は之に服従すべきものとなつた。吾等は宗教の世界を旅して此處まで辿り着いた、されど行先は尚遠遠である。

第三章 国 民 宗 教

多くの部族の結合によりて国民的生活が発達する。例へばバビロンはバビロン平野の聯合都市の覇權を握り、茲に

バビロンの世界的王国が出来た。エジプトでは個々の群衆相結んで王国となり、イスラエル種族はモーゼの下に一国民となり、アラビアのペドゥイン族はマホメットに強制せられて国民的統一を与へられるやうになつた。部族生活より国民生活に移るに当つては、種族生活の根柢となつて居た血族の関係、及び血統の同一と云ふ仮定が、第一に消滅してしまつ。血を以て血に報ゆる復仇や族闘は跡を絶ちて、制定せられた法律が之に代る。同族又は家族は、一族の者が殺される度毎に復仇を企てるやうなことをしなくなつた。権力を握つて居る人々は、社会全体の利害休戚を念頭に置き、法律の神聖を保護して居る。かくて公法の観念が発達する。

社会を結び付ける新たなる絆が出来て共同生活の内容は著しく豊富になる。国民は社会全体に関する幸福に心を労する。分業が行はれて軍人・農夫・工作者等が分れてくる。戦争は尚ほ共同生活の最も重要な仕事ではあるけれど、單に之のみが重要なのではない。平和の仕事、即ち工業・商業・多人数の力に待つ大建築・初期の芸術・司法上の制度・社会上の設備が、戦争と相並んで行はれる。国民は同一の歴史の下に生き、且つ其歴史を永く心に止め、少くとも其の梗概を記憶しようと努める。時間を測る法が出来、最も幼稚な方法から文字を書く事も発達してくる。過去の出来事、祖先の偉業等は、主として詩歌に謡はれて、父祖の口より子孫の耳へ伝はり益々社会の結合を固くする。単純なる自然的関係の代りに、道徳的・人格的・歴史的関係が、人類の共同生活に入つてくる。

此新しき文明状態に対しても、之に相応する新しき宗教がなければならぬ。吾等は一定の形あり、特質ある多くの国民宗教を認める。而して此等は先づ二つの種類に分ける事が出来る。第一は化石せる文明國の宗教、即ちメキシコ・ペルー・エジプト等の宗教、及び支那、日本等の原始宗教で、第二は進歩的国民の宗教、即ちセム及びインド・ゲルマン民族の宗教である。バビロン及びアッシリアの宗教、古代のイスラエル及びフェニシアの宗教、古代印度の宗教等は前者に属し、ヘルシャ・ギリシャ・ローマ・スラヴ・ゲルマンの宗教は後者に属する。吾等は最初に国民的生

活を根柢とする此等の宗教に共通なる二三の特質を下に挙げよう。

第一。此の程度に於ける人類の生活が多様にして多方面なるに相応じて、犠牲の著しき多くの神々がある。国民生活の烟は多神教の烟である。種々な方法を取り種々な動機を因^{もと}として、多神教が発達した。個々の部族及び地方が相結んで一国をなすに当り、彼等は各々種々なる神々をお土産にした。一方に於ては国民的生活の統一があり乍ら、他方には多様なる神々が居る。バビロン及びエジプトの神々は最も適切なる例証で、此等の神々は殆ど皆な或地方の神として見る事が出来る。バビロンのエリドウ港はエアが崇拜される處、ニッブルはベルの町、ウルは月神シンの町であつた。シャマシ（太陽神）は特にシッバルで、マルドウクはバビロンで、ネボはボルシッペで崇拜されて居た。各都市の繁盛と共に神々の位置も高まり来り、遂にはバビロンの神マルドウクの下に、一のパンテオンが形成されるやうになつた。またエジプトの大なる神々も、初めは同じく地方神であつた。例へばブタハはメムフィスの、ラはオン・ヘリオポリスの、アムモンはテーベンの、トートはヘルモポリスの、オシリスはアビドスの神であつた。而して多くの部族が融和せる結果として、神々の間に血族関係を生ずることがある。此際特に好んで用ひられる形式は、父と母と子との関係である。例へば埃及ではテーベンに近き一地方の女神ムートが、テーベンの神なるアムモンの妻となり、同じく近隣の一地方の神メントゥは両神の子になつて居るし、バビロンでも月神シンと日神シャマシとは夫婦でイシタルが其娘になつて居る。最も有力なる部族が崇める神、最も勢力ある都市の神が、神々の國に於て最も高き地位を占める。例へばメムフィス・リオポリス・テーベンが、順々に埃及で最も盛なる都市であつたから同じ順序で丈夫の神なるブタハ・ラ・アムモンが、神々の間に覇を称して來た。從来は殆ど顧みられざりしバビロンの神マルドウクは、バビロン市の勃興と共に、バビロンのパンテオンに於ける至高の神となつた。アテンの勃興と共にアテーネもギリシャに於て最も尊き女神となり、アポロはデリ同盟の守護神として最も有力なる神となつた。

多神教の第二の動機は、國家を基礎とする人類の生活が、次第に複雑を加へ来る事にある。而して此の動機は概して前述の第一の動機つ後に現はれる。神國の諸神が、始めは個々の部族又は都市の神であつたと云ふ記憶が消滅すれば、個々の神々は其性質に従つて、国民生活の各方面を司る神になつてくる。征服部族の神は軍神となつて居るし、被征服部族の神は牧者や農夫の神として崇められるに至るであらう。文化に進みつつある堂々たる都市の神々と相並んで、朝貢の義務ある被征服民族が崇拜する牧者や農作者の神が居る。ギリシャの諸部族及び諸市の神々は、始めはヘレネ種族に共通なる崇拜の対象であつたと思はれるが、後には極めて細かに神々の分業が定められて居る。併し乍らこはギリシャに於てのみ見ることでなく、到る処に行はれて居る。即ち戦争の神、田野の神、農耕及び牧畜の神（牧畜の種類によりて夫々一定の神がある）、都市の神、文明の神、工作の神、芸術の神、相談の神、智慧の神、正義の神、貿易航海の神、旅人及び地方人の守護神、文明殊に書写及び弁舌の神等数へ尽す邊がない程である。生者の神と相並んで、下界の支配者なる死者の神が居る。死者もまた生者と同じく一帝国を形成し設ひ幻の如く影のやうなものではあるけれども、兎に角其国には支配者も居る。

然るに最も人心を支配する神々は、再び種々な性質及び活動を一身に具するやうに信仰され、茲に極めて複雑なる性格を有する人格神に発達する。吾等は其二三の例としてバビロンのマルドゥク、印度のヴルナ、ペルシャのアフラエシプトのオシリス及びギリシャのツォイス・アポロ・アテーネ等を挙ぐる事が出来る。

此等の多数の神々は、一個の無上神又は数個の偉大なる神々を奉戴して一神国を形成する。かかる神國の最も良き例はバビロン・エシプト・ギリシャ、及び古代印度・ペルシャ及びゲルマン種族の宗教に於て見る事が出来る。

第二。神々は次第に人格的になつてくる。そは道德的価値を帶びてくる。そは今日吾等が領會する如き厳格なる意味での道德的価値ではないけれども、兎に角道德的と云へる。そは此時代以後に、神と惡魔との間に、多かれ少なかれ

截然たる区別を設けるやうになつた事実によりて、最も明かに知る事が出来る。神々は厳格でもあり、峻厳でもあり怖ろしくもあり、また氣づまりなものでもあらうが、兎に角崇拜に値するものである。神々には道義があり、挙止には節度があり、意識せる人格的意欲がある。然るに悪魔は下等なるものの惡靈で、常に悪戯を事とし、破壊と滅亡とを好むものである。人々は神々を崇拜し、神々を以て己れの理想とする。例へば印度の軍神インドラは、常に戦争を好み、不斷に諍論を事とし、時々は酒を飲み、女と戯むれたがる神であるが、こは印度の軍人階級なるクシヤトリア族の理想を現はして居る。然るに悪魔の方は常に憎惡を受けて、人々は之と遠ざからむとする。供物を上げるけれど崇拜はせぬ。人々は丁度犬や野獸に餌をやる様に供物を悪魔に投げ与へるのである。下等なる精靈信仰と、多少道德的性格を具ふる諸神の崇拜とが分化し來り、惡靈及び悪魔に対する憎惡の念を生じて來た事は、人類の宗教的生活に於て極めて意義ある進歩である。

次にまた神々は次第に自然より受ける本来の束縛を脱却し始める。此の程度の宗教に於て、初めは殆ど総ての神々が、偉大なる自然力と明白なる關係を有して居る。然るに発達の過程に於て一方に偏せる自然に対する關係が次第に薄くなり、又は全く忘れられて、其代りに人生に対する豊富にして複雑なる關係が現はれてくる。例へば最初は光明と太陽との神で、次にはバビロン市の神なりしマルドゥクは、後にバビロン帝国の神、混沌の中より宇宙を創造せる神となつた。印度のバルナは巨眼を開いて道德・正義・秩序を監督する全能の神となつた。（バルナが最初は天の神なりしか、又は月の神なりしかに就いては定説がない）。ペルシャの天の神なるアフラは文明の神となり、人々は此神に奉仕して家畜を牧し、遊牧の生活より定住の生活に入り、道路を拓き、橋梁を架け、都市を築き、蛮民に戰を挑み、猛獸を亡ぼし、隣人に對して忠誠を尽すことになつた。吾等は後章に於て、古代イスラエルの予言者の宗教に於て、軍神にして国民の神なりしエホブに対する信仰が、如何にして発達したか、及びギリシャの宗教に於てツォイス

とアポロとが如何にして最も偉大なる神となりしかを見よう（此神が最初は光明の神なりしか、又は牧畜の神なりしかに就ても定説がない）。

第三。神々が名称を得るやうになるのも、此の発達に伴へる結果である。初め神々には特別の名がない、少くとも固有名がない。神々の名は單に其の由来せる自然の名称で、シンは月、シヤマシは日、ウラニアは天、ガイアは地を意味するに過ぎぬ。又は其の人間に對する關係を示せるもので、例へばカナン・フェニシア人の神々の名バール・パーラトは共に主人を意味し、モロホ・ミルキム・メルカルトは共に王者を意味するに過ぎぬ。然るに今や神々は固有の名称を与へられた。長い間呼びならされ、其間に言ひ間違などがあるために、神々の名は何人にも分る明瞭な本来の意味を失つて了ふ。最初、神と自然とは畢竟同一物で、同一名称で呼ばれて居たが、今や神又は自然物の孰れか一方が、違つた名前を得るやうになる。而して或学者がいみじくも道破せる如く、速かに自然的名称を棄て、固有名を得る様になつた神々は、諸神信仰に於て特別に高き地位を占めるのである。人のみが固有名を有する。而して名称が不明となり、本来の自然的關係が知り得ぬ様になつた神のみが人格を得るやうになる。

第四。人々が一定の相^{すがた}を神々に与へるもの亦此時である。國民宗教に於ては神像が重要な役目を勤める。而して神像は宗教的生活の發展を示して居る。神像に対する見解は、新旧両約の中で偶像崇拜を痛く排斥して居るのが原因になつて、甚しく誤まられて居る。人々はエレミヤや、第二イザヤや、ボーロの如き、新旧両約に於て偶像を排斥して居る人々は、当時の下等なる宗教と戰はねばならぬ事情の下に在つたので、公平なる歴史的判断を下して居る違がなかつた事を忘れて居る。神像は多くの人々には呪物の如く思はれて居るけれども（恰も聖画がカトリック教の百姓等に呪物の意味を有して居る如く）、本来の性質より云へば一の象徴であつて決して呪物ではない。換言すれば神像は崇拜の対象たる神其者にはあらず、單にその表現に過ぎぬ。神像を安置する処には神が現はれる。神は決して遍在と

は思はれて居ない、併し乍ら此処に神を呼び奉ることは出来る、而して此処で神は冥加を垂れ、慈悲を賜はるとするのである。吾等は神像の起原を其の太初に溯る事が出来る。最も初めは単純な天然の巣の石、粗末な木片を安置すれば、それで神を表はすに充分となつて居た。ヤコブの物語は最も明瞭に此の過程を示すものである。即ちヤコブは、夢に天開けて神及び諸天使の上下するのを見た。而して夢より醒めた時に彼は下の如く叫んだ『此処こそは世にも恐ろしい所だ、これこそは天の門だ』と。かくて彼は一つの石を安置し、之に香油を塗り、其地を『ベテル』即ち『神の宮』と名づけた。神像はかくの如くにして生ずるのである。此等の石、即ちマツツェーベンが神を表はす為に祭壇の近くに置かれた木片即ちアツツェーレンと共に、古代イスラエルの祭事に欠くべからざるものであつた事は、旧約の記事によりて明かに認め得る。次で一步を進むれば、此等の石や木に顔を表はし、粗末な四肢を付し、茲に神像が完成するのである。其形の粗野にして醜陋なるが為に、アルッティビアデスの嘲笑を買へるギリシアのヘルメスは、此程度の偶像に属するものである。

神は色々な形の神像で表はされた。神像は決して人間の姿を取つて居るとは限らぬ。神の性質が神怪奇異であればある程、神像は動物の姿で表はされ勝ちである。カナン人がバールの姿を牡牛で表はして之を崇拜した風習は、古来イスラエルのエホブ崇拜の中に入り込んで居る。吾等は神像の如何によりて宗教発達の高下をトする事が出来る。低度の文明に在る人民、又は全く進歩を止めたる人民は、好んで動物の姿で神を表はして居る。神の動物的性格は、カナン・フェニシア・メキシコ及びエジプトの宗教に於て極めて明瞭である。

此の次には過渡期がくる。此処では半人半獸の神像が出来る。エジプト宗教は此等の例に豊富であつて、女神イシスは牧牛の頭、アヌビスは狗の頭、ホールスは隼の頭、ティフォンは驢馬の頭を持つて居る。バビロンの宗教では更に一步を進めて、神々は先に其形を取りて表はれたる動物に騎り、又は之に車を輓かせて居る。神の象徴または従者

として屢々神の傍に待する動物は、曾て神が其形を以て表はされた動物であることが多い。ギリシアの宗教には此例が夥しい。

人間の相に最も高貴なる表現を与へ、之に由りて神を現はさむとの思想は容易に実現せられなかつた。第一には之が為に必要なる芸術上の手段を欠いて居た。さればバビロンの宗教では神の莊嚴を表はす為に、超人間の巨像を以てして居る。然るに唯だギリシアの宗教のみが其の至高の發達を遂げた。そは芸術と相結び、幾世紀も努力を続けてギリシャ諸神の姿を造り出した。曾て此世に生れた事のない人間の姿、輝き渡る美、内部の高貴、尊厳なる態度によりて、信心を燃え立たしむるに足るべき人間の姿で神々を表はした。世間の濁惡を離れ、現世の悲憂を超越し、足らざる所も欠けたる所もなき、円満なる男子、至貴なる婦人及び処女の相をとれる此等ギリシアの神々は、其前に跪くギリシアの男女の理想であつた。

神像の意義は言ひ尽し難きほどである。人類の共同生活は神像を中心として集つた。旧約聖書にはギデオンがミディアン人を征服した時に、分捕の中から一つの神像を造らせた功德によりて、仮令數代の間とは云へ、其家をしてイスラエルの權門たらしめたと書いて居る。まだダン人が新らしき家郷を求めるとして旅に出でたる時、神像を所持して居ると云ふ理由で、エフライムの山に住める一人の男を強いて彼等と同行させた。種族の共同生活が強固に組織される為には、一個の神像と一人の司祭とを必要とした。而して神像は一方に於ては神に対する人間的・具体的觀念に貢献すること極めて大である。名もなく形もなく、知る事を得ず、人格も具へざる無数の精靈の中より、生命あり、形相あり、人格ある神々が現はるゝ際に、最も多くその發展を助けるものは實に此等の神像である。

第五。必然の結果として神像には神殿が必要となる。國民宗教は神殿崇拜の時代である。長い間神の崇拜は神殿と無関係であつた。人々は大空の下で神を崇めた。芸術的才能に乏しかりし為に神像崇拜が發達しなかつた。ゲルマン

人は、聖窟の中で其神を祀る事を誇りとして居た。旧約聖書にも記されて居るが山上の崇拜も亦弘く行はれて居た。彼等は神々が天上に住して居ると考へたから、高い處に登れば神様に近づいたやうに感じて居た。されば若し山も丘もない場合には、人の力で高い処を築き上げた。例へばメキシコの『テオカリ』の如きも、其の頂上の神の祭壇を設けた人工の丘であるし、所謂『ハビロンの塔』の如きも同じ種類の人工の丘で、石もて疊み上げたる宏大なる祭壇に外ならぬ。然るに神像を作りて之を拝する風が行はれて、茲に始めて神殿が出来るやうになつた。神殿と云つても始めは小さい家か、又は小さい堂で、元来は単に神像を安置する事を主眼とした明けつけなしの祠ヤシラであつたらう。さればバビロンの祭壇にも、其頂上に神様の宿る小さい堂又は塔がある。神像を奉置する此の小堂が神殿の基礎であつた事は多くの大殿堂の設計を見れば直ちに知る事が出来る。此小さい室が神殿中の最も神聖なる場所で、之を中心として次第に他の部分が発達するのである。即ち前面には神を拝する人々（始めは司祭のみに限られて居たらう）を容れる拝殿が出来るし、大なる供儀台の設けある前庭が之に附け足され、聖殿を取廻むやうになる。かくて古代イスラエルの神殿に見る如く、至聖處、聖殿、神庭等を具ふる完全な神が出来るのである。

第六。神像及び神殿を中心として司祭が出来る。神への奉仕は複雑になる。神像を守護し、之を潔め飾り、色々な供物を捧げ、神殿内の秩序を保ち、堂宇の保存に留意するなど、總て皆な専門の知識を必要とするやうになる。司祭制度はかくして発達するのである。以前の低級なる宗教に於ては、宗教的素質を具へ自己と精靈との間に特別に親密な交通があると信ずる人ならば、誰でも宗教上の指導者となる事が出来たけれど、今や司祭は専人も之を能くするものではなくなつた。司祭は一定の役目を有して居るものとなつた。即ち彼は一個の役人となつた。なり度いと思へば何人でもなれるものではなく、共同団体の任命に持たねばならぬ事になつた。司祭となるには素養が必要であり、長い間の修行によりて得た技能も必要である。かくて司祭は一個の階級を形成するやうになる。但しそは同時に社会の

總代又は一時的の指導者として神に對して居る場合が多い。蓋し社会、特に社会の元首たるもののが直接に神と交はる権利があると云ふことは、自明の理と思はれて居た。従つて司祭は單に神人の交通を容易に取運ぶ便宜の為に、一定の期間、又は一生の間任命せられたる代理人たるにすぎぬのである。かゝる觀念は後代になつて一定の家柄でなければ司祭となる事が出来ぬやうになつた時までも残つて居た。然るに一方では司祭は強固なる階級に発達し勝ちで、神人の交通を独占し、自ら神と自余の『俗人』との仲介者を以て任するやうになる。而して国民の生活が退歩的な場合には殊に此例が多い。例へばアッシリア、バビロン、古代イスラエル、ギリシャ、ローマ等に於ては、僅少の例外を除けば、概して司祭は社会または國民、または国王の代理人たるに過ぎなかつたが、エジプト、古代印度、後代ペルシヤ、後代ユダヤの宗教では、全く前者と反対であつた。歴史は司祭制度が海綿の如く宗教生活に於ける一切の潤ひを人民より吸取り、一切の激刺たる力を人民より取り去る事を示して居る。而して人民が司祭に抵抗する力を失つて了つた場合に於て殊に左様である。

第七。神話が弘く行はれるのも、一定の具体的な相で神を領会する事と相伴へる現象である。神話とは何か。そは神々に就ての物語に外ならぬ。茲に人格を具へた一個の神ありと知れば、人々は其神の偉業、受難、または其神と信者との關係などを語り始める。従つて其の物語は常に信者の想像が骨子となつて居る。かゝる神話は往々にして全く意味が不明瞭で、單に一個の仮作に過ぎぬ事があり、又は極めて明瞭に神の本来の性質を描き出して居る事もあり、又は所謂推原論^{エディオロギー}の一種なる事もある。時には又謎の如き神の名称を解き、又何故に神は其場所で、何故に丁度其相で挙せられるかを説明して居る事もある。吾等は先づ自然神話に就て想像をめぐらして見よう。自然神話の最も美はしき例は風雨神話である。人々は単純な想像から雲は牛である、生命の雨を降す天上の牝牛であると言ふ。時は真夏で幾日も雨が降らぬとする。大地は乾き果てて雨に焦れて居る。其時に人々は下の様な事と言ふ『牝牛は何处へか行つ

て了つた、何処へ行つたんだらう。屹度悪魔が牝牛を追ひやつて、獄屋の中に押籠めて居るに違ひない。併し大神に願へば助かるだらう」と。兎角する間に稻妻が天上に閃き出す。それは大神が悪魔の手より牝牛を救はんとて振り翳せる刃の光である。雷が鳴る。それは悪魔の咆哮である。併し遂に大神は悪魔を平らげ、牝牛はやがて天を蔽うて帰り來り待ち焦れた雨を下す。これが即ち神話である。アポロと竜との戦ひを物語れる儀礼神話は人口に喰炙して居る。デルフィのアポロの聖殿は、曾て地中の悪魔にして未來を語るピュトーの託宣所たりし地に建てられた。デルフィの儀礼神話は、光り輝く光明の神アポロが誕生の際幸にして暗黒に住む竜神の毒手を免れ、長じて遂に之を征服して其命を絶ち、竜神の墓の上に己れの聖殿を築いた道行を物語つて居る。

第八。高等なる神々に対する信仰が発達するに従ひ下等なる精靈崇拜が跡を絶つやうになる。下等なる精靈は上述の如く概ね悪魔となつて、怖れられるけれど崇拜はされぬ。彼等と交はる魔法や妖術などは、許すべからざるもの、又は罪惡とさへ思はれてくる。神に対する信仰が高尚になり、強固になり、純潔になればなる程、妖怪や精靈が益々其数を減じ、昔の精靈崇拜は迷信とされるやうになる。此際死者の力に対する信仰が殊に減退する。而して實際生命ある進歩的宗教は皆な死者崇拜を廢止し、又は殆ど之を念頭に置かなかつた宗教である。死者は生者に対して大なる関係を有するものでないと云ふ確信が起る。彼等は帰らぬもの、死んだものである。彼等は遠いく所に住んで居る。彼はレーの水を飲んで此世の事は忘れて居る。極めて僅少な例外を除けば何人も下界から再び帰つて来ない。火葬は人をして死者に対する恐怖を除かしめる有力な方便であつたらしい。死者には最早供物も上げぬ、または幽靈に対する信仰もない。固より多数の人々は精靈を信じ死者を捧する事を止めなかつたけれど、死者の記念祭を行ひ、又は其の墳墓を飾るのは、敬虔の情から行はれるやうになる。精靈崇拜脱却の過程は、固より各宗教によりて遅速の差がある。ギリシヤの宗教ではホメロス時代に之を脱却し、バビロンの宗教では極めて昔から死者は實質のないもの

下界は影の如く塵の如きものと固く信じられて居た。イスラエルの予言者の宗教では、死者と交はり又妖術によりて死者を呼ぶ事を罪悪視して居た。而して余りに死者の世界を度外視した為に、イスラエルの宗教には数世紀の間高尚なる来世の觀念までも全く起る余地がない位であつた。其他の宗教、殊にエジプトの宗教では、墓及び来世に対する宗教の関係は極めて強固なものであつた。

第九。精靈信仰と死者崇拜とを脱却すれば、少くとも或る宗教では特殊の道徳的進歩が可能になる。人々は最早死者が生者及び生者の運命を左右する力ありと信せぬ、少くとも以前の様には信じなくなる。而して一方に於ては人々の死後の運命は、現世の所業によりて定まと云ふ信仰が起る。尤も精靈信仰及び死者崇拜と戰ひて、遂には死者を以て影の如く幻の如きものとして了つた宗教に於ては、上の如き進歩がなかつた。併し乍ら自余の宗教に於ては事情が違ふ。人々の想像は、死者が彷うて居る遠い場所を色々に分化し始める。死者は墓の近處に住まひ、墓中の屍体と離れ難き關係あるものと思つて居る間は、かくの如き分類が生じない。死者は遠方に連れて行かれると云ふ想像が浮ぶに及んで、始めて或者は楽しい善い処に、或者は艱難呵責に遇ふ恐ろしい処に住むと云ふ考へが起る。印度ゲルマン人種、即ちギリシャ人、ゲルマン人、ペルシャ人、印度人の間には、特別に此觀念が發達した。エジプト人には来世の思想は墳墓と木乃伊の中に限られて居たが、それでも尚進歩の跡はある。人々の死後の運命は現世の所業によりて定まると言ふ信仰は、厳密なる意味で道徳的と云へぬに違ひない。当時一般に行はれた觀念に従へば、来世に幸福なる世界に住むのは、概ね富貴者、權力者、勇敢なる戦士等である。戦場で討死せる勇者は、ワルクールに導かれてワルハルラに行くと古代のゲルマン人は信じて居た。而して臆病で不^{ふしお}勝で床の上で死ぬ者は地獄に墮ちるのであつた來世に於て罰せられる罪惡は、儀礼を犯せる所業、神に対して礼を欠ける所業たる場合が特に多い。ギリシャの下界に住む大罪人なるタンタルス、シシュフスの如きも、神を侮辱せる輩である。メネラオスは半神の血を引いてゐる為

に極楽島にやられた。人々は種々な儀式、不思議な所業、秘密な修法によりて、来世の運命を左右し得ると云ふ信仰は後期のギリシャ思想に於て最も重要な地位を占めて居るが、かかる考へは非常に早くから存在して居た。来世の運命は生前の行為如何にあると云ふ思想は仮令色々な附屬物の為に、其中に含まる、道徳的要素が蔽ひ隠されて居るとは云へ、極めて意義ある発達を示して居る。而して此の思想は、宗教的生活の更に高き段階に至りて始めて醇化せられ、その意義が發揮されるのである。

国民的生活を基礎とする宗教を論結する前に、是迄述べ來つた事を明瞭にする為に、二つの具体的の例を挙げ度いと思ふ。而して数ある宗教の中で茲に吾等はバビロン及びギリシャの宗教を選び出し度い。

人類最古の文明はバビロンの平野に起つたやうに思ふ。この古き文明國民の記録や碑銘は、少くとも紀元前四世紀恐らくは五世紀まで溯る事が出来る。バビロンの世界的帝国を建設したハムラビの法典は、紀元前三世紀末（一二五〇年前）に出来上つて、今日まで残つて居る（こは近年の発見にかかる）。此の法典は文化の程度及び法律上の進歩が、極めて高き段階にあることを示すもので、その下せる法律上の解釈は、今日の法律学者をして喜び且つ驚かしめて居る。テル・アマルナの廃墟から発見された瓦の上に、楔形文字で書かれてある文書は、紀元前二世紀の中葉に於て、バビロンの言語・文字・文明であつたことを吾等に物語つて居る。

この古き文明國民の宗教は多神教であつた。旧約聖書によればアブラハム時代に発達したと云ふバビロンのパンテオンは、綿密に配列し整理されたもので、天の神アヌ、虚空と地面との神ベル、海と地中との神エアの三神を最も上位に鎮座して居た。されど此等の神々に対する信仰は已に衰へかけて居た。人々は已に一種の神学的觀察を以て神々を比較して居た。

彼等は生命を与へ、若くは之を奪ふ天上の力を主として崇拜した。バビロンの神々は多くは太陽に由来して居る。

而して其うちで特に彼等が崇拜した神は、常に戦に勝ち、雲霧を払ひ、万物に生命を与へる年若き春の太陽即ち春の日の神マルドゥクであつた。之に次では常に炎々として燃上り、万物に死を齎らす夏の日の神ネルガルが、戦争の神及び下界の神として崇拜された。太陽神と相並んで月の神シン、嵐の神ラムマンが居る、而してシンは最初バビロンの至高神であつた。生命の女神イシタルはバビロンのパンテオンに於ける唯一の重要な女神であるが、こは常に漠然たる二重の神格を具へて現はれて居る。北の方アッシリヤで崇めるイシタルは、戦士であり且つ軍神であつて厳格なる処女神となつて居るけれど、南の方ではいたく其趣を異にして居る。南方のイシタルは、一切の生命的母で、其胸より生命を産み出し、無限の豊饒と力を齎らす驚くべき富の女神である。そは荒々しき淫婦で、男子好み、若し其心に従はざる時は、残酷なる復仇を加へる神である。イシタルの祭祀は華麗を極め、犠牲としては男娼を捧げた。

さてこのインタルが下界に旅した神話には深奥なる意味が含まれて居る。此の女神の情夫であつた春の草木の神タムムツが死んだ時に、女神は急ぎ其後を追ひて下界に降り、情夫を助け出す為の生命的泉を探し出さねばならぬ事になつた。下界には七つの門があつた。イシタルは一つの門毎に一枚の衣を脱ぎ、最後に裸形の姿で下界の女王の前に出で、遂に囚はれて獄屋の裡に閉籠められた。かくてイシタルが帰つて来ぬ為に、地上のものは總て其の生命を失つたので、神々は下界に使を遣はし、イシタルを放免して貰つたと云ふ事である。此の神話の本来の意味は極めて明瞭である。そは一種の季節神話で、何故に一切の自然物が冬期又は夏時の旱魃に枯死するかと云ふ疑問に対し、生命の母が去るからだと答へたのである。而して何故に生命の母が去るかと云ふ疑問を解く為に、情夫其他の話が出来たのであるが、その古い神話と相結んで新しい思想が現はれて居る。即ち死より蘇る生命ありとの思想、換言すれば死より新しき生命を呼び起す神々ありとの思想である。

バビロンの諸神中で最も莊厳なるものはマルドゥクである。こは始め春の太陽の神で、次にバビロン市の神であつたが、バビロンの版図が拡張すると共に次第に勢力を加へ、遂にはバビロン世界帝国の至高神となつた。彼はバビロンの支配者なるが故に、同時に世界の支配者となり、毎歳新年の祭日に當り、此神の前で運命の神籤を空中地上に振り撒く儀式が行はれた。而して彼は単に世界の支配者たるに止まらず、世界の創造者であつた。『天地を造り給へる全能の神』として信心深き人々の崇拜を受けたのは、世界に於てマルドゥクが最初であつたらうと思ふ。

バビロンの世界創造神話は、楔形文字で記された断片的碑文によりて今日に伝はつて居る。創造神話の由来及び意味は極めて明瞭である。そは本来は春の神話であつたのを敷衍したものである。バビロンの平野に住まへる人々は、陽春の至る毎に、若やげる春の太陽が、今迄全地を蔽ひて一切の仕事や商売を妨げて居た雲・霧・雨などと戦ひて、目出度き勝利を得るのを目撃する。彼等は春の日の神が、輝く光明を放ちて霧の巨人を貫き殺すのを見たと考へる。始めて天地創造の神話を歌つたバビロン人は、世界の始めは猶ほ年の始めの如しと考へた。新しき年が始まるやうに、世界も亦始つた。大仕掛ではあるが様子は同じである。されば神話の中には『太初に恐るべき水神ティアーマットあり、一族を率ゐて世を支配せり』とある。何人も此の水神に抗ることが出来ず、神々は慄へながら彼の下に畏まつて居る。次で彼等は評議を開き、マルドゥクを戴いて之と戦ふことに決し、アヌ・ベル・エアの諸神は己れの權力をマルドゥクに委ねた。かくてマルドゥクは水神のティアーマットを征服せねばならぬこととなり、一振の三叉戦と、風を籠めたる袋とをもて身を固め、激しき戦闘の末終に水神を平げた。彼は三叉戦を水神の口に突き通し、開ける口より風を吹き込み、その巨体を破裂させた。而して彼は水神の屍体の一半を以て天を、他半を以て地を造つたと云ふことである。此物語が太陽が雲霧を払ふを見た自然的觀察に由來して居ることは、一見して明瞭である。

バビロンの宗教に於ける世界創造の思想はかくの如くにして起つた。其中には深き反省の跡が見える。従つてこは

宗教史上に於て稍後期に現はれたものであらう。さり乍ら神を創造主として信仰することは、極めて大なる価値を有して居る。人々はその活動と意志とよりして、一切の生命と存在、然り自身の生命の由つて来る神に対し、特別なる信頼の情を以て服従する。何となれば此創造主によりて作られたものは、同じ創造主によりて加護せられ保存せらるべきと信するが故である。

ペビロンの宗教に於ける神に対する人の関係は絶対的服従である。神々は無限の権力を有する專制主である。神の根本的性格は超人力である。神々の姿は巨大であつて、人身の幾層倍もある。神々には無数の強大なる臣隸があつて、神殿や宮庭の前には神々の護衛として翼を張れる牛又は獅子、及び同じく翼がある精靈の巨像が安置されて居る。神々の為に丘が築かれる。而して此等の巨大なる神殿の遺跡によりて察すれば、人工の丘が余程高いものであつた事が知れる。人々は黙々として神の前に跪き、謙遜と服従とを生命とした。神の怒りに対する畏懼の念、永久の恐怖の氣分が、極めて鮮かに現はれて居る。

上の如き感情は古代ペビロン文学全体に亘りて最も鮮かに描き出されて居る。今日まで伝はつて居る多数の讃謡や聖歌の中で、信者等は深く自身の罪悪を観じ、神の恵みを哀訴して居る。此等の歌はペビロン懺悔詩篇と云ふ名で輯められて居るが、之を一読すれば下等なる精靈信仰や、又は人の一拳手一投足が、彼を取囲む知不知の神々を怒らしめると云ふ意識が、如何に名状すべからざる恐怖の念を人の心に喚び起すかと云ふ事を明かに認め得る。此等の祈禱式に際しては、無数の神々や精靈に悉く慈悲を願ふ。知られざる男女の神々も同じく祈禱の対象となり、人々は自己の意識せざる罪業の宥恕を祈るのである。信者等は心の底から弱り果てて神の前に出で、下のやうな祈を捧げる。

汝の僕なる我は太息^{トガフ}吐きて御名を喚びまつる

私は罪人なれば懲き祈りも甲斐あるまじ

私は太息吐きて鳩の如く神に祈る

嗚呼悲しみと嘆きとにて吾がこゝろは弱り果てぬ

彼はまた神前に懺悔して『未だ告げざりし吾罪を汝の前に白す』と云ひ、『主よ吾罪は深く吾惡は重し』と語ふ。而して此思想が特に著しく現はれて居るのは下の聖歌である。

嗚呼主よ僕を見棄て給はされ

潮の只中に捲き込まれたる此僕に御手を貸し給へ
わが犯せる罪は汝の恵みによりて跡形を失ひ

わが為せる悪業は、風の為に吹き去られよ。

衣を脱ぐが如く吾が罪を払ひ給へ

神よ吾罪は七度^{ナナタメ}のまた七度に当る

願くは吾罪を許し給へ。

此等の聖歌は總ての点に於て痛く旧約の詩篇と似通つて居る。両者の間には必ず關係があるに相違ない。思ふにイスラエルの詩篇の作者等は、罪惡及懺悔全体に就ての觀念、並に他の多くの点で、バビロン懺悔詩の影響を受けたのであらう。併し乍ら精密に両者を比較する時は、其間にまた大なる相違が目に付く。唯だバビロン懺悔詩の最上な

るもののみが旧約の詩篇と伍するに足る。両者を比較して見る時、イスラエルの宗教的精神が、外国より来れる素朴な材料を、如何に莊厳に且つ如何に独創的に使用したかを知る事が出来る。

バビロンの宗教は近頃の人々によりて甚だしく買被られて居る。長い間の苦心の結果埋没せる古碑の研究によりて此驚くべき帝国の事情と、バビロン世界文明の深さと広さ、及び其が古代東方諸国に及ぼせる非常なる影響とに就て知り得た学者達は、稍もすれば其等の新発見の価値を誇張し勝ちである。彼等は宗教進化の歴史に於て非常に高き地位をバビロンの宗教に与へ、イスラエル及び旧約の信仰の如きは、之と比較してその光彩を失つて了ふと考へて居る。而して彼等は之に対し表面だけは極めて有利に見ゆる多くの証拠を提供する事が出来る。人々は古代バビロン宗教の研究によりて多くの点で此の宗教がイスラエル宗教の淵源なる事を知り得たと言ふであらう。モーゼの第一書にある話、世界創造の話、洪水の話、天使墮落の話、楽園の話等は、仮令積極的の証拠がないにしても、バビロン神話の翻案と見て差支がなからう。されどこは前者とは全然異なる、且つ遙かに価値ある宗教的内容を有する翻案なる事を忘れてはならぬ。ハムラビの法典は、一般に文明及び法律上の点に於て、バビロンとイスラエルとの間に、種々な関係がある事を示して居る。イスラエルの法律の解釈は、之によりて多くの点で新しき光明を与へられた。而してイスラエルの殿堂及殿堂崇拜も、バビロン殿堂の発掘によりて大いに明瞭になつた。恐らく安息日の如きもバビロンよりイスラエルに伝はれる風習であらう。

此等は總て事實であるに違ひない。乍併イスラエルの予言者の宗教は之をバビロン宗教に比して、無限に卓越して居る。之に就ては次節に述べるが、兎に角バビロン宗教は、到底イスラエル宗教と相伍し難きものである。従つて根本に於て此等二宗教の比較は全然不可能である。イスラエルの宗教がバビロンに仰げるは、單に其原料にすぎぬ。其原料を精選して之に一定の形相を与へたるものは、イスラエル宗教其者の力である。イスラエルの予言者を以てバビ

ロン人の弟子とするは、彫刻家を以て石工の弟子とするが如きものである。

バビロン宗教は全然国民的多神教の段階に属して居る。若し其中に一神教の形跡ありとすれば、そは司祭等の抽象的思辨か、又は近時の研究者が自分の学識を以て都合よく解釈せる場合に限られて居る。實際に於てバビロンには決して一神教が無かつたし、予言者的人格の如きは何処に求めて見出す事が出来ぬ。バビロンの最後の王なるナボネードは、一神教的改革を企てて諸神の聖殿を悉く一箇所に集め、諸神を以て悉くマルドゥクの臣下となし、其礼拝所をマルドゥク神殿の支社たらしめんと試みた事がある。此の一事によりても、バビロンの宗教は、其の文明の最後の時代に於てすら、如何に真の一神教と相懸隔して居たかを知り得るではないか。加之バビロンの宗教には、更に他の制限及び束縛があつた。来世及び死後の応報の觀念が起らなかつたことは、イスラエルの宗教に於ても同様であつたから暫く之を措くが、バビロンの多神教は、下等なる精靈信仰、最も低級なる魔法と妖術との跋扈より脱却することが出来なかつた。バビロン宗教文学の特色は、魔法文学の非常に夥しいことにある。『草の地を蔽ふ』如く、当時のバビロン宗教界には、精靈と悪魔とが蔓こつて居た。遙かに後代になつても、バビロンには多くの精靈崇拜及び魔術が栄えて居た。而も一方では祭司及び学者の思辨的傾向がバビロン宗教の活力を殺いた。バビロンは所謂占星術の本家で、人間の運命は星によりて定まるといふ迷信の総本家である。

されど斯く云へばとて吾等はバビロン宗教の同情すべき点を看過してはならぬ。其中には非常なる真摯があり、偉大なる力が籠つて居る。バビロン平野の遺跡は、現に此事を語つて居る。世界の創造主たる神に対する信仰は、雄々しき姿を此處に表はして居る。人々は塵中に危坐して神を拝した。罪惡觀はバビロンの宗教に於て、可成り深奥な姿で現はれて居る。

次に吾等はギリシャ宗教を概観しよう。そは疑ひもなく国民宗教中の最高位に位し、國民生活と宗教とが全然渾融

したる絶好の例証を与へて居る。宗教の生命は、豊富にして絢爛たるギリシャ文明の五体に張り渡つて居る。ギリシヤの宗教は国民的生活に至高至全の姿を与へて発現せしめた力となつて居る。ギリシヤの宗教を領会するためにはペルシヤ戦争の結果として、ギリシヤ人の宗教的生活に新機運が勃興した紀元前五世紀中葉頃の、家庭及び国家に於けるアテン人の生活を窺はねばならぬ。ギリシヤの上流の邸宅に入れば、先づ内庭があつて此處に庭の神ヘルカイオスが祭られ、庭の中央に其の祭壇があつて、一家の三人が此處で犠牲の動物を屠る。總て動物を屠る事は神聖な行事であつた。主人が家僕に宣告を下す時も此祭礼に於てする。他人が此家を訪問する時も、第一に此處に詣り、異邦人の守護神なるクセニオスの名を唱へて歎待を受けん事を祈る。家の戸口にはヘカーテに供物を上げる供犠箱がある。ヘカーテは幽靈の女神で、人々が之に犠牲をやるのは崇拜する為でなくして之を家の中に入れない為であつた。広間には籠があつて不斷に火が燃え、女神ヘスティアが祭られて居る。来る程の人は皆先づ此の女神に挨拶する。一家は籠を中心として相集まり、火の消滅は即ち一家の断絶であつた。食事毎に女神ヘスティアに供物を捧げた。家を出でて町に行けば、ヘルメスの古風な醜陋な像が立つて居る。ヘルメスは旅人を他国に連れて行く神様で、旅に出て居る家の主人を導き、再び愛する故郷に恙なく連れ戻る。市場にはアゴライオスが祭られ、その名に於て命令が告示せられ官吏が選抜せられ、籤が撒かれる。アポロとアテーネとは正義の神として至高法院アレオポリックに立つて居る。一切の藝術的思想及技能は、悉く神に仕へる為に用ゐられて居る。演劇も祭事であつて、歎べども眞面目な大勢の人々は、犠牲を捧げ終つた後にエスキロスの深奥にして宗教的な智慧の嚴かなる響に耳を傾ける。アテンの船々は、遙かに遠き國々までもパラス・アテーネの譽れを伝へ、諸市同盟の神アポロは希臘の同盟諸市を監視して居る。

吾等は希臘の宗教を結ぶに當り、ツォイス及びアポロの両神に就て更に詳しく述べて見たい。前者に就ては下のやうに書かれて居る。『ツォイスより日と光と出でたり、彼は年を賜ふ。彼の輝く両眼は大いなる意味あり、彼は一切

を視、その眼は決して眠らす。彼は観察者、一切視者なり、罪を犯す人は彼の眼の神聖を汚すものなり。山々の頂は聖淨なるツォイスの礼拝場なり、彼は高く雲表に聾ゆるオリュムポスの輝く頂の上に坐す。家々の庭毎に彼の祭壇あり、家も庭も國も彼の掌中にある。彼は国境を超えて旅に出で、異郷の土に冥加を希ふ人を守護し、旅人をして其志せる地に到らしむ。彼は至高の救主にして且つ滅罪者なり。彼は夫婦の縁を結び、血族の関係を護持し、生と死とを司り、黄金の衡^{はか}にて武士の命運を定む。彼は祝福と富有とを与へ、境々を守護す。王者の權及び其象徴たる王笏も亦彼より出づ。彼は誓約を監視し、忠実と信仰とは彼より発す。正義にして若し踐踏せらるゝ事あれば、彼は其の宣告によりて再び之を克服す。彼は公平を欠ける裁判に対し厳罰を課し、犯罪の所刑を監視し、一切の事を其の帳簿に記して、常に之を携ふるが故に、一物として彼の記憶を免るゝはなし』これが希臘のツォイスである。

而してアポロはツォイスと相並ぶべきものである。紀元前五世紀頃アテンで行はれた演劇を想ひ浮べよ。劇場には祭に加はれる大勢の人々が詰め懸け、舞台ではエスキロスの三段物の最後のオイメニデスが開演中で、背景にはデルフィなるアポロの殿堂を表はして居る。神殿の大戸は開け放され、中央アポロの祭壇の側には母を殺せるオレストが血に塗れた姿で助けを願つて居る。彼のまわりにはゴルゴンよりもヘルピトよりも更に怖ろしき、一見して嘔吐を催させる真黒な戦慄すべき変化のものが眠つて居る。『彼等の姿は神々すらも見るに堪へざるものなれば、人間が彼等の往寂に入るなどは思ひも寄らぬ。われ未だ曾てかかる生物を見た事がない』彼等は母殺しのオレストに仇を復さむと待構へて居る。此時大慈大悲のアポロが光顔巍々として現はれ出で、加護を願へるオレストに近づき給ひ、

われ汝を欺かず、われ汝に誠を尽さむ。

われ汝を距ること遙かなれど、近く汝の守護たらむ。

われは汝の敵の味方とならず、又之に恵を下すことをせず。

と宣ひて、怖るべき変化の手よりオレストを救ひ出すのである。罪を赦す慈悲の神、救世主にして監視者たるアポロに対する信仰は、かかる祭日に、かかる演劇を観るアテン人のこころの中に愉悦の炎を燃え立たしめた事であらう。

吾等が是迄描き出さうとして来た国民的多神教の世界は、真に豊富にして絢爛なる一幅の画図である。こは人間の心中に照り込みたる途切々々の神の光である。途切れたりとは云へ、神の偉大と光榮と、神の至善と慈悲とを現はせる尊とき光である。ツォイス、アポロ、アテーネ、マルドウク、印度のバルナ、波斯のアフラ等は、上の如き段階に在る宗教的生活に於ける人間の信仰の至高の象徴と言つてよからう（後に宗教が更に進化してから、此等の神々は更に醇なる姿を取りて現はれて来る）。上の諸神の中で希臘の神々は最も尊厳なる人間の理想として光彩を放つて居る。而してかかる信仰は重大なる道德上の勢力と価値とを有して居る。更に高尚なる人生が之によりて喚び起され、人は之によりて永遠なる人間としての尊嚴を贏ち得た。神々に対する信仰は人間の日常生活の根柢となり、生活の力を与へる。

吾等の見解は種々な駁論を招くかも知れぬ。人々は神話及び多神崇拜に於て、高尚なる光榮ある信仰と相並んで到る處に下等なる嫌惡すべき不道徳なる分子が横行して居ると云ふであらう。吾等も亦決して之を看過しては居らぬ。多神崇拜の中に含まるる道徳は、總ての点に於て、又は殆ど總ての点に於て、高等なる道徳、又は吾等の所謂道徳と云ふことが出来ぬ。予言者出現以前のイスラエル宗教に於てもかく言ふ事が出来る。イスラエルの道徳は、總ての点に於て真に戰慄すべき道徳であつた。彼等は神命によりて最も残酷な方法で征服した人民を屠り尽したではないか。サウル王は予言者の命に従つて其好敵手たるアガグ王を殺さざる故を以て王位を奪はれたではないか。旧約聖書の中

には、ヤコブが其民を害ひし總ての奸計邪策が、喜んで事細かに書かれて居るではないか。されど總て此等の行為を最高なる道徳の標準によりて批判することは、全く公平を欠いた仕打ちである。かの全種族を墨殺する如き野蛮なる行為は、仮令それが野蛮なる且つ戦慄すべきものではあるにしても、一の優勝人種が自己の勢力と特質とを維持する為の必要に迫られて敢てするに至つたことを想はないのは公平な觀察とは云へまい。而して若し吾等が旧約聖書の一部に、即ちイスラエルの道徳と宗教とに、此の公平な批判の標準を当てがひ得るならば、其他の国民及び宗教に向つても亦同様に公平な態度に出づべきであらう。

国民的多神教の時代には、吾等の謂ふ如き道徳がない。されど今其の腐敗し又は汚されたる分子、又は野蛮なる時代及び野蛮なる信仰の遺物、又は萌し始めたデカダンスの徵候を除き去りて言へば、そは矢張り道徳である。上方へ、且つ前方へ進みつつある道徳である。共同生活の發展無条件なる義務感情の発露、自らの力で価値を創造する事、其為には一命を棄てゝも悔いざる事、これが取も直さず一段より一段へと登り行く進歩の道徳でないか。

次に吾等は此等の国民宗教が受けて居る宗教的束縛に就て考へて見よう。神は往々にして全く人間の生活の中に隠れて了ひ、之が為に神が有すべき權威と感化力とを失ふやうになる。宗教と幸福とは国民的生活に於て全く同一体になる、従つて宗教は前進的な、批判的な、革命的な分子を欠くやうになる。その力は拘束せられ、早速保守に傾いて旧習と慣例とを固執し、國民及び國家の生活に於ては權力者の最良の味方となりて、一切の進歩の敵となり、根本的に國民を兩分して互に相争はしめんとする恐るべき勢力となる。

かくて宗教的生活は更に一步を進めねばならぬ。而して此の進歩によりて宗教と國民との関係は従来よりも多少弱くなつてくる。此の動搖は國民としてでなく一個人としての生活より起らねばならぬ。かくて偉大なる予言者の雄雄しき姿が舞台に現はれる。

第四章 予言者及び予言者の宗教

前章に述べた国民宗教の特質を今一度概説して置く。国民宗教に於ては宗教は全体としての国民の関心事で、国民生活の中核になつて居る。神々は国民のもので、国民は神々のものである。宗教は民間の風俗であり、習慣であり伝承である。人々は宗教の中に生れて来る。恰も祖国に対する彼等の愛が、自由なる意志の選択に出でたる行為に非ざると同じく、彼等が宗教を信するのは、單に其の宗教の中に生れて來たからである。この時代には今日の意味に於ける信仰も不信仰もなく、確認も懷疑もない。恰も謀反人が殺されるやうに背教者も亦法律の制裁を免かれぬ。神々に對して疑惑を抱く事は謀叛である。然り死に値する重罪である。

宗教は国民の関心事で、個人と神々との關係は第二位になつて居る。個人に對しては其人が共同団体の首長たり指導者たる場合に、ただ間接に注意が向けられるに過ぎぬ。国民生活が諷刺であり強固であればあるほど個人の生活は益々その意義を失つて来る。個人とは何ぞ。洋上に起伏する一波浪、桶の中の一涓滴、要するに虚無である。国民なくしては個人は全然無能であり無力である。個人は順々に影の國、地下の國に消え去つて了ふ。されば『エホヴよ、死者は汝を讃め能はず』と言はれて居る。一代の個人が消え去つた後には、新しき代だいの個人が現はれる。而して光と空氣と、太陽と春と、沢山の子供と財産と、戦争と勝利と平和とを楽しんでから、亦復その存在を失つて了ふ。かくて個人は消え、国民は残り、諸神は永遠に存在するのである。

但し茲に例外がある。そは死後の應報に關する信仰が方々に起つて、茲に個人としての存在が意義を生じ来る事である。されど此の信仰は尙未だ不定と暗黒とを免れぬ。其中には凡ゆる空想が蔓こつて居て、仰々しき儀式やら修法

やらを専一とする秘密の宗旨、又は講社が行はれる。そはエジプト司祭の修行団や、ギリシアのオルフォイス講社等に於て最も善き例証を見る事が出来る。死後の応報は稀には普遍的に領会されて居る事もあるが、往々にして単に貴族や強者や權力者や勇者にのみ限られて居る場合がある。そは特殊の悪人に対する一種の脅喝であり、奇怪な修法を行ふ宗旨の人々に対する慰藉である。されば此の信仰は宗教的生活の中核にあらずして、其末梢に位して居る。多くの宗教、殊にセム種族の宗教では、殆ど全く此の信仰が表面には現はれなかつた。此の信仰の最も強大なりしはエジプトの宗教である。

かくの如くにして神々の目は時に個人の上に注がれる。即ち卓越せる、又は權力ある、又は高貴なる個人の上に注がれる。バビロン及びアッシリヤでは国王と神様との間には特別に密接なる關係があると信じられて居た。国王は神神の寵兒で、地上に於ける神の代表者、神恩の代治者であつた。ギリシアの宗教には神々の寵兒、又はオリュムポスに登りて神となる英雄、又は神々の落胤たる勇者の話に充ちて居る。神々は親しく此等の人々を加護し、死すれば之を歓樂の國に連れて行く。さり乍ら如何に權力ある者又は偉大なる者と雖、神の怒りに触れぬとは限らぬ。人間の偉大の如きは、諸神の掌中に手鞠の如く弄ばれて居る。而して此の思想が上代ギリシアの悲劇を生んだ。

今一つ注意すべきは、国民宗教が儀式の宗教たることである。宗教的行為とは儀式を行ふことである。敬虔とは風習と慣例とに従つて神々を祭ることである。固より宗教は道徳と関係し、国民生活の義務と関係して居た。例へば戦争の際には個人は祖国と諸神と共に其身を獻げ、神々はまた平素個人の公権私権を護つて居る。神々に近づくには清淨なる心と清浄なる手とを以てせねばならぬ。併し乍ら宗教的生活の中心は依然として儀式に存し、儀式の上の落度は最も厳酷に所罰せられ、何者を以てしても償ひ得ぬ罪障となつて居る。而して一方では正しく犠牲を供へさえすれば極重の罪惡も消滅して了ふ。バビロンの洪水詩には、人間を亡ぼし尽さむとせる恐るべきベル神の怒りが、洪水に生

き残れる英雄の供儀によりて和らげられ、之に従へる諸神は恰も蠅が集まるやうに、立ち登る供儀の香に集まつて来たことを素朴な心で歌つて居る。モーゼの第一書にも、ノアが供へた犠牲の香が、エホブの鼻に達したと書いてある。道徳的な或者が宗教の中に存在して居たことは事実である、さり乍らそは儀式の為に蔽ひ隠され、全然儀礼の為に拘束されて居る。

然るに恰も此頃に至つて人類の宗教的生活は、極めて懸隔せる諸方の土地に於て新しき刺激を受けた。今や予言者の時代が出現した。宗教的生活に於ける此の偉大なる新興の時代は、約紀元前第八世紀、第七世紀及び第六世紀頃である。即ち紀元前第八及び第七世紀には偉大なる予言者がイスラエルに現はれ、同時か又は少しく之に先ちてペルシア教の改革者たるツァラトウストラが現はれた。而して第七及び第六世紀にはギリシアに於て新たなる宗教運動が起り、始めは偉大なる悲劇作者、次ではソクラテス、最後にプラトーが其最も有力なる策進者となつた。第六世紀に於ては仏陀が印度に現はれ、また独創的改革者の中に数へる事が出来ぬかも知れないけれども、孔子が支那に現はれて教化を布いた。こは注目に値する符合である。恰も人間の宗教的生活の幹が、一朝にして諸方に新しき枝を生じた趣がある。吾等は之より此等の諸現象に共通なる特徴を研究しやう。

第一。如上の現象に共通なる第一の特徴は、俄然として個人が造化に参与し来れる事である。偉大なる個人の人格が、多少の別はあるけれど孰れも鮮かな姿で吾等の前に現はれてきた。此處にはツァラトウストラ、其妻、其娘、其養子、其友ザスタッフ王、及び王の大臣ヤマスプが居る。彼処にはエリヤ、アモス、ホゼヤ、ミカ、エレミヤ等の力強き予言者が居る。ギリシアに於てはエスキロス及びソフォクレス、ソクラテス、及びプラトーの偉大なる姿があり、印度には仏陀を始め一々名前の判つて居る愛弟子の一群がある。此等は悉く具体的のもので、伝説の雲霧を通して鮮かに認め得る姿である。彼等の風姿の如何に堂々たることよ。彼等の声は數千年後の吾等の耳に響く。吾等は過去

の時代が吾等に残せる最も貴き遺産として此等の人々を喜んで居る。

第二。至る處に吾等は更にまた同一事を認める。各予言者は悉く世俗の判断に対し、伝説や法律や風俗や習慣に対して、反抗の声を挙げて居る。殆ど總ての予言者は、偉大なる、而して孤独なる悲壯の人格であつた。最も綻ままなる空想を以てしても到達し得ぬほど彼等の孤独は深刻なるものであつた。熒然として敵を遁れ去るツアラトウストラの旅姿、心を碎けど其効なき四方の伝道の如何に物淋しき佛ぞ。高丘に登りては崇める神のアフラ・マッダ、又は其使に我身を捧げ、荒野に出でては群る惡魔に襲はれて弄ばれ、而して三十年の慘澹たる奮闘の後、漸くにして最初の大功を收め得たのである。前に挙げた總ての人々の中で、仏陀の生涯は最も安穩なものであつたけれど、尚ほ且つ非常な苦闘があつた。孔子は其の生涯の大部分を流浪の間に送つた。ソクラテスは衆愚の為に瀆神者の汚名を着せられて毒盃を仰ぎ、プラトートは世間に對して殆ど無勢力な少數の弟子を相手に教を授けて居た。而して旧約の予言者は如何であるか。エリヤはバール神の司祭等と相争ひ、アモスはベテルの司祭等の為に故国を追はれ、イザヤは常に弱小なる国王等と相戦ひ、最後に彼等の中の最も偉大なるエレミヤが予言者としての生活は、正に下の言葉のやうなものであつた。『われエホヴは今日この全国と、その牧伯^{父王}と、その司祭と、その地の總ての民との前に、汝エレミヤをば堅き城、^{くろがね}鉄の柱、^{あかがね}銅の牆となせり』。

これが總ての予言者に通ずる特徴である。彼等は自らの確信、自らの良心が是とするに非ざる限り、如何なるものとも受け容れようとせぬ。朗々として照らす彼等の心の眼は、總て^{かりき}苟且の姿、總てうつろひ易きものの為に欺かれることがない。されど彼等の宣伝する所は偶々獲得した彼自身の信念ではない。彼等は彼等の上に在すいと高き力に策励せられ、強要せられ、嚴苛なる使命を自覺して、其高き力の名に於て之を述べるのである。イスラエルの予言者等は、エホブの名に於て語つた。エホヴの言葉彼等に來り、彼等之を語らざるを得なかつた。『獅子吼ゆ、誰か怖れざ

らむ。エホヴ語る、誰か黙するを得む』得知らぬ力彼等の上に加はり、エホヴの言葉彼等の言葉となる。そは難渋にして謎の如き神託ではない。そは不可思議に賜はりて嚴の如く牢乎たるものとなれる彼等の確信である。ツアラトウストラは惡魔との苦闘に際し、山上に於て受けたる啓示を神怪な言葉で述べて居る。吾等はベルシヤ宗教文学の最古の断片たる聖頌に於て、その形式と内容とを仄かに偲ぶ事が出来る。仏陀は菩提樹下に坐して修行し成道し惡魔と闘つて、然る後に自ら成^{じやう}せる菩提を宣伝した。ソクラテスとプラトーとは如上の人々と同日に語るのが不穩當かも知れぬ。彼等が在來の伝承に反対して起せる精神的運動は、根本的に於て純知的のものであつた。彼等はその有する高き真理を人々に伝へたが、自ら啓示を受けて居ると云ふ意識よりも、真理其者を重んじて居たやうに思はれる。併し乍らソクラテスが、ソフィスト等の個人的な氣儘な意志や主張に反抗して、道徳的思想及び判断の合法性を高唱するに當つては、彼の心の奥に囁くダイモン即ち神の声を最後の根柢として居た。而してプラトーに至りては取も直さず哲学者の衣を着た宗教的天才である。彼は『神々しき狂人』のやうになつて、見えざる世界を愉悦し、その世界に於て認めた事、心の奥の奥に掴得した事をば、燃ゆるが如き聖なる情熱を以て語りし神に酔へる予言者であつた。

總て此等の予言者は『道』によりて人々を動かした。換言すれば彼等の人格的確信の力によりて人を動かした。これ以外に彼等は何等の方便をも使はなかつた。伝説も風習も、事業も儀礼も、彼等の方便ではない。彼等は或る社会又は或る階級の一昧徒党として現はれたのではない。アモスは司祭の長に向つて、吾は予言者にも非ず予言者の弟子にも非ずと答へて、總ての学派との關係を拒んだ。神は壠畝の間に彼を抜き、神の使として之を世に遣はただけである。ツアラトウストラの改革に関する最古の記録に就て見るも、司祭は何等の貢献をして居らぬのみならず、却つてツアラトウストラの敵として現はれて居る。仏陀は其の弟子等の為に一切の婆羅門族の特權を度外視し、且つまた自身すでに婆羅門の山ではなかつた。總て彼等は唯だ精神の力、人格の力によりて働いた。ギリシャの人々は例外で

あるが彼等は一般に証明もしなければ議論もしない。彼等は譬へやうのない確實を以て自らの信仰を伝へ、意志の服従を要求した。思ふだに胸躍る悲壯なる姿でないか。かくて信仰と云ひ確信と云ふ言葉が始めて宗教の壇内にはひつて来た。かくて宗教は始めて自由なる意志に基く人格的信仰を土台とするやうになつた。されば第七世紀のメデヤの諸王中にフラオテス即ち告白者と名乗つた王があると云ふ一つの事実を根柢として、ツアラトウストラの改革は已に茲に胚胎して居たと云ふ議論は、甚だ当を得て居るものである。

第三。予言者が受けて之を伝へた啓示は何か。そは人生の意義及び価値、その至深の根柢、その至高の目的に關する絶対的確信であつた。そは數言にして尽し得べき極めて実際的な確信であつた。そは最早や風俗・習慣・伝承・儀式・修法等の雜駁な混沌ではなくなつた。古代イスラエルの予言者等は、イスラエルの神はイスラエルの国内外に在す絶対的に正義にして且つ神聖なる神で、正義の為にはその選べる国民をすら滅亡せしめる神であると宣伝した。ツアラトウストラは、全能なる天地の神は、人間の秩序と文明との神、一切の有益なる技術の守護者、一切の野蛮と罪悪と不合理との撲滅者であると教へた。プラトーは神を以て最後の至高なる観念、一切の善きもの、美しきもの、真なるものに現はれる總ての存在の至深の合理的根拠とした。仏陀は、生は苦にして、人生の理想は苦を滅して無上安穏に入るに在りと教へた。

斯くの如き予言者の教へた人生の理想は、根柢に於ては、最早や一国民に限られるものでなかつた。彼等に従へば其の結果こそ即座に現はれなかつたけれど、エホバの正義と神聖とは、独りイスラエルにのみ施こされるものでなく万国に通ずる従であつた。仏陀に従へば生は苦なりと云ふ事は一切の世界に通ずる真理であり従つて仏陀は全世界に苦の解脱を説いた。プラトー及び其の弟子等に従へば、ギリシャ人と野蛮人とを問はず、苟くも賢者でさへあれば、此の混沌たる現実の世界から、永遠なる觀念の世界に登高し得るのであつた。ツアラトウストラに従へば、全世界は

善神の國と悪神の國とに分れ、苟くも真に敬虔なる人でさへあれば、誰でも善神の善業に参与し得るのであつた。

第四。如上の根柢から予言者の宗教は一神教を生むやうになつた。天地を貫く獨一の神に対する信仰は此から生れた。ツアラトゥストラ及び初代の弟子等には神は獨一で其他の總ては惡魔であつた。光明と秩序とを賜ふ赫灼たる天上神アフラ・マツダのみが獨一の神であつた。彼は民間に於て信じられていた神々の存在を許したけれど、此等の神をば嚴重にかの至上神に服従せしめた。彼等は單にアフラ・マツダの臣下であり、侍者であり、使者である。そは全然アフラの意志によりて左右せられるもの、アフラの本体より發する光線の如きものである。かく云へばペルシャの宗教に於ては後代ペルシャ教を見るやうな善神と峻嚴なる対立をなして居る惡神アングラ・マイニュウ即ちアーリマン及び其支配の下に在る禍惡の國土が儼然として存在し、而して此はツアラトゥストラに胚胎した見逃し難き二元的性質であると主張するかも知れぬ。されど此の二元的性質は決してペルシャ宗教の一神教的精神の所産でない。それは寧ろ反省及び考察の範囲に属して居て、實際の宗教儀礼とはなつて居らぬ。されば惡神に対する信愛の情が鮮かになり強くなるに従つて、惡神に対する思想は次第に其の姿を隠して了ふ。蓋しペルシャの宗教では善神のみが全能なる創造の神である。創造は独り此神のみ能くする所で、惡神の如きは唯だ摸倣と惡戯と破壊とを能くするに過ぎぬ。而して善惡両国の争闘に於て最後の勝利を決する秘鑰も亦善神の掌中に在る。さればペルシャ宗教の二元的性質は、恰も基督教に於ける惡魔の信仰に比すべきものである。かかる二元的傾向は、例へば中世紀の基督教を見るやうに、時として一神教の面目を損ふ事もある。但し斯くの如きは要するに宗教生活の末梢に起る現象で、決して其の中核を犯すやうな事がない。

プラトー及び彼に親炙せる弟子等に取りては、神格の一^レ如と云ふ事は証明を要せざる公理であつた。彼等が時に多くの神の名を挙げて居るのは、單に在來の國民宗教の言葉を藉りて、同一神格の種々相を譬喩的に言表はして居るに

過ぎぬ。従つて此点に於て古き国民宗教との間に超え難き鴻溝を生じたのである。十分に神を写象して居らぬといふ理由の下に、プラトーはホメロスをすら其の「國家」に入り来るを拒んだ程であった。然るに後代に至りて、民間信仰の対象たる諸神は、惡魔であり、神人の間に介在する半神半人であると云ふやうな説明や、民間宗教に行はれて居る神話及び儀式等に対する奉強附会の解釈によりて、プラトーのいと高き信仰が、俗人の信心と歩調を一にさせられて了つた。後期ギリシャ哲学には、ギリシャ人の多神的信仰を改革し征服すべき宗教的勢力も道徳的勢力もなくなつた。

イスラエルの古代の予言者等が一神教徒であつた事は更めて言ふに及ばぬ。併し乍ら後に述べるやうに、本当に一神教を完成したのは後期の予言者等であつた。第二イザヤの説教になると一神教は已に完全に発達して居る。彼に従へば異邦人の諸々の神は、悉く人間の空想の所産であり、神々を崇めるのは生命なき偶像の崇拜であり、一切の多神教は宗教的にも道徳的にも邪惡なる外道である。唯だエホバのみが眞の神であり、全能の創造者であつて、イスラエルの民はエホバの栄光を全地に伝ふべき使命の為に選ばれた神の僕であり、神の使である。

第五。宗教を以て全生命の内面的統一となす予言者等の観念は、終に宗教に附隨する一切の外面的事情より脱却し風俗・習慣・乃至伝承・儀式等の束縛を打破するに至つた。予言者等は只だ赤裸々に精神と生命との宗教を宣伝した。後代のギリシヤの唯物論者は民間信仰に降参したけれど、プラトー及び其の学徒等が当時に行はれた国民宗教の儀式に対して、全然自由な態度を探つて居たことは疑惑を容れる余地がない。ツアラトウストラの宗教改革に関する最古の記録に従しても、吾等の知る限りでは供儀の儀式や司祭の制度は殆ど無視されて居た。仏陀は印度人が無上の聖者と崇めた四吠陀書に対して大なる尊敬を払ふことをしなかつた。而して吠陀に基いた一切の繁縟を極めた供儀の儀礼を軽んじた。かくて仏陀は印度に於て最も勢力を振へる僧侶階級即ち婆羅門族の特權を無視した。イスラエルの

前期予言者等も、概ね儀礼や司祭制度に反抗した。唯だエゼキエル以後の後期予言者等のみが、儀礼に対して好意を抱くやうになつた。

本章を結ぶ前に、吾等は予言者の宗教の意義及び価値に就て具体的の觀念を得る為に、古代イスラエルの予言者教及びそれが上来述べ来れる根本概念と如何に關係して居るかについて述べて置く。蓋しイスラエルの予言者教が、此の隔段に於ける一切の宗教中で、最も意義あるものなることに就ては、何人も異論なき所だらうと思ふ。

第一に吾等は、予言者出現以前の古代イスラエルの宗教は、如何なる状態にありしかを見ねばならぬ。第一章に述べたやうに、古代イスラエルの宗教はセム人の部族宗教から生れたのである。此處に吾等が注意すべきは、古代のセム宗教に於ては、神々の数が他の部族宗教に於ける如く多數でなかつたことである。諸神の数には常に制限があつて或る部族の如きは唯一の神を男神女神の姿で崇拜して居た。古代イスラエルの宗教は、獨一の神、即ちシナイ山上のエホヴのみを厳格に崇拜して、一切の其他の諸神を拒否する点に於て、他の宗教と鮮かな区別があつた。エホヴは男性にもあらず、女性にもあらざる未分化の神格であつた。こはモーゼがイスラエルの諸部族を糾合して一国民となした時に、従来個々の部族で崇拜し来れる部族神をば、エホヴと並び立つる事を許さなかつたのだとしか思はれぬ。而してイスラエル人がカナンの地を征服した時にも、大体に於て信仰に変化がなかつた。征服された部族が崇めて居たバール神の名と相とてエホヴが崇められたことは屢々あつたけれど、バール諸神は決してエホヴと相並んで崇拜されはしなかつた。固より之が為には激しい争闘や衝突が行はれた。アハブ王は、其の王妃にしてチロ人なるイゼベルの為に、エホヴの崇拜と相並んでチロ人のバール崇拜を国内に行はしめた。而も此時すでに宗教史上に於て第一位を占むべき偉大なる宗教家が其の力を現はして居る。予言者エリヤは、獨一の神の為に總ての他の神々と相争つた。エホ

ヴの名は嫉妬なり、そは嫉妬の神なりと言はれたのも實に此時である。併し乍らエリヤの遺志を継いだ人々は彼の如く偉大なる人格を有して居なかつたので、最早や精神を唯一の武器として多神教と戦ふ事をしなかつた。彼等は陰謀と干戈とを以て、不思議なる宗教的行為の為に社会と離隔して居た一部族を剿絶することをさへやつた。北朝滅亡の後、マナセ王の時に当りて、多神を奉する異教徒に対する激しき反動が北部ユダヤに於て行はれた。蓋しイスラエルの國歩艱難なるに際し、人々は守護神エホブの力を頼ふやうになつたのであつた。されど此場合に於ても、純一なるエホブ崇拜が遂に最後の勝利を占めた。

茲に吾等が注意すべきは、当時のエホブ崇拜が今日吾等が言ふ如き一神教でなかつた事である。イスラエルの宗教史に於ける最も偉大なる予言者エリヤすらも、尚ほ且つ醇乎たる一神教を知らなかつた。当時の宗教は一神教に非ずして「^{モーセ}神奉仕教」である。獨一なる宇宙の神格を信するに非ずして、諸神中の一神に奉仕するのである。イスラエルといふ一国民がエホブと云ふ一神を崇拜し、エホブとイスラエル、イスラエルとエホブ、この二つは結んで解けざるものとなり、唯だイスラエルの民のみがエホブに事へ得ることとなつた。ダビテ王さへも、エホブの力の及ぶ世界は、イスラエルの地に限られ、イスラエルの地を去るものは他の神に事へねばならぬと信じて居た。列王紀略の記者が、エリシャの為に癲病を癒して貰つたシリヤ人ナアマンが、己れの国にもエホブの為めに祭壇を築かんと、二駄の土を驃馬に積んで帰つたことを書いて居るのにも、エホブはパレスチナの土の上でのみ崇められべきものであると云ふ素朴なる信仰が現はれて居る。モーゼの第五書にさへも、エホブは独りイスラエルの民のみを選び、自余の国民をば自余の諸神に委ねて居ると云ふ信仰を赤裸々に書いて居る。さればイスラエル人の宗教が眞の一神教でなく、エホブは最も偉大であり、且つイスラエルに取りては唯一の重要な神ではあつたけれども、そは多くの神々の中の一神であると信じて居た事から心理的に解釈され

る。エホヴとイスラエルとの関係は飽まで自然的で、エホヴが其の民を愛するのは性質上必然のことであつた。彼はイスラエルを愛せざるを得なかつたのである。若し愛せざるを得たとすれば、其の時は最早や本来のエホヴでなくなつたのである。従つてまたイスラエル人が其の國の君主たるエホヴを崇め、エホヴが下し給ふ幸福と恩寵とに酬ゆる為に、立派な犠牲を献げるのも極めて当然のことであつた。

固よりエホヴに対する信仰が全然精神的となる可き根柢が其の間に在つたのも事実である。エホヴは他のセム人の部族宗教に見る如く、イスラエル人の肉身の祖先として崇拜されはしなかつた。エホヴは寧ろ多くの国民中よりイスラエル人を選んで其の寵兒としたのである。エホヴと、イスラエルとの関係は同盟であり結合である。彼はイスラエル人をエジプトより救ひ出し、曠野の間を導いて約束の地に至らしめた。彼は斯くの如き歴史的な、人格的な行動によりて、イスラエル人を彼のものとしたのである。彼の力は全くイスラエルの地にのみ限られたのではない。彼の眞の住居はシナイ山で、其処に御姿を現はして居る。彼は遠隔の地にありて不可思議を行ふ神である。而してまたイスラエルの宗教には強大なる道徳的衝動が動いて居た。エホヴは正を賞し邪を罰する正義の神であつた。されど此等の精神的因素は、当初のイスラエル宗教に於ては未だ潜める力たりしに過ぎぬ。宗教は尚ほ甚だ自然的であつた。

かくの如きは古代イスラエル人の信仰である。然るに時勢は推移した。今やイスラエルは四隣の諸国を克服せる戦勝国でもなく、列国と互角の地位を保つ強国でもなくなつた。一抹の黒雲が東北の天に現はれてイスラエルの方に進んで來た。世界統一を期して居たアッシリヤ国が、其の恐るべき侵略の歩を西南に向つて進めて來た。黒雲は消えんとして消えず、物凄く天上に漂ひて、慘風悲雨の今にも至るべきを思はしめ、名状し難き恐怖の念を人々に抱かせた。当時のイスラエル人は果して如何なる態度を取つて居たか。大多数の人々は目前に迫れる災難を知らず、楽しげに浮立つて居た。そは表面は繁榮と幸福との時代であり、高き文明の時代であつた。奢侈と罪惡とは手を携へて行は

れ、群衆は狂氣の如く浮かれ立ちて、花々しき祭礼を楽しんで居た。富者は貧者を虐げ、貧者は不平を抱き乍らも富者の圧制に甘んじて居た。王の宮殿は華麗を極め、大勢の軍隊が之を守護して居た。國家興廃の危機に際して居り乍ら、天下は旧の如く太平の姿であつた。少數の識者や愛國者のみは、國家の前途に憂患を抱いて居たらう。併し多數はエホヴの力を信じて憂ふることを為なかつた。エホヴは必ず彼等を助くべきものである。若し然らざればエホヴは彼等の神でなくなる、而してそは在り得べからざることと信じて居た。

されば若しイスラエル人の中に、或る力強き精神がなかつたならば、其の宗教は種々の国民が混融する間に、跡形もなく消え失せて了つたかも知れぬ。アッシリヤは北イスラエルを亡ぼし、其後五十年にしてバビロンは南イスラエルをも亡ぼして了つた。而してアッシリヤ及びバビロンの為に亡ぼされたイスラエルは、今はただ歴史の上に其名を留めるに過ぎぬ十数の種族と同じ運命に終つた事であつたらう。されど此時に当りイスラエルの宗教史上に偉大なる力が動いて居た。予言者の莊嚴なる姿が此時を以て現はれたのである。若し此等の予言者なかりせば、イスラエルの宗教は爾來國民の上に振りかかれる種々な出来事に反抗して屹立することが出来なかつたらう。予言者等は人民に向つて新しく而して高き信仰の基礎を与へたのである。彼等は己れの民を滅ぼす神を説いた。彼等の曇りなき目は、益益鮮かに此の事の真理なるを見た。彼等は北方より迫るアッシリヤと、南方より迫るバビロンの為に、イスラエルは到底滅亡を免れぬと知つた。されど斯くの如き先見は未だ彼等の宗教的事業と言ふことが出来ぬ。彼等が宗教上に重大なる地位を占むる所以は、此間に在りて彼等のエホヴに対する信仰が、牢乎として何等の動搖をも来たさなかつた所にある。彼等はアッシリヤ及びバビロンが、イスラエルと其の神と其の信仰とを亡ぼすのは、盲目的な運命の力、又は彼等の知らざる神々の力に由ると考へなかつた。彼等はイスラエルを亡ぼすものはエホヴ其者に外ならぬこと、強大なる敵国はイスラエルを懲らす神の筈に外ならぬことを堂々と宣告した。かくて彼等は「一切の価値標準の顛

倒』をやり遂げたのである。吾等は茲に最も鮮かなる宗教的信仰の矛盾相若しくは両極性を認める。予言者等は叫んで言ふ、イスラエルを亡ぼす者はエホブ其者であると。而も彼等は其の前に身を投げて、此の畏るべき神が吾等ものであると言つた。

予言者は恐るべき孤独の姿で人民の間に其の信仰を宣べた。見よ、人々は祝祭の歎呼の声に浮き立つて楽しみ狂うて居る時、イスラエルの滅亡」がまざまざと目に映るアモスの心は、哀歎に堪へかねて悲しき歌を歌つて居る。

きどり処女イスラエルは仆れて復起き上がらず

かれは己れの地に仆倒たおされて之を扶け起す者なし

群衆は彼を狂人と思つた。ベテルの司祭アマジャは次の言葉で彼を追ひやつて了つた—「先見者よ、汝往きてユダの地に逃れ、彼處にて予言して汝の食物を得よ、然どベテルにては重ねて予言すべからず、是は王の聖所、王の宮なればなり」。

エレミアに於ても同一である。彼の生涯も亦悲壯なる孤独の生涯であつた。彼の一族も友人も、彼を遇するに狂人を以てした。姿を現はせば殺されるので、故郷のアナトラに帰ることすらも出来なかつた。或時は牢獄に繋がれ、或時は水中に沈められ、或時は洞窟に閉籠められた。人々は皆彼を指して謀叛人よと罵つた。

予言者等は己れの宣伝する所が眞実なる事を知つて居た為に、曾て信仰の動搖がなかつた。何者か天上より来りて彼等を囚にする。彼等は黙して居る事が出来なかつた。「我重ねてエホブの事を宣べず又その名をもて語らずと言へり、然れどエホブのことば我心にありて、火のわが骨の中に閉こもりて燃ゆるが如くなれば忍耐に疲れて堪難し」「彼等は總ての群衆と相背き、凡て習慣と伝承との上に築かれたる群衆の信仰を拒否した。予言者の雄々しき姿は衆愚の無知と苟安とに対して苦しき戦闘を続けつゝ、神より与へられたる自身の高き確信に従つて行動する總ての人々のた

めに、永遠に輝き渡る偉大なる儀表となつて居る。『彼等は汝に帰らん、されど汝は彼等に帰るなかれ』。これエホヴ
がエレミヤに告げ給へる言葉であつた。

彼等の信仰は事実に於て遙かに群衆の信仰を超越して居た。而して彼等の其の高い信仰が、エホヴとイスラエルとの間に結ばれたる従来の自然的関係を動搖せしめた。予言者の神は最早や一国一処の神ではない。其の神は自ら選べる民を亡ぼすかも知れぬ。併し乍らそれは聊かも神の尊厳と光榮とを害なふことがない。其の神の支配は全世界に及ぶ。総ての国々は弱きも強きも悉く神の支配下に在る。そは總て罪を罰する神の笞である。今は世界を脚下に蹂躪して勝利に驕れるアッシリヤやバビロンにも、審判の日が遠からず来るであらう。神こそは全世界の主である。神は此の世界を造つた。地球上の一切のものは總て神に屬して居る。国民の如きは之を神に比すれば大海の一涓滴に過ぎぬ。かくの如くにしてエホヴとイスラエルとの間に存在せる自然的関係は破られた。而して精神的関係が之に代つた。

吾等は先に古代イスラエル国民の間には神と彼等との関係が純然たる必要に基くものでないと云ふ思想が存在して居たことを述べた。彼等はエホヴとイスラエルとの關係を以て彼等をエジプトの地より呼び起して之と相結べる、神の自由なる人格的選択に基くと考へて居た。而して今や予言者によりて此の觀念が高調された。イスラエルの神と其の民との關係は、純乎たる道徳的のものである。エホヴは正義の神である。エホヴは水の泉より迸り出づる如く、イスラエルより正義の流れ出でんことを求めて居る。然るにイスラエルはエホヴの望に副はぬために、彼は此の民を拒否して、どん底まで蹶落そうとするのである。聖書には下の如く書いてある。『汝等宜しく聖くあるべし、そは我エホヴ汝等の神聖さよくあればなり』。『聖なるかな万軍のエホヴ、其の栄光は全地にみつ』。今やエホヴは斯くの如き神となつた。

神は習慣や伝承のやうな外部の仲介で其の民と交はらうとせぬ。外面的儀礼は神を動かす力がない。神に事へん

と願ふ人は、良心を以て、従順なる意志を以て、然り全生命を以てせねばならぬ。彼は其有てる總ての心情と精神と意志とを以て神に事へねばならぬ。予言者は儀礼に対する猛烈な反対者であつた。彼等は單り旧時の遺風として伝はれる意義なき儀式に反抗せるのみならず、總て宗教上に行はれて居た儀式には悉く反対した。總ての偉大なる予言者例へばアモス、ホゼア、ミカイ、イザヤ（少くとも其の伝道の初期に於て）エレミヤ、第二イザヤ等は、悉く儀礼と闘つた人々である。ただエゼキエル以後の後期予言者に至りて、儀礼に対して多少の好意を表するやうになつたのである。彼等はエホヴハが罪祭・燔祭・新月祭、又は安息日祭を、少しも喜び給はぬと告げた。エホヴハは野に在りし彼等の先祖に向ひて、總て此等儀式のただ一つをも命じ給はなかつた。エホヴハの恩寵はエルサレムに於ける神殿の崇拜と没交渉である。「汝等是はエホヴハの殿なり、エホヴハの殿なり、エホヴハの殿なりと云ふ偽の言をたのむ勿れ。汝等もし全く其途と行とを改め、人ととの間を正しく審き、異邦人と孤児と寡母^{ヤマウタ}とを虐げず、無辜者^{フクダツガ}の血をこの処に流さず、他の神に従ひて害を招かずば、我なんぢ等をわが汝等の祖先に与へし此地に、永遠より永遠に至るまで住ましむべし。」これはエホヴハがエレミヤを通してユダヤの總ての人々に宣べしめたる言葉である。

予言者の説教は痛切なる問題の提供に終つて居る。彼等の目に映じたものは、暗黒と滅亡とであつた。ただ此の深刻なる悲哀と相並んで、いとも微かなる希望と光明とが認められた。何人も断言は出来ぬけれど、或は不可思議なる神の力が此の民の上に加はるかも知れぬ。若しイスラエルの民の中に、其の非を悔ゆるもののが一人でもあるならば、或はエホヴハ再び此の民に臨んでイスラエルの罪を赦し給ふかも知れぬ。そして茲に新しき黄金時代が現はれ、国民の石の如き心を取り去つて、温かき心を賜はるかも知れぬ。この希望は次第に強くなつて來た。予言者は声高く歌ひ始めた。

汝等の神言ひ給はく、慰めよ汝等わが民を慰めよ、
懇ろにエルサレムに語り、之に呼ばはり告げよ、
その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたりと。

呼ばはるものゝ声きこゆ、曰く、

汝等野にてエホブの途をそなへ、

沙漠に吾等の神の大路を直くせよと。

諸々の谷は高く、諸々の山と岡とは低くせられ、
曲りたるは直く、崎嶇けほじょは平かにせらる可し、
かくてエホブの榮光あらはれむ。

古代イスラエルの予言者はかくの如きものであつた。そは高く吾等の上に聳え立つ孤独な、偉大な、暗黒な、悲壯な姿である。予言者の中の最も偉大なる人々は、ただ其の前途に暗黒と罪惡と滅亡とを認めるのみであつた。後期の予言者等は再び希望と光明とを認め始めたけれど、其の実現を見ずして世を去つて了つた。されどそは彼等の為に寧ろ幸福であつた。若しそれを見たならば彼等は非常なる失望を味はねばならなかつたであらう。何となれば彼等の説教が勝利を得、彼等の精神が民衆の精神を支配した時には、そは最早や彼等自身の精神と異なるものになつて居たから。かくて總てが復た形式に墮し、予言者の眞の精神は種々なるものの為に蔽はれて了つた。こは彼等の生涯と事業との大なる悲劇であつた。

併し乍ら彼等の多くは其の伝道の目的を達したと言はねばならぬ。彼等は国民の信仰を救ひ、之に新しき根柢を与

へることが出来た。かくて外面的国民的生活が終局を告げた後に於ても、其の宗教は長く滅びざることを得た。

予言者は太陽を後にして吾等の前に聳ゆる高山の絶頂である。其の蔭に在る諸々の谷や小山は尚ほ夜と暗黒とに鎧されて居る。されど光は已に其の上を照らし、黄金なす旭日が其の光を放つて居る。太陽が中天に上りて谷々山々を隈なく照らすまでは尚ほ長い間がある。されどいつかは必ず其の時が来る、見よ光は已に吾等を光被せんとして居る。

第五章 律法教(ユダヤ教、ペルシヤ教、回教)

上に述べた宗教は、予言者の時代に到達した高潮をいつ迄も持続することが出来なかつた。歴史の波には高低がある。予言者の理想は今や万人の抱く所となつた。されど予言者の思想が勝利を占め、それが万人によりて解釈せられ認受せられるやうになつて、当初の純一を失つて了つた。但し此間にも尚ほ宗教上の重要な進歩があつた。吾等は之をも看過してはならぬ。仮令予言者の理想は其の純一を失つたとは言へ、之が為に其の実際上の感化は更に弘まつて往つた。墮落もし腐敗もした上に、異邦人の神々と妥協するやうな状態に陥つたけれど、其の間にありて尚ほ最も偉大なる感化を及ぼしていたのは、依然として予言者の理想であつた。

かくて茲に人類の宗教生活に一の過渡的形式を生じた。そは相矛盾する二形式の中間に位する不徹底なもので、一面に於て明瞭なる普遍的傾向を具へて居ながら、他面に於ては儼然たる国民的束縛を受けて居る宗教である。一神教ではあるけれど、多神教の要素を具へ、又は種々なる制限の下に爾く名づけ得る宗教である。儀式的崇拜を超越して居り乍ら尚ほ之に向つて少なからぬ価値を置く宗教である。精神と真理との神を崇める方に進みつつあり乍ら、次第

に外部の形式と伝承とを重んぜんとしてある信仰である。此等の宗教は総称して通常律法教と呼ばれて居る。されど習慣と儀礼とが中枢になつて居る点より云へば、儀礼の宗教と名けた方が更に適切である。

此類に属する宗教的現象のうちで、第一に研究すべきはユダヤ教である。即ちバビロン幽囚及び其の以後に形成せられたる後期予言者時代のユダヤ教で、基督教出現前後一百年の間に於て最も著しく其の特性を發揮したものである。ユダヤの研究資料は大部分旧約全書の中に含まれて居る。就中最も重要なのはモーゼ五書の後の部分、即ち出埃及記、利未記及び民数記略に残つて居る所謂司祭典で、次には詩篇の大部分である。尤も詩篇には律法に囚はれぬ自由な信仰と、予言者当時の純淨な精神とが現はれて居る。第三の資料は更に後代に現はれた外典 *Apokryphen* 及び偽書 *Pseudo-Epigraphen* で、ダニエル書に始まる啓示文学 *Apokalypsis* の諸書が此の中に含まれて居る。而して新約全書の約翰黙示録は、其の性質上当然この啓示文学に属するものである。

第二に研究すべきはツアラトゥストラ以後のペルシャ宗教である。波斯の聖經なるアーヴィスタの大部分は此の時代に出来た。アーヴィスタの中で聖頌の載つて居るヤスナ篇だけは、ツアラトゥストラが改革當時の精神を伝へて居るやうに思はれ、多くの讃歌を含めるヤシト篇はツアラトゥストラ以前に行はれ且つ後年再び復活し来れる多神教時代の信仰を宿して居る。其他の部分は總て吾等が今より研究せんとする律法教時代の所産である。而してペルシャ教の法典たるエンディダッドの如きはモーゼの五書と同性質のものである。イラン人の宗教は種々な運命に遭逢した。ペルシャの勃興に際しては、遠く西北バビロンの平野に弘まり、アルメニア・カッパドシア・ポントゥス・シリシアに及んだ。歴山大王はペルシャ帝国を亡ぼしたけれど、其の宗教を亡ぼはしなかつた。紀元前三世紀の末、アルサシダ王朝の下にペルシャは再び独立国となり、紀元後三世紀にササン王朝が立つに及んで、茲にペルシアの正統王国兼正統教会が始まった。アーヴィスタが編輯し出版されたのは此の時であつた。

第三に、吾等は歴史大王時代よりギリシャ文明の没落に至る間に行はれ、プラトーの思想を根柢としたギリシャ人の宗教を挙げ得るかも知れぬ。但し此の宗教は実際に於て律法教に属するものではない。吾等は次章に於て其の本質を研究しようと思ふ。ただ此處でも亦優秀な精神的宗教が、低級の民間信仰と歩調を一にするに至つたと云ふ事実が存在する限りに於て、一種の形式的関係だけはある。

第四に研究すべきは、上の諸宗教よりも遙かに後代に屬する回教即ちモハメッドの改革せる宗教である。モハメッドは極めて複雑な性格の人であつた。彼の本領が那辺に存するかを決定するのは到底容易の業ではない。乍併彼は決して第一流の宗教的天才ではなかつた。モハメッド一代の事業は、宗教的と云ふよりも著しく政治的であつた。血を以て闘ひ、血を以て報ゆる在来の野蛮なる法律を打破し、共通なる新しき宗教を根柢として、アラビヤ種族を一国民に糾合したことが、彼の偉大なる功績であつた。此の新しき宗教は猶太教及び基督教に負ふ所が頗る多かつた。されどモハメッドの知り得たのは、腐敗し堕落した基督教及び猶太教であつた。モハメッドが抱ける予言者の自覚は、固より自他を欺く底のものではなかつた。但し彼の衷に宿れる予言者の力と意義とは、極度に単純なものであつた。彼は粗野にして狂熱的な、そして半ば腐敗し去つた混沌たる宗教的思想の中から、多くの不用なる観念を除き去りて、当時尚ほ半開なりしへドウイン種族の為に、彼等の文明の程度に相応した一宗教を造り上げた。されど此の宗教觀念は、新約及び旧約に現はれたるものに比ぶれば明かに退歩の跡を示して居る。

最後に吾等が注意して置かねばならぬのは、律法教の特質として以下に叙述する諸点が、基督教の或派に於ても認められることがある。ギリシャ正教会や天主公教会の如きは、明かに律法的・儀式的・限局的の性質を帶びて居るし福音教会でさへも全然之を脱しては居らぬのである。

吾等は一通り律法宗教の概論を終つたから、以下項を分ちて此種の宗教の特質を出来るだけ明瞭に述べよう。

第一。予言者は一神教の宣伝者であった。従つて少くとも原則としては彼等の説教には従来なかつた普遍性が含まれて居た。彼等は一国民に限られる獨一の神を説き、万人に通する人生の理想を説いた。されど予言者の周囲に行はれて居た宗教は、到底かくの如き高調に達することが出来なかつた。

古代イスラエルの予言者等は、エホバが其民を亡ぼして、宗教と國民との結合を打破すべきことを宣言した。然るに後代の予言者等は、其民をして爾く沈淪の極に陥らしめたエホバが、決して彼等を捨てぬことを堅く信じて、復興の日の必ず来るべきを説いた。彼等の中の最大なる一人に数へられる第二イザヤは、次の如き注意す可き推論をなして居る。神は唯一で、凡ゆる國民は此の神に事ふべきものである。されどイスラエルは選ばれたる主の儀で、万国を導いて神を知らしめる使命を帶びて居る。イスラエルの艱難は正しき者が曲れる者の利益の為に苦しむ試練であると。

然るにバビロン幽囚後、エルサレムに小さき独立國が興るに及んで、予言者等が宣伝した独特的の普遍的性質は失はれて了つた。尤もイスラエル自身に於ては、一神教は些の動搖も受けなかつた。されど逆境に沈める彼等は、此の全能なる唯一の神が、唯だイスラエルの國民のみを選び、此の唯一の國民の利益の為に全世界を支配して居ると考へて自ら慰めた。かくの如き思想が許すべからざる矛盾であることは論を須ゐぬ。神は其の國民のもので、國民は其の神のものであると云ふ國民宗教に於ける極めて普通の思想が、今や赤裸々の主義化し、単純なる褊狭心と化した。かくの如くにしてユダヤの限局せられたる宗教が起つた。

ユダヤ教は更に其の往くべき道を進んで行つた。而して紀元前二世紀又は三世紀頃から驚くべき伝播を見た。それはユダヤの境を超えてバビロン・エジプト・北アフリカ・シリア・小亞細亞に及び、遠くギリシャ及びローマに拡まり次で更に西方にまで弘まつた。到る所に、殊に大なる都市に於て、故国を離れたるユダヤ人の宗教的團体が興つた。

固より悉く信する事は出来ないが、当時の統計が示す処に拠れば、羅馬帝国の人口の七プロセントはユダヤ人であった。ケーナル及びアウグストゥス大帝、並に大帝の友人なりしアグリッパは、ユダヤ教に向つて特別の好意を与へ、其の後ネロ帝の時代に於てすら、シナゴグの教師等はローマの朝廷に大なる勢力を有して居た。ユダヤ教は大勢に乗ることを知つて居た。使徒行伝の記事で知り得る如く各市のユダヤ人の教会の周囲には『神を畏れる異邦人』が群がつて居た。而して彼等は此等の異邦人に對して伝道を怠らなかつた。こは歴史的に辿り得る最初の大なる世界伝道の現象である。固よりこれが世界的伝道の唯一のものであつたとは言はぬ。當時ギリシャ・ローマ帝国に行はれた種種なる宗教は、みな世界的傾向を帶びて居た。概して言へば東方より西方に進める諸宗教は、悉く一神教的になりかけて居た。少くとも混沌たる多神の世界を統一し単純化せんと努めて居た。彼等は国民的束縛を脱却して、階級や国民の如何を問はず、己れに来るものを悉く歓迎して居た。普遍的一神教出現の機は熟して居た。而してユダヤ教は当時に在りて此等類似の現象中に於ける最も重要なものであつた。

されどユダヤ教は斯くの如き世界的教会を形成し、世界的伝道を始めたに拘らず、尚ほ明白なる束縛と制限とを有して居た。其の弘布の範囲が世界的なりしに拘らず、ユダヤ教は尚ほ国民的宗教たるを免れなかつた。当时に在りてユダヤ教に入ったものは、單に其の宗教のみならず、其の国民性をも変へねばならなかつた。即ち彼は最早ギリシャ人にもローマ人にもあらず、ユダヤ人となつて了はねばならなかつた。この事実は一般の人民、並に教養ある人士、文芸界の諸大家に反感を懷かせ、已に紀元前一世紀にユダヤ教に対する攻撃が始まつて居た。而して攻撃の対象は宗教其者に非ずして、ユダヤ人と云ふ人種であり、ユダヤ人と云ふ國民であつた。ユダヤ教の敵たる一文豪、即ち歴史家のタチトウスは下のやうな意見を述べて居る。『彼等は万人の憎みを招く。彼等は異邦人と食を共にせず、また牀を共にせず……彼等は異邦人と婚姻を結ぶことなし。彼等の宗教を奉するものは彼等と同じく上の如き風習を守

る。彼等改宗者が最も厳かに教へらるるは諸々の神を拒み、祖国を棄て、其の妻子を蔑しむ事なり』。而もユダヤ人自身等は、ユダヤの宗教と道徳とに帰依してシナゴグに集まる異邦人の改宗者を以て、尚ほ第二位の信者としか思つて居なかつた。生れ乍らのユダヤ人と、改宗せる異邦人との間には、越ゆべからざる鴻溝が在つた。されどユダヤ教が最も世界教に近似して来たのは此の当時であつた。紀元後一世紀の末葉に及び、ローマ帝国がユダヤを亡ぼし、新興の基督教がユダヤ教と相並んで世界伝道を始め、終に之に打勝つに至つてユダヤ教は再び純然たる国民宗教に退歩し爾来今日に至るまで一国民に限られた宗教となつて了つた。

ペルシャの歴史も、全然同一ではないけれど、ユダヤ教と類似の轍を踏んで居る。簡単に言へば、ペルシャ教の中には世界的宗教となるべき要素が含まれて居たにも拘らず、長い間一国民に限られ、終にはユダヤ教よりも更に退歩を見るやうになつた。ツアラトウストラが唱道した信仰は、根本に於て一神教であつたけれど後代のペルシャ教には雜駁なる多神的国民的信仰が入り込んで來た。アエスターの中で恒に変らざりし部分は、イランの諸神に獻げた讃歌集のヤシト篇である。往昔國民が崇めた神々は、再びアフラ・マヅタと相並んで独立の存在を得るやうになつた。ペルシャ教の一支派では、數世紀に亘りてアフラ・マヅタを至高神とはしないで、ペルシヤ人及び印度人に共通なるは古代アリアンの神なるミトラを最も尊き神と崇めて居た。

乍併ペルシャ教の歴史に於ても、ユダヤ教と同じく、或は其よりも更に強く、世界的宗教たらんとする傾向を生じた時代が屢々あつた。そは世界を統一せんとする偉大なる國民の宗教であつた為に、其の國民と共に西方に伝播したのである。ペルシャ教が後期のユダヤ教に影響して其の発達を助けた事は殆ど疑ひを容れぬ。ユダヤ教に於ける来世の觀念、復活の信仰、及び惡魔に対する信仰に伴ふ二元的傾向等は、恐らくはペルシヤ教の感化であらう。乍併ペルシヤ教が至高の發展を遂げたのは、其の生めるミトラ教に於てであつた。吾等は此の宗教の内面的精神的内容に就て

は殆ど知る処がない。そは秘密を以て蔽はる後期ローマ・ギリシャ文明時代の所謂密儀宗教に属して居る。此の宗教に於ける至高神にして且つ實際上唯一神たりシミトラは、始め光明の神であつたが、後には常勝の太陽神たり、且つ地上に於ける一切の忠実・眞実・誠実の守護神となつた。而して紀元後二世紀の末葉以来は、常にローマ皇帝の尊信を受けて、帝国内に於ける最も有力なる宗教となつた。そは善惡の間に儼然たる区別を劃し、道德と文明とを策進する一切の有益なる事業は、神功に参与するものなることを根本の原理として居た。そは信者に要求するに嚴格なる訓練、熱心なる苦行及懺悔を以てした。そは戦つて勝たざることなき太陽神の崇拜であつた。そは神秘なる後光を發して世界の支配者等を包んで居た。總て此等の諸点は、ミトラ教が自余の如何なる宗教にも立優りてローマ帝国内に栄えた所以であつた。ミトラ崇拜はローマより更にイラン河の彼岸にまで及んだ。バーデン及ヘッセンには、此のペルシャの神を祀つた遺跡が今日まで残つて居る。ミトラ教は基督教の最後の強敵であつた。基督教の大敵なりしユリヤン帝もミトラの崇拜者であつた。されど基督教がローマ帝国で勝利を得て此かた、ペルシャ教は全然ペルシャ民だけの宗教となつて了つた。而して茲にかの基督教を迫害したササン王朝時代の排他的な正統ペルシャ教が発達したが、終に回教の為に最期を遂げるやうになつた。

吾等は進んで第三の回教を研究しやう。回教は過渡期に停滞した宗教の特質を具へて居る。そは淺薄に解釈すれば普遍的一神教のやうにも思はれる。獨一神に対する信仰は、回教の生命として非常なる狂熱を以て守られては居る。過ぎ去れる異教の靈場、即ち本来は一の咒物崇拜の対象たりしメッカの方殿^{カバ}が、礼拜の中心地として今日に及んで居ると云ふやうな、一神教には適はしからぬ落度を此處で述べ立てるにも及ぶまい。兎に角回教は種々なる國民及び人種の間に弘まり、而して表面上は其の世界主義を保持して居る。数字の上より見ても二億の信者を有する世界第三の宗教である。現に今日に於ても新たに回教に入る者の数は基督教に改宗するものよりも多い。されど回教は更に進歩

した高等な文化を有する国民を感化することが出来なかつた。そはモンゴル人及び黒人の如き低度の文明を有する人種の間に弘まつた。而して故国のアラビアに於ても、概して言へば人民は再びモハメッド以前のペドゥイン人の生活に退歩して居る。

之にも拘らず回教は一神教のやうに見える。されど實際に於て回教は始めより今に至るまで一の國民宗教である。更に適切に云へば政治的に束縛せられ制限せられたる國民宗教である。モハメッド一代の事業は實際に於て國民的・政治的で、其の期する所は諸種族を糾合して一國民となすにあつた。晩年のモハメッド及び彼の後繼者等は、アラビア人が政治的に世界を征服する事を以て其の旗印として居た。回教の歴史ではモハメッドの正当なる後繼者は誰ぞと云ふ事が最も大切な問題となつて居た。政治的に考へればこは明かに最も重大な問題である。而して回教に於ても信仰上の事に關して基督教同様に多數の宗派に分れた。而して神聖なる戦争によりて伝播し、劍の力によりて伝道した。基督教及びユダヤ教と相争ふに当りても、世界教の本領たる改宗を求めずして、ただ政治的服従を贏ち得んとした。全体より見れば回教は改宗者よりも寧ろ租税を納むる不信者を喜んだ。回教は今日に於ても尚ほ政治的勢力となつて居る。而してそは原則としては獨一の政治的首長を許して居るから、大多数の回教徒は土耳其王を以て首長と認めて居る。されば時々首長權を主張するベルシャヤ王が、コンスタンチノープルに来る時は、種々な儀式上の困難を惹起すのである。而して若し茲に一個の英雄が出現して、之が回教徒の多年翹望し来れる救世主（マーティ）であると信ぜられる暁には、全回教国は起つて神聖なる戦争を始めるのである。回教に於ては政治と宗教とが夫程まで密接に結合して居る。

乍併これは独り回教に於てのみではなかつた。今翻つて基督教会を一瞥するに、此處でも亦國民的・政治的因素が勢力を得て居る。東ビザンチン帝国の基督教は、國民的に束縛され制限されて居る点に於て、殆どササン帝国のペル

シヤ教と選ぶ所がない。回教の大敵たる中世紀のローマ即ち法王の権が全盛を極め、十字軍を起した時代のローマでは一種の政治的敬虔の念が基督教徒の心に湧いて来た。而もこは其の本質に於て回教の特徴たる政治的信念と拝ざるものである。但し基督教は長い間の悪戦苦闘を経て、国民的・政治的桎梏を打破し、茲に始めて宏大にして自由なる世界的宗教となる事を得たのである。

第二。予言者が總ての国民宗教の中核たる供儀崇拜の反対者なりしことは已に之を述べた。律法を根柢とする宗教に在りては、此の事に關して種々なる異論が行はれて居る。イスラエルの後期予言者等は、已に神殿崇拜の熱心なる主張者であつた。而してバビロン幽囚後新たに興つたユダヤ国では、儀礼を重んじる傾向が再び勝利を得た。バビロンから帰つた人々の七分の一は悉く司祭であつた。さればイスラエルの後期の律法は、儀礼と祭司とを本位として居る。詩篇の多数の中には明かに儀式的崇拜が現はれて居る。されど之に対する非難の声も已に高まつて居た。イザヤ書の最後の章はその最も力強き叫びである——

天はわが位なり

地はわが足_{あしだい}なり

汝等わが為に如何なる家を建てんとするか

又いかなる処かわが休憩_{やすみ}の場とならむ

牛を屠る者は人を殺す者の如く

羔_{ひつじ}を犠牲_{いけにへ}とする者は狗_{いぬ}を殺す者の如く

祭物を献ぐる者は豕_{いのこ}の血を捧ぐる者の如く

香をたくものは偶像をほむる者の如し

かくの如く力ある反駁の声を挙げるものは固より甚だ稀であつた。一般の性質より言へば、概して後代のユダヤの信仰は、新たに興れる儀式に対して自然的関係がなかつたことは注目に値する。儀式はいつ迄も信仰の中心たる事が出来なくなつた。こはユダヤ教の伝播に伴ふ必然の成行である。エルサレムの神殿と離るべからざる儀式の如きは、世界の各地に弘まつたユダヤ教徒の信心を満足させる事が出来ぬ。人間が一生の間に僅々一二回だけ参与し得るに過ぎぬやうな宗教的儀式が、何でいつ迄も宗教の中心であり得よう。加ふるに紀元前第三及び第二世紀の頃から、祭司が世俗化し始めて、種々な新しい儀式が起つた中で、殊に注目すべきは吾等が後節に論ぜんとするシナゴグの礼拝であつた。かくて敬虔なユダヤ教徒の精神は、儀式の束縛を脱するやうになつた。紀元後七十年にエルサレムの神殿が破壊せられ、之と共に儀式も亡ぼされて了つたけれど、そはユダヤ教に対して何の打撃をも加へることが出来なかつた。

ペルシャに於ても爾く明瞭ではないが極めて類似の変化が行はれた。始めツアラトゥストラが宣伝したのは全く儀礼を離れた宗教であつた。司祭は此の予言者の敵であつた。さればギリシャ人が始めてペルシャ教に接して最も驚いたのは、此の宗教に殿堂もなく神像もなく供儀の儀式もない事であつた。されど多少の儀礼は当初より存在して居た就中最も注目すべきは拝火の儀式である。火を祭る多数の殿堂に於て、アルタヴァン又はマーゲルと呼ぶ僧侶階級のみが行ひ得る面倒な儀式の下に、神聖なる火を点じ、之を守り、之を崇めて居た。而して後には動物犠牲も亦ペルシャ教の中に入り込んで来た。ミトラ教に於ては、動物犠牲が最も重んぜられ、秘密の修法を行ひ乍ら、地下に建てられたる神殿の中で、ミトラの祭壇に牡牛を献げる儀式の如きは、最も重要な祭事であつた。

三つの律法教中で最も統一ある回教は、供儀に代ふるに一種の精神的崇拜を以てした。そは基督教、殊には当時すでに犠牲を廃して居たユダヤ教に倣つたのである。併乍宗教に於て犠牲の觀念を払拭すること、即ち人は犠牲を献ぐ

ることなくしては神に近づくを得ぬと云ふ信仰を除き去ることが如何に困難なるかは、基督教の歴史を見ても直ちに領会される。基督の死は基督教徒の神に獻ぐべき犠牲の永遠の代償なりと云ふ思想は、ポーロ以来常に基督教の中心観念となつて居る。而してローマ教会とギリシャ教会では、基督の死、即ち偉大なる供犠を、精神的に翻訳せる読経が儀式の中心点となつて居る。

第三。律法的宗教は如是にして次第に神殿崇拜・供犠崇拜及び此等と相結べる一切の束縛を脱却するやうになつたけれど、内面的な精神的な純一の信仰は遂に湧き出でなかつた。儀式はなくなつたけれど、其の代りに更に力強き外的束縛即ち儀礼、更に換言すれば宗教上の一一定の慣例を生じた。吾等は此の現象の本質を探らねばならぬ。

先づ第一に後期のユダヤ教に就いて考へて見よう。此の宗教の特色は何であるか。曰く一定の宗教的慣例である。即ち割礼、安息日を守ること、十分一税を納めること、異邦人と結婚せぬこと、飲食上の定例、聖潔に関する掟等であつて、犠牲及び神殿崇拜ではなかつた。猶太人は到る処で此等の事によりて人目を惹いて居た。

此等の定例は当初何等格段なる宗教的意味を有せざりし国民的風習であつた。少くとも宗教が尚ほ国民的階段に在りて、宗教的風俗と国民的風俗との間に、未だ截然たる区別を劃し難かりし時代のものであつた。然るに今や此等の風俗が宗教生活の中心となり、最も神聖なる神の命令として厳守されるやうになつた。其の意味は充分明瞭でないが始まれば單にイスラエルの国民と他の国民とを別つ国民的シムボルに過ぎなかつた割礼が、ユダヤ教の最も重大なる特質となつた。神とアブラハムとの結合は、割礼の思想を根拠とするやうになつた。安息日を神聖に守ることは、恐らくバビロンに出でたる極めて古き宗教上の風習であつた。其の意味は割礼と同じく不明であるにも拘らず、之がユダヤ教の第二の鉄則となつた。神が創造の業を息んだ如く、七日目に人も亦休息せねばならぬ。之を破れば死を以て罰される。十分一税を納める事は、もと單なる儀式上の義務であつたが、今や宗教的生活の根本律となり、非常なる価

値を置かるるに至つた。而も之によりて行はるる神殿崇拜は、次第に内面的の信仰生活に対する意義を失つて來た。

宗教上の定例を高調する此の傾向は、紀元前一世紀頃に已に一個の宗教体系に発達した。かくて此等の所謂パリサイ人の信仰が興つて來た。パリサイ宗の先導者が公言する所によれば、彼等の理想は『人民の周囲に墻を築く事』であつた。換言すれば繁縟を極めたる律法を以て人民の生活を圍繞し、一拳手一投足の間にも、人民をして夫々一定の行動に出でしめ、かくて神に選ばれたる神聖なるユダヤ人をして、異国民の間に永く異彩を放たしめんとするのであつた。篤信なるパリサイの徒が、煩瑣を極めたる幾百幾千の些々たる無意識の律法を守りて生活せんとした苦心は、殆ど吾等の想像以外である。かくしてパリサイの宗教は儀礼宗教の絶好の典型となつたが、同時にこは宗教生活の退歩を示すものとなつた。驚くべき宗教的精力が此の宗教に注がれたことは認めねばならぬ。されど其の精力は些々たるもの、外面向のものに向つて浪費されて了つた。ユダヤ人をして其の特性を失はざらしめんとした目的は遂げられた。而も其の報償としてこの『神聖なる國民』は、他國民の輕侮を受けねばならぬやうになつた。

ペルシャ教の発達も全くユダヤ教と其揆を一にして居る。この宗教も亦儀礼の宗教となつた。ペルシャ教の法典たるモンティダードは、甚しくモーゼ五書の利未記に似通うて居る。シドンに残つて居る所謂アレキサンデル石棺の上に彫付けられたギリシヤ人とペルシヤ人の戦争は有名なものであるが、其圖を見ればペルシヤ人は悉く顔の半面を蔽ふほど大きい口被を着けて居る。吾等は此の處にペルシヤの重要な律法の一つを認めることが出来る。即ち敬虔なるペルシヤ人は、火及び空氣といふ神聖な元素に其の息を吹きかけぬやうに、常に口被を使つて居たのである。此外に聖帶を締めることも、丁年に達せる男子の必ず守るべき宗教的義務であつた。元素を汚し之に對して不礼を加へることを怖れる心は、ペルシヤの骨髄に浸込んで居る。ペルシヤ教に行はれる習慣の中で、殊に異彩を放つてゐるのは屍体の処置であるが、こは上述の理由から容易に解釈が出来る。ペルシヤ人は火を汚すこと恐れて屍体を火葬に付す

ることをせぬ。また地を汚すこと恐れて埋葬することもせぬ。かくて屋根なき高塔の上に屍体を曝し、鳥をして之を喰はしめるのである。料理の際に湯を沸かし過ぎるのも、ベルシャ人に取りては重罪の一つである。何となれば沸き過ぎてこぼれ出る湯が火を穢するからである。エンティダッドの中には極めて些事に關せる、往々にして笑ふべき規定を満載して居る。而して或種の動物、例へば犬・牛等を害すべからざることに關する繁縝な規則が其の大部分を占めて居る。此等の些細な儀式上の規定に応じて、懺悔及び刑罰に關する面倒な組織がある。例へば何人も容易に犯し勝ちな或る罪惡は、死刑を受けねばならぬのであるけれど、二百の笞刑で免かれることも出来る。

次に回教に於ても宗教的慣例が宗教生活の中心になつて居ることは容易に知る事が出来る。此處で吾等は單に回教の所謂五大支柱、即ち五条の根本律に就て考へるだけで充分である。五条の根本律とは獨一の神を信ずる事、毎日五度祈禱する事、毎日五度身体を清浄にする事、貧者に布施する事、少くとも生涯に一度メッカに参詣する事である。かくて宗教的儀礼に関する規定が始まど全く回教の中心を占めて居る。

儀礼が宗教の有力な外部的結合力となつて居ることは疑を容れぬ。儀礼が重視される所では、全然宗教的生活の分離を見る虞れが決してない。加之儀礼の力が宗教の内的生命を存養し、神人合一の激刺たる意識を喚び起し、道徳上の絶対的本務の念を抱かしめるに与かりて力ある場合もある。されど之と同時に儀礼は宗教生活に於て最も戒心を要する危険物である。三つの大なる宗教が、多かれ少なかれ儀礼の為に亡ぼされて丁つた。基督教会に於てさへも、儀礼は非常なる勢力を振つて居た。儀礼は宗教を束縛して国民的段階の上に出づることを得ざらしめた。そは吾等が既に述べたやうに、宗教的儀礼の中に國民的風習が固持されるからである。次に注目すべきは當代に行はれる正義の観念が宗教と相結んで居ることである。宗教上の風習は、同時に宗教上の正義である。かかる時代に於ては宗教と法律

とが渾一されて居る。此の傾向が甚しくなれば宗教は単に神と人との間に結ばれたる契約關係に過ぎぬものとなり、神の優越性に関する思想が消滅し、利益の觀念が最も重視せられ、宗教は終に一の商売になつて了ふ。而して法律上の正義は其の本質上、少くとも實際に於ては外面向的・結果本位的であり、積極的ならずして寧ろ消極的である如く、宗教も亦外面向的・結果本位的の性質を帶び來り、余りに繁縝なる規則、殊に禁令を過度に制定して遂に自ら滅亡を招く。かくの如くにして本来相結んで居る二つの生命の力、即ち道徳と宗教とは、風俗や習慣のために却つて密接なる結合を妨げられるのである。

第四。次に研究すべきは總て律法教に共通な一二三の新しき特別の形式及び其の特質である。一般に言へば、宗教が國民性の束縛を脱却して最早や、單に國民的風習でなくなつた時代には、かくの如き新らしき形式を必要としたと言ひ得る。

その第一に挙ぐべきは告白文である。宗教が已に國民的風習に非ずして人格的確信となつた以上、總ての信者を結合すべき新たなる絆が必要になつた。而して其の新しき絆は、宗教の最も重要な諸点を簡明に概括した文章、即ち告白文であつた。例へばペルシャ教の古い記録の中には此種の告白文が極めて多い。其の最も古いのはアーナ・ヴィリヤの告白文で、後にはペルシャ教徒自身さへ其の意味を解せずして讀誦するやうになつたが、今大意を採りて翻訳すれば下のやうなものである。

主の意志は正義の捷なり。現世に於てマツダの為に働くものは天に登る。アフラは貧者を恵む者を其の王国に迎ふ。

同じくマツダに対する信仰を告白せるものに下のやうなのがある。

私は悪魔を厭離す。私はマツダの帰依者、ツアラトゥストラの信者、提婆の敵アメシャスベンタの讚美者なり。

我は竊盜を行はず、また家畜を掠めず。

我は他のものを奪掠せず、また自のものを浪費せず。われ總て此等のことを眞の心をもて起誓す。

此等の告白文を読む時は、ペルシャ教が如何に高度の文明に到着せんと努力し、野蛮を脱却せんと精進して居たかを知る事が出来よう。イスラエルでは其程まで告白文が発達しなかつた。されどユダヤ教徒が己に紀元後一世紀頃から朝夕誦誦するやうになつた下の祈禱は、告白文其者に外ならぬ。

聴けイスラエルよ、エホヴは吾等の神なり。

こころを尽し魂を尽し力を尽して汝の神エホヴを愛すべし。

而して回教徒の告白文は

アルラーよは大なり、モハメッドは其の予言者なり。

と言ふ簡単な文章である。

信仰は当然告白文と一致して居る。予言者の宗教では己に述べたやうに總てが人格的確信を根柢として居た。宗教は信仰なりとの意識は、それが充分に明瞭になつたのは更に高き段階に達した宗教に於てであつたけれど、此頃より己に其の萌芽を認めることが出来る。最初のメデア王朝の一人の王がフラーオテス即ち告白者と名乗つた事は己に述べたが、伝道用に供する為にユダヤ教の信仰と道徳との神髓を概説したユダヤの或書は「總ての事を措き先づ天地を造れる神を愛すべし」と云ふ文で始まつて居る。かくの如くにして宗教が次第に個人の確信となり来るに従つて、同一国民の中で宗教的な人と非宗教的な人と、信者と不信者との間に、截然たる区別を生ずるやうになつた。宗教が国民宗教の段階に止まつて居る間は、神を無視する者がない。若しあれば直ちに自己の存在を失つて了ふ。國民である以上は、みな其國の宗教を奉ずる人であつた。然るに今や宗教は國民の間に鴻溝を造るやうになつた。ペルシャ教の古

い記録には、信者と懷疑者、神を拒む者と之を信奉する者とを、明白に區別して居る。旧約に於ても同様である事は更めて云ふ迄もない。而して神の徳を墨守するパリサイ人と、罪人及び一般公衆とが互に敵視して居たことも新約を読んだ人の知悉する所である。

第五。次に此等の宗教を奉する人々は、己れの宗教に關する根本的の記録を集成し、之を以て新しき一つの絆とした。されば此時代の宗教は總てそれぞれの聖書を有して居る。ユダヤ教には紀元一世紀前後に集成された旧約がある。ペルシャ教にはササン王朝時代に始めて今日に伝はれるやうな風に編輯されたアビスマスがある。仏教には其内容が三部に分れて居るために爾く名づけられる三藏がある。而して回教にはコラーンがある。唯だ後期ギリシャ文明時代に起つたプラトー後派の宗教のみが同一の挙に出でなかつた事は、偶々此宗教の世俗的にして且つ半哲學的なを示して居る。

此等の聖書は夫々多趣多様の内容を有して居る。併し乍ら總てに共通せる一点は、彼等の中に神聖なる過去、換言すれば現代に對して絶対的權威を有すとせらるる過去の時代より伝はれる諸々の証言を包容して居る事である。教祖及び教祖に親炙せる偉大なる人々の格言、教訓、語録、神に獻げたる讃謡、神聖なる古代の歴史、教祖の生涯より造り出された多くの物語、儀式的・宗教的・道徳的の規定、總て此等の事柄が各宗教が有する聖書の複雑な内容をなして居る。

而して此の聖書が今や絶対的權威となつた。そは信仰と道徳と儀礼とに関する一切の問題に對して、明瞭な、積極的な、而して完全な解釈を与へるのである。聖書の權威は強制的であり且つ犯すべからざるものである。何となれば此種の總ての宗教に於ては、聖書を以て神の啓示に本づくものと信ずるからである。聖書は人間の手になれるものに非ずして、一字一句悉く神より与へられたものである。最も不可能なる事も信仰の目よりすれば可能に見える。紀元

一世紀頃のユダヤ人にとっては、實に旧約聖書のみならず、そのギリシャ訳も亦神の啓示であつた。彼等によればモーゼの律法は歴史以前のもので、世界の創造に先ちて存在し、天の神によりて啓示されたものであつた。律法即トーラハを書き写した巻物は、殆ど呪物崇拜に於ける呪物同様の畏敬を払はれて居た。後世の回教徒はコラーンを以て天上より落下し来れる本と思つて居た。一字一綴みな無謬であり、一章一句みな証権である。「コラーンにかく記されたり」と言へば最早議論の余地がない。かくの如くにして敬虔とは聖書に熟通すると同じ事になつた。

かかる理由の下に宗教的生活に於ける新しき先導者の一階級が出来た。宗教が聖書を根柢とするやうになつた上は聖書の綿密な組織的研究が至極の一大事となつた。かくて此等の聖書を研究し、其總ての部分を知悉せる人が宗教の指導者となる。耶穌の時代に於て旧約に精進して居た学者等が、如何に大なる勢力をユダヤ人の間に振つて居たかは何人も熟知する所である。耶穌と時を同じくせるピレルが「学ばざる者は罪を怖れず、俗人にして敬虔なるものなし」と言つて居るのは、其の学問によりて宗教上の勢力を振へる人々の傲慢なる態度を最もよく示して居る。耶穌が此の学問を根柢とせる信仰に對して如何に激しく反抗したかは更めて説くまでもない。而してユダヤ教に於けると同時に、ペルシャ教でもマーゲルと云ふ一階級が勢力を振つた。マーゲルとは半ば司祭であり、且つ古代の神聖な伝説に通曉して居る学者階級である。後代のギリシャ哲学者もユダヤの学者やペルシャのマーゲルに比すべきものであつた。彼等は余り数多くない弟子等に向つて、世間的智識を教へるよりも、寧ろ宗教や道德を説いて居た。中世紀の回教には多くの神学者が居た。而して彼等は基督教の神學に好影響を及ぼして居る。かくの如くにして神学者が宗教の首長になつた。

之と相結んで書籍信仰とでも命名すべき一種の信仰形式が現はれた。聖書を尊重し、不斷に之を讀誦するのが其の信仰の目印となつた。子供が読方を習ふに當りて、先づ聖書から始めると云ふ事がユダヤ教の特徴であつた。『聖書

は小児の読書入門となれり』。初期の回教では頑迷にして狂熱的な読経派と呼ばれた一派が大なる勢力を振つて居た。

首て初代回教徒間に予言者の繼承戦争が始まつて両軍相対峙した時、これまで敗北を続けて殆ど征服されるばかりになつた軍隊の方で、槍の先にコラーンを結び付けて進んだ為に、優勢であつた軍隊は、遂に今迄の勝利を犠牲にして了つた事もあつた。かくの如く聖書の天啓を信じて絶対的に之を神聖とする信仰は、眞実にして熱烈なる信仰と相結び得る可能性もあり、また事実左様な事もあつた。乍併そは同時に恐るべき危険を伴ふ事を忘れてならぬ。それは啻に信仰をして單に学問たるに終らしめる危険があるのみならず、不斷に過去の神聖に執着して、常に現在と現在の尽瘁とを等閑視する非常なる危険を招くのである。信仰は空虚なる記憶力の遊戯と墮し、邪径に迷へる顯才の競争場と化して了ぶ。かくて半解な聖書の文句を乱暴に引用し來りて、之を現在の要求に適用すると云ふ面倒な芸当に巧みな者が、人々の心を動かし且つ信仰に篤いと見られるのである。

第六。次に吾等が特別の注意を払ふべきは、全然新たなる形式の共同礼拝が起つた事である。而して其の礼拝の形式はユダヤ教のシナゴグに於て最も明瞭に現はれて前る。ユダヤ教の古代の真正なる儀式は、エルサレム神殿と離るべからざるものであつた事は、已に之を述べた。さればシナゴグに於て儀式を離れた礼拝の起るのは、寧ろ必然の事情であつた。然らばそは如何なる礼拝であつたか。即ち信者等が礼拝堂に集り（殊に安息日に）共同の祈禱を獻げ、聖書を説誦し、聖書を講義する事（こは説教と言つてもよい）が礼拝の要素であつた。此の新たなる儀式はユダヤ教と共に弘く世界に拡まつた。儀式の華麗なく、組織に於ては全然平民的にして、司祭もなく、血を流す犠牲もなき此の礼拝は、今日の吾等が日毎に行ふ靈と真理とを以てする礼拝と殆ど同一のものである。ペルシャ教の礼拝組織は記録の徴すべきものが極めて稀である。されど此の宗教に於ても『読經堂』が存在して居た事は伝説に残つて居る。回教に於てはユダヤ教のと同一形式の儀式を離れた礼拝が行はれる。回教の根本律五ヶ条の一つは毎日五回祈禱すべき

事を定めてある。而して回教で言ふ祈禱は、取も直さず簡短なる礼拝である。一日に五度回教徒は時を期して寺院に集まる。総ての回教徒の町々のシンボルたる典雅な招楼の上から、樓守が四方に響き渡る声で祈禱の時の至れるを告げる。人々は長老の音頭に連れて、今日では全く外面向的の習慣になつて了つた祈禱を獻げる。正午には最も大切な礼拝が行はれ、其時には説教もある。

以上の外、此の階段にある宗教に行はれた色々な形式があるだらうが、吾等は茲に下の三つだけを列挙して置く。第一はユダヤ教ではシナゴグ以外に於て一定の組織ある俗人の祈禱が行はれた事、第二にはユダヤ教及び回教が共に断食を重んじた事、第三にはユダヤ教、ペルシャ教、及び回教が共に貧民救護と布施とを重んじた事。

第七。如上の三宗教が其の性質に於て如何に密接なる關係を有するかと云ふ事は、三宗教に共通なる一つの根本的觀念を研究する時に最も明瞭に領会される。而してその觀念とは宗教史上に於ける最も重要な觀念の一に数るべき最後審判の觀念である。死後應報の思想が已に國民宗教の中にも存在して居る事は上の述べた通りであるが、最早化石しかけて居たエジプトの宗教を除けば、そは決して宗教の中心觀念となつて居なかつた。然るに律法教に於ては、死後應報の觀念が非常に重大なものとなつた。而して此の方面の開拓者はペルシャ教であつたやうに思はれる。そ是最も夙く死後應報思想の發展に全力を注ぎ、且つ之を表白した。最古の告白文なるアッナ・ヴィリヤの中に早くも『現世に於てマツダの為に働くのは其應報として天國に入るべし』と言つて居る。ペルシャ教の最古の記録には、恐るべき審判の日に於ける難晦記事に充ちて居る。而して此の思想はペルシャ教に於て二つの方面に發達した。即ち一方に於ては死後直ちに受くべき個人の審判を説き、他方に於ては世界全体に対するアフラ・マツダの大審判を説き、全世界が悉く焼き尽される事、次で世界が新たに改造される事、死者が復活する事を教へて居る。ユダヤ教に於ても紀元前三世紀より二世紀にかけて、一面にはペルシャ教の影響を受け、他面には自教に潜在して居た思想の發展により、

ペルシャ教に於けると同じく死後応報の觀念が二重に發達して來た。而してモハメッドに在りては此の信仰が彼の説教の中心となつて居た。一度コラーンを開けば、到る處に末日に關する説教や、永遠の審判に關する教義がある。今此等の宗教に於て死後応報の觀念が如何に重大なるものとなつて居たかを示す為に二三の例を挙げよう。紀元後一世紀の末葉に出た所謂以士喇第四書の作者たるユダヤ人は、下の如き終末觀を述べて居る――

七日の後尚眠りつゝある世界は喚び醒まされ、亡ぶべきものは亡び去るべし。地は己れの中に息める者を呼び起し、塵は己れの中に眠れるものを呼び醒ます可し。此時至高者來りて審判の座に着く。悲しみ去り、艱みは消ゆ。審判は残り、真理は確立し信仰は勝利を得、所業は長く続かむ。善業は賞せられ悪業は罰せらる。

回教の終末觀はコラーンの第一百一章によく現はれて居る――

其日人々は散布せられたる蛾の如く、山々は梳くしられたる多色の羊毛の如くなるべし。衡にかけられて善業重きものは幸福の生を送るべし。悪業重き者の住家は地獄の底なるべし。地獄の底とは如何なるものぞ、汝等之を知るや。そは炎々として燃え立つ熱火なり。

一切が神に対する法律的行為を根柢とし、正邪の觀念が非常に重視されて居る此等の宗教に於て、死後応報の思想が宗教的生活の中心点となるのは怪しむに足らぬ。かくて此等の宗教は、宗教的生活に對して非常に重大な意義を有する信仰を作興した。そは集注せられ、統一せられたる強大なる力を信仰に与へた。人間の全生涯・全行動は、今や偉大なる神の前に行はるる永遠の審判を受くるためのものとなつた。人間は永遠の生命を贏ち得る準備をなす為めに暫く地上に生きるのである。此の信仰に於ては、宗教と道徳とが能ふ限り密接に結合されて居る。世界の全歴史は全面的統一を有するものとなり、其の最後に偉大なる世界審判が行はれるものである。而して個人の生命も亦非常なる価値を有するやうになつた。人は自らの所業によりて永遠の運命を定め、自らの手に天界と地獄との門を開くべき鍵

を握つて居るのである。

されど此處でも亦律法教は悲しむべき制限と束縛とを受けて居る。外面的形式を重んじ、感覚を根柢とし、偉大なる精神的觀念を純一に会得することが出来ぬ傾向は、此等の宗教を研究すれば直ちに目に付く。審判の觀念は一般に極めて外面的・物質的に解釈されて居る。審判とは要するに善及び惡を全然器械的に計算する事にすぎぬ。されば此等の宗教では、審判を以て善業及び惡業を量る天秤として居る。かくて人生は一々積み加へて行く分離せる行為の一例にすぎなくなつた。宗教は吾等の哀なる精神が、其の本来の要求より神に向つて進み行く發展なる事、善なる生涯は統一ある全体であることは、彼等の闇知せざる所であつた。宗教は神を相手の商売となつた。信者は善業を積む。而して来世に於ける幸福は、恰も僕主が職人に払ふ賃銀の如く、神が其信者に払ふ報酬である。基督当時のパリサイ人には、人生とは自分等の行為が果して神が求めるだけの善を残して行くや否やを計算して、其日々々を神を相手に取引する事であつた。善業の不足はあらゆる種類の懺悔苦行で之が弁償を図つた。敬虔なるペルシャ教徒は、定数の鞭撻を受けて、一切の罪障を贖ひ、かくて痛い目をしながらも天国に入る事の疑なきを喜んで居た。

此等の宗教では来世の応報に関する信仰が實に外面的形式に陥つたのみならず、極めて物質的に考へられて居た。三宗教は孰れも最も厭ふべき物質的形式を以て天国及び地獄を現はして居る。想ふに律法教に於て爾く厳酷に禁止されて居る官能の生活が、幻の如き天国地獄の空想によりて、その空しき満足を求めて居るのかも知れない。天国の生活とは物質的満足を与へられる現世の生活の継続にすぎぬ。此處には病なく、災なく、爽かなる牧場あり、清き流れあり、美味なる飲食あり、而して熱烈なる恋がある。地獄の生活とは極端な生理的苦痛の生活にすぎぬ。其處には身を凍らす寒さあり、堪へ難き飢餓あり、焦熱の苦しみあり、名け難き蒸暑さあり、永遠の暗黒がある。而して極悪の人の為には、最も唾棄すべき空想のみが描き出し得る種々の苛責がある。

来世に關する想像は、ペルシャ教及び回教に於て等しく極端に走つて居る。ユダヤ教では多くの終末觀に現はれる所より見れば、前両者よりは應報の觀念に對して更に精神的な、眞實に宗教的・道德的な解釋を有して居た。されど一旦ユダヤ教が、神の永遠の審判に關する思想を、その國民的自負心、及び一切の敵国に對して現世的勝利を得んとの希望に結び付けるに至つて、其の永世の觀念は、またもや物質的な外面向のものに墮して了つた。

吾等は以上述べ來れる此等三宗教の最も著しき特質を、再び此處に概説し説明して此章を終らう。吾等は此等の宗教に於て、國民的宗教及び多神教が一神教たらんとする傾向、内面的のもの精神的のものを求める努力、習慣より信仰と確信とへの發展、神殿崇拜への進化、供犠より祈禱への発達を見た。而して之と同時に常に物質的・外面向的束縛を脱し兼ねたことをも見た。かくて儀礼と習慣とが勝利を得て、宗教は遂に風俗と國民性との為に縛り上げられた。真正の一神教は未だ現はれず、道徳と宗教との眞の絆は尚ほ結ばれて居らぬ。

人は宗教に於て統一ある何者かを求めた。彼は人生の理想を求める、日常生活の上に超在せる、より高く、より道徳的な精神的善を求めた。されど此等の努力は總て岐路に迷つて、最も些細な事の中に注がれ、外面向的事の為に浪費された。

されど吾等は此等の過渡的宗教を酷評してはならぬ。宗教が此間に得たる所は決して少々でなかつた。或程度まで國民宗教の褊狭と多神教とを脱し、或程度まで神殿崇拜や供犠の如き外部の儀式を離れた。宗教は信仰であり確信であると云ふ思想が現はれんとして來た。此の時代の宗教は吾等に告白文、聖書、及び聖書に伴ふ信仰と神学、新しき形式の礼拜、組織ある俗人の祈禱の如き尊き遺産を残した。而して死後應報の觀念は宗教の中心となつた。更に高き文明を造り出すべき要素が此處に潛んで居る。人間の精神はただ一の偉大なる解放を期待し、之を成就すべき新しき

宗教の力を翹望して居た。

第六章 解脱教（仏陀、プラトー）

吾等が此章に於て研究せんとするのは、第四章に述べたる偉大なる宗教改革運動の中で、他に比類なき典型的の宗教に発達し、且つ前章に述べたる律法教とは全然面目を異にするに至りし二つの宗教に就てである。仏教とプラトー教とは、其の性質に於て全然律法教と反対な解脱教の最も純一なる表現である。此二つの宗教は、其の純一なること、其精神的なること、其の世界的なること、其の国民的及び多神教的要素を混ぜざる点に於て、予言者の信奉したユダヤ教と基督教とを除き去れば、人類の至高至醇なる宗教的觀念を現はして居る。吾等は先づ両者の各々に就て其在るが儘の姿を描き出し、然る後に両者に共通なる特色を知るに努めよう。

仏教を領会する為には溯つて古代印度の宗教史を探る必要がある。古代印度の宗教は、国民的多神教であつた。それは勝利者たり權威者たり文明の護持者たる國民の宗教であつた。彼等の最も尊んだ神は、インドラとブルナとであつた。インドラは風雨及び戦争を司る強大にして放縱な神、ブルナは其人格的価値に於ては遥かにインドラの上に位する天の神で、隠れたるを見、正義を護り、罪惡を罰し又は赦す一切視者であつた。此等の人民は夙くも已に宗教上の記録、即ち吠陀聖典を有して居た。吠陀中の最古の部分なる梨俱吠陀の讃誦は、古代印度人の激刺たる、而して無邪氣なる信仰を忠実に歌つて居る。然るにアールヤ人が次第に北印度を征服するに及んで、印度人は非常に墮落し始めた。豊沃なる此の地方の生活、酷烈なる此の地方の気候は、恐るべき悪影響を彼等の上に及ぼした。四姓制度も亦此

間に発達して、勝利者と被征服者、貴族と平民との間に、超え難き障壁を築いて了つた。かくて下層の人々は一切の向上発展の路を鎖され、上流の人は民を治め行く実力を養ふ一切の機会を失つた。かくて印度人は何等歴史的の力もなき個々の小国に分れた。此極めて小さい国家組織、歴史を有せざる国民の姿は、印度の到る處に認めることが出来る。

さればかくの如き国民の間に僧侶が尊敬を博し、遂に四姓中の至高の地位を占めるに至りしことは怪しむに足らぬ。僧侶は神と人との間の唯一の仲介者であつた。彼等は吠陀を読み、犠牲を獻げる権利を独占した。初めは單に物理的の火であつた火神アグニは、僧侶が獻ぐる供儀の火の神として、インドラ及びブルナと並び立つ印度の至高神となつた。

印度文明を支配する空想的氣分は、其宗教にも現はれて居る。神々の個々の姿は次第に消え去つて互に融解するやうになつた。今は或一個の神に凡ゆる高貴なる属性を付して之を讃仰するが、忽ちにして他の神に転じて了ふ。されば印度に於ては、ギリシャのツォイス、ペルシャのアフラ・マツダ、イスラエルのエホブの如き、鮮かな特性を具へた至高神の出現を見ずして、却つて具象的な多神の世界から、抽象的な神格の觀念が発達して來た。而して實に具象的な諸神の姿が次第に消え去つたのみならず、原因と結果、主体と客体との驚くべき混一が行はれた。この事は祭火の崇拜の中に己に妊娠して居る。物質的な儀式上の方法と、神的主体との獨特な融通によりて、祭火は神其者になつて了つた（之はソーマに於ても同様である）。之と同じくプラハマン即ち梵は、始めは神を動かす力ある祭司の祈禱であつたが、後には単に所定の儀式的祈禱たるに止まらず、信者をして神の中に融合せしむる媒介者となり、終には神其者となつた。

後代の婆羅門教はかくの如くにして発達した。而して此の発達の過程にありし印度の正統的宗教には、下に述べる

やうな二三の根本原理があつた。

第一は宗教に於ける主体と客体との徹底せる融合である。神は人間及び一切の自余の衆生の中に内在する至高至全の存在として、一切の生命及び其の現象の最後の帰趣として領会された。「一切は皆神の中にのみ存在するを知りて存在の奥に潜める統一を掴得する人は、悲しみもなく迷ひもなし」。

波羅門教徒は如何にして此の至高の実在に到達するか。如何にして彼の存在に関する此の確実に到達し得るか。それは自我の奥底に沈み行くことによりてである。人は最も深刻なる靈的生命を有して居る、靈の靈を有して居る。印度人は之をアートマン（氣息）と名づけた。感官によりて知られる外界との交渉を断絶する時、一切の希望と欲求とを絶滅する時、一切の言語と思想とを払拭する時、而して自我の奥底に深く沈み入る時、其時には彼の至深の自我なるアートマンを見るのである。婆羅門教の此の教義は、唯一なる至高の神格と人間の至深の自我とが同一なる事、人もし小我的物質的束縛と、小我の人格的生活を全然脱却し、全く自我を抛棄し去れば、己れの存在の根柢となりて自家の中に潜在する普遍の神格を見出し得る事を説くものである。梵は我であり、我は梵である。宗教に於ては第一人称も第二人称も總て消え失せて丁度。而して此の至高の知見に達する道は二つある。第一の道は祈禱、觀想、純然たる精神的省察である。第二の道は更に激烈なもので、懲悔、呵責の苦行である。凡ゆる種類の激烈なる手段により、断食其他の難行苦行によりて自我を滅殺し、恍然たる自失境に陥り、又は極度の昂奮に達して、神人不二の真理を体讀するのである。

第二は転生又は輪廻の思想である。吾等は此の思想が古代印度宗教の中に本来含まれて居た要素であるか、又は印度人に征服された野蛮人の思想であるかを詳かにする事が出来ぬ。孰れにしてもこは最も低級な宗教観の残物である。宗教生活の最低の生活に於て、人間の精神が其の死後に動物又は植物等の生物、又は他の人間、甚しきは無生物

の中にさへ宿り得ると云ふ思想が普く行はれて居たことは已に述べた通りである。然るにこの輪廻生死（サンサリ）の思想は、印度宗教の中心となりて、一定の体系に組織せられ、且つ新しき思想が之に加へられて、更に倫理的・目的論的性質を帯びるに至つた。印度人は之によりて自家存在の謎を解かんとした。彼等は何故に現世には爾く甚しき幸不幸の別があるか、何故に爾く多くの苦があるかを考へた。是まで述べ来れる多くの宗教では、此の疑問の起る毎に、常に想を未来に馳せ、来世に於て一切の不公平が均衡せられ、又は最後に神の審判が行はれることを信じて此の問題を解決して居る。然るに印度の宗教は此等とは反対に過去を顧みた。そは現世に於ける艱難不幸を以て、個人が過去世に於てなせる罪障の結果だと説いて居る。人間の運命は彼が前世に於てなせる行為の如何によりて定まる。而して印度人の考へによれば此の輪廻生死の鎖は無限に続く。精神の力は決して自ら消滅する事がない。従つて現在の存在は、常に未來の存在の原因である。その過程は永遠より永遠に亘りて止む事がない。この輪廻生死説及び前世の行為を以て後世の原因とする業報説（カルマ）は、婆羅門教に於ける第二の根本原理である。

第三は厭世観である。こはプラハマ即ち梵に対する信仰の中に已に其一端を示して居る印度宗教の第三の要素である。眞実の生活はただ唯一実在の生活のみである。一切の部分的存在は必然的に不完全である。一切の個我的存在は必然的に多苦である。而して印度人の精神と文明とは更に此の傾向を策進した。已に述べたやうに印度人は将来の発展を知らず、また過去の歴史を有せざる国民である。彼等に取りて人生はゼネレーションの意味なき出来であり、何等の目的もなき懶き遊戯である。而も彼等は輪廻の信仰によりて永遠に無常生死の苦界に繫縛されて居る事を感じて居る。この信仰は個人的存在の悲惨を永遠に亘らしめる。断続なく、休止なく、死滅もない。

かくの如くにして宗教の全生命は輪廻解脱の憧憬に注がれた。其の期する所は生の解脱である。單なる生の解脱である。悩みに充ちたる永遠の彷徨を止める事である。

仏教以前のヨーダーンタ哲学は已に解脱の道を発見して居た。そは自我の本体が根柢に於て唯一実在と同一なるを悟了し、一切の有様なるものは必然的に不完全なるを知る事によりて解脱を得らるべしと教へた。かくの如き知見は驚く可き力を有し、個人的存在的根源を断ち、輪廻の力を奪ひ去るのである。此の知見を開いた人は、死して無上安穩の境に入る。

吠陀を根拠とする此の印度正統のヨーダーンタ哲学と相並んで多くの哲学体系が在つた中で、殊に注意すべきはサンキヤ即数論哲学である。数論学派の人々は印度宗教の根本原理の一なる唯一の神的実在を否定して、世界は互に相關聯する無数の存在より成ると云ふ原子論的世界觀を唱へて居たが、印度宗教の他の二つの根本原理、即ち輪廻説と厭世主義とは固より之を保持して居た。此派の人々も解脱は正しき認識によりて得られると說いた。身体と精神とは全然没交渉のものなる事を知る人は、直ちに一切の苦を超越する事が出来る。何となれば人生に於ける一切の苦痛は、單に人間の肉体的存在と關係して居るものであるのに、人間の内在者即精神も亦之に累されると信ずるのは迷妄である。かくの如く仏教とサンキヤ哲学とは或点に於て密接な關係があるやうに思はれる。されば仏教以前の精神的生活に存在せる此の要素をも明かにして置かねばならぬ。

これまで述べたのは仏教以前の印度宗教の骨子である。併し乍らそは全く骨子だけであつて、付するに皮肉を以てしなければ、本当の姿を描き出す事が出来ぬ。上來述べた宗教觀は、根柢に於ては单一な且つ理解し易いものであるけれど、そは際限なき議論と、混沌たる儀式とのために蔽はれて居た。吠陀の古典は尚ほ權威者となつて居た。人々は吠陀の眞の意味が何処に在るかと云ふことは殆ど念頭に置かずに、ただ口が思ふ儘に之を解釈して面倒な分析を試み、之を以て昔より伝はれる聖典を根拠とせる新しき教を唱へて居た。而も實際に於て彼等の宗教と吠陀の宗教とは、全然異なる根拠の上に立てるものであつた。而して一方には昔乍らの特權を有する僧侶階級の專横があり、宗教は全

然過去のものとなれる儀式、全然無意味の形式に墮せる儀式を依然として保持して居た。印度に於ける解脱教の比較的単純なる根本原理は、全部と一部との關係、人間の本質及び其の特質、輪廻の法則等に関する糾紛せる思想の為に蔽はれて居た。而して一方では前にも述べたやうに解脱の信仰と極端な禁欲的傾向とが相結んだ。人々は驚くべき外部的手段、恐るべき苦行によりて解脱を得んと努めた。而して此の努力は既に一個の組織あるものとなり、僧侶階級と相並んで苦行者の階級が出来た。

仏陀及び仏教の改革が印度宗教史上に現はれたのは恰も此時であつた。仏教は上來述べたやうな土台の上に、偉大なる世界教を築き上げた。最初に印度の国境を超えて、遠く四方に及んだ宗教は、婆羅門教に非ずして仏教である。仏陀の成功の秘訣は何處にあるか。そは容易に答へ得る問題ではない。人々は種々な處に之を求めた。或は印度の姓制度を打破せる社会改良家としての仏陀を特に重んじて、其の成功の由来を茲に求める如きは固より誤りである。或は仏陀の特色を其根本的普遍主義に求めるのも、同じく正鵠を得たものでない。仏教の眞面目は仏陀の説法と仏陀の宗教とに求めねばならぬ。而して其成功の秘訣は仏陀の卓絶せる人格の中に求めねばならぬ。仏教は仏陀の人格に集注され體現されて居る。基督教を除く外は、如何なる宗教に於ても、一個の人格が、仏教に於ける如く、爾く永久に偉大なる意義を有して居るものがない。仏陀の偉大なる力は、一部分は此事実の上に存在する。

瞿曇仏陀は紀元前六世紀の中葉に、ペナレスを東北に距る百三十哩、小なれども國は豊かなりし迦比羅城主の王子として生れた。されば仏陀は婆羅門族に非ずして刹帝利族の出であつた。二十九歳の時解脱涅槃の道を求める志を立て、妻子国土を棄てて修行の途に上つた。長い間の彷徨と、空しき努力との後に、仏陀は終に無上正覺を得た。而して此時以来彼は全世界の濟度者たるの使命を自覺した。彼の最初の説法は、婆羅奈斯即ち今のペナレスの鹿野苑に於て、始め彼の出家に伴つた五人の従者に向つて試みられた。而して此地に於て暫くの間に六十有余の弟子を得た。

於是彼は其弟子等を乞食遊行の僧團に組織した。鹿野苑の説法を訖へた後、仏陀は摩揭陀國に至りて法を説き、國王
類毘沙羅^{ビシラ}の帰依を受けた。而して王は仏陀のために國都王舍城の郊外なる竹林に精舎を建立して雨安居の用に供した。かくの如くにして仏陀の声名と其の教化とは益々拡まつて行つた。此後の仏陀の生活に於ては、遊行・説法・乞
盒の三事が規則正しく繰返された。毎年雨期になれば、親密なる人格的交通をなすために總ての弟子を召び集めた。
かくて仏陀は八十歳の時、諸弟子に囲まれ乍ら入滅した。而して其後佛教教團は東洋の全土に弘まつた。

「佛教に於ては教祖の人格が極めて偉大なる位置を占めて居る。佛教文学の大部分は、豊富なる想像と伝説とによりて潤色された仏陀一代の事蹟を記せる物語である。佛教聖書は仏陀の教訓に充ちて居る。而して其中の或ものは仏陀の言葉を忠実に吾等に伝へて居る。伝説の雲霧を通して仏陀の人格は吾等の前に鮮かなる姿を現はして居る。多くの極めて小さな出来事の場合にでも、佛教が如何に偉大なる人格的印象を其弟子等に与へたかを知る事が出来る。一人の仏弟子が語る次の話は其の好例である。『吾は名もなき家の子で貧しく躾しきつた。吾がつとめは萎んだ花を除く躾しき仕事で、人の為に軽蔑され擯斥されて居た。然るに一日諸弟子を伴ひて仏陀が摩揭陀の大都に入り来るに会つた。吾は直ちに仕事を棄てて仏陀に進み寄り、恭しく其前に礼拝し、大地に身を投じて人天の師主なる仏陀に吾を比比丘の中に加へ給はんことを嘆願した。其時大悲の師主は、来れ比丘よと宣うた。吾はかくの如くにして仏弟子となつた』。

されど本来の仏教に於ては、仏陀の人格は尚未だ一定の制約を脱して居らぬ（後代仏教に於ける仏陀の神格化は暫く之を措く）。仏教の特色たる解脱の理想は、個々の信者をして其の師主の人格より離れしめるものである。無上安穩を求め、又は已に之を得た比丘等は、師主の人格及び師主との交通をも断絶するのである。仏陀は人は自ら己れの救主たるべきを教へた。入滅の際に彼が阿難陀^{アーナンダ}に向つて教へた下の言葉は、此事に關する仏陀の見解を最もよく現はしたものである。

て居る。

汝或は思惟せん、今や道トコトコは其師を失ひ、汝等には師主なきに至ると。然れども阿難かくの如く思惟する勿れ。我が入滅の後に在りては、我が汝等に教へ且つ伝へたる教義と制度とは即ち汝等が師主なり。

されど仏教が世界に弘まれる所以は偏へに仏陀の人格にのみ求めることが出来ぬ。或程度までは仏教弘布の原因をなして居る。仏陀の教義は多くの他の場合に於けるが如く、其の単純化と云ふ点に於て異彩を放つて居る。混沌を極めた現象の中から、僅少の簡潔な文章で言表はされたる『単純化せられたる全体』が仏陀によりて作り上げられた。

仏陀は第一着に一切の風習や宗教上の伝承を度外視した。仏陀及び仏弟子には、古来の国民的聖典なりし吠陀の權威も吠陀の教へる複雑な多神の世界も、最早や無意味のものであつた。而して吠陀を棄てると共に、吠陀を根柢とせる煩瑣な神学組織の全体を棄て、吠陀に附け加へられた色々の註釈やら説明やらをも棄てて了つた。而して之と同時に吠陀に基ける一切の供養礼拝、並に僧侶とその特權も廃せられた。加之仏教徒の間だけには、印度人の四姓制度も無くなつた。

而も仏陀の改革は此處に止まらなかつた。仏陀は印度宗教の最後の特色なる二傾向、即ち学者的の思索及び極端なる苦行に対し何等の価値をも認めなかつた。此点に於て仏陀の得道に關する物語は殊に吾等に教へる所が多い。伝ふる所によれば、仏陀が妻子を捨て家を出でて修行求道の途に上るや、先づ婆羅門の二人の学者に就て其教を聴いたが、幾くもなくして少しも此等の学者より得る所がない事を知り、直ちに彼等の許を辞した。於是仏陀は五人の徒者と共に最も厳格な苦行をなしたが、苦行も亦解脱の道に非ざるを看破した。かくて久しき苦行に疲れ果てて將に絶えなんとせし一縷の命を辛くも繋ぎ止めた仏陀は、今や其愚を知りて苦行を棄てた。五人の徒者は之を以て仏陀が聖道を棄てて安逸に墮せるものとなし、仏陀の許を去りて西方婆羅奈斯即ちベナレスの地に赴いた。而して仏陀は独り其

往く可き途を進んだのであつた。

彼は哲学的思索にも、将又極端な難行苦行にも、自己の立場を見出すことが出来なかつた。彼は実地の宗教的知見及び其の知見に相應せる行為を以て立脚地とした。

爾來仏陀は單なる個々の知識が總て不確実であり、不完全であり、淺薄であることを飽くまでも力説した。彼は比喩によりて此事を弟子に理解せしめんとした。彼は森の中で四五片の木の葉を取り上げて、彼が弟子等に伝へた知識は、之を吾が有する總ての知識に比ぶれば、恰も此の数片の葉と森の全体との如きものであると教へた。而して仏陀は語を次で下の如く言つた。

何を以ての故に我は汝等に知識を教へざるか。比丘衆よ、知識は汝等の為に何者をも齎す事なし。そは汝等をして聖道に到達せしむる事なく、世間を出離せしむる事なく、苦樂を捨離せしむる事なく、無常を厭離せしむる事なく、安穩にも証悟にも知見にも涅槃にも導く事なし。是を以ての故に我は汝等に知識を教ふる事なし。

仏陀はただ人間に益ある事、直接に實際上のインテレストと交渉ある事、即ち苦及び苦の解脱だけを弟子等に教へんとした。總て此以外の事は淺薄であり有害である。世界の根源たる最後の統一は何ぞ、完全に向ひて進みつつある存在の究竟は如何、その個別的存在に対する關係は如何と云ふやうな問題、換言すれば神、人の本質、精神の實体、死後に於ける個我の存続に關する問題、無上安穩即ち涅槃に關する多少積極的な、又は全然消極的な概念、總て此等は仏陀の所謂閑問題であつた。

此点に於て仏陀は完全なる懷疑論者と云ひ得る。彼は同時に然りとも否とも答へて、明かに両方を可能なりとして居る。固より彼は二三の重大なる問題に就て當代の神學と鬪つて居た。而して其時は最早單純な懷疑論者ではなかつた。されど彼の懷疑論は彼を導いて絶對的否定に至らしめた。かくて彼は飽くまでも究竟實在の統一と實體性とを否

定した。従て仏陀の宗教は神観を有せざる宗教である。彼はまた一貫せる精神の存在をも否定した。彼に従へば自我は一の共通なる仕事の為に或る機会によりて結び付いた種々な事情と活動との集合体に過ぎぬ。

仏陀の思想が朴素的であり且つ不徹底であつたことは、彼が輪廻説と業因業果説とを取容れた事によりて知られる。即ち仏陀は實に再生の教義のみならず、個人の存在は前生の業によりて其運命が定まるとして云ふ信仰をも取容されたのである。後代の佛教哲学が如何にして此許すべからざる矛盾を除き去らうとしたか、又は若しも精神が何等の実質的統一なしとすれば、如何にして前行の個人的存在が後來の存在に影響するか、約言すれば存在せざる精神が如何にして輪廻するかと云ふ問題を解釈せんとしたかを述べるのは吾等の当面の仕事でない。吾等はただ仏陀の特色を明かにする為に、是等の事實を知つて置けばよいのである。思素は彼が十分に力を用ひた領分でない。彼は出来得る限り之を避けた。されど彼は全く思素を度外視する訳に行かなかつた。かくて不幸にも彼の宗教は深刻なる人格的宗教経験と未熟なる哲学的思素との集合体となり了つた。

乍併吾等は仏陀の眞の領分、即ち佛教本来の実行的方面を探らねばならぬ。此方面に於ては極めて純一な、着実な而して理解し易い多くの教訓がある。婆羅奈斯の鹿野苑に於ける最初の説法に於ても、仏陀は比類なき純一と直裁とを以て其教義を宣べた。彼は此時に四聖諦を説いた。其第一は下の如くである。

比丘等よ、こは苦の真理なり。生も苦、老も苦、病も苦、死も苦、愛せざる者と会ふも苦、愛する者と別れるも苦、求むる所を得ざるも苦、約するに五つの積集（五蘊）は苦なり。

仏陀の説教は凡そ生くる事は苦痛なりとの大なる悲しき歌を以て始まつて居る。彼は人生の此の一面にのみ其目を注ぎ、而して人生の此の一面のみを知つて居た。彼は總ての印度人と同じく将来を知らず過去を知らず、奮闘の間に開拓せられ行く向上を知らなかつた。苦痛は忍耐を生み、ヒロイズムを呼び起す事、又は苦痛は勝利及び高貴なる生

涯を意味する事は、仏陀の閻知せざる所であつた。仏陀の発心は老人に会ひ、病者に会ひ、屍体に会ひ、而して聖者に会つたのが直接の動機であつたと伝へられて居る。『生は苦なり、老は苦なり』。而も人生は苦痛なりとする仏陀の此根本的思想が殆ど倫理的色彩を帯びて居らぬ事は注目に値する。欲求と能力との間に起る衝突、高尚なる欲求と官能との争闘、道徳的理想的理想の墮落、總て事實は仏陀の思想の境外に取残されて居る。仏陀は單に人間の自然的生活のみを觀察して、此の生活は苦痛であると教へるのである。仏陀も仏弟子も此の単純なる原理を宣伝するに当たりて驚くべき天才を示して居る。人生の苦を歌へる歌は、仏教に於ては読む者の心を奪ひ去り魅し去る驚くべき美しさを以て歌はれて居る。

睡れる村の水に遭ふ如ごと
花つむ人を死の神は
心もそらにまよはしの
摘みく_テ尚あかぬ間に
空に上るも海に沈むも
いづちに行も死を脱るべき
樂しみは憂のもと
樂しみを求める人に

心もそらにまよはしの
やがて伴ひ行くと知らずや。
花つむ人を死の神は
やがて伴ひ行くぞかし。
山の岩ほの間に潛むも
思は此世にあらずとぞ知る。
樂しみは畏れのもと
憂なく畏れもなし。

仏陀は世界を此の多苦より救はむとするのである。鹿野苑の初転法輪に於て彼は「比丘等に聽くべし、我既に生死

を解脱せり』と述べて居る。解脱の道を知るためには、苦の如何にして生ずるかを知らねばならぬ。四聖諦の第二は下の如く教へて居る。

比丘等よ、こは苦の集の真理なり。転生の因となり、歡樂と貪欲とを伴ひ、彼此と歡樂とを生ずる渴愛、即ち愛欲の渴愛、更生の渴愛これなり。

吾等が既に知れる如く仏教は苦痛の原因に就て極めて簡単なる答を与へて居る。苦の原因是存在の欲望、即個人的存在的欲望である。此の存在の欲望は、啻に此生をして苦に陥らしむるのみならず、また後世輪廻の原因ともなり、永久に此の多苦の生に個人を繫縛して居る。仏教の此の第二聖諦は、先に其の由来及び範囲に就いて述べた印度の輪廻思想と、如何に密接に關係して居るかは一目して瞭然である。

第三及び第四聖諦は極めて簡単である。若し存在の欲望が一切苦の根源であるならば、苦を滅する道は唯だ一つあるのみである。それで第三聖諦は下の如く説く。

比丘等よ、こは苦の滅の真理なり。その滅とは此渴愛を残りもなく去り、貪欲を滅する事にして、即ち捨心・厭離・解脱・無着これなり。

而して第四聖諦は如何にして滅を得べきかに就て下の如く答へる。

比丘等よ、こは滅の諦の真理なり。その道とは八聖道、即ち正信、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定これなり。

詞藻の豊富なるにも拘はらず苦を滅する道を説く此の叙述には、仏教の最も特色ある点が描き出されて居らぬ。その特色とは、それが純然たる内面的・精神的手段であつて、供養なく儀式なく祭事なく難行なく苦行もない事である。徹底せる知見、及び之に相應する実行、ただこれのみが人々をして究竟の目的に至らしめる道である。

然らばその究竟目的は何か。そは仏教徒の所謂涅槃である。永遠にして無上なる安穏である。生を求める欲求を断すれば、輪廻の因をなす業力も亦滅ぼされる。生を断ずるものは其の死後に於て、否生前に於て已に安穏を得る。さらば死後の涅槃を積極的の祝福として考ふべきか、又は消極的に一切の生命の断滅と考ふべきか。仏陀は此の問題に對して確答を与へる事を避けて居る。そは仏陀の目よりすれば穿鑿の必要なきものであつた。鬼に角仏教徒は涅槃の信仰によりて喜ばしき確信に充ちた自由な氣分を得て居る。

我を悪む人を悪ます	惡みなき世を我は送らむ
皆人の惡み惡まるる中に	いとも心安きかな惡みなき人。
世の人は皆惱めども	惱みの外に我は遊ばむ
皆人の惱むが中に	いとも心安きかな惱みなき人。
財 ^{たから} こそ身に有たねども	清く安けく我は住みてむ
うれしみに身をば養ふ	光音天の跡を学びて。
独りつつしみ内悶えなき	そのうれしみを汲みて知りなば
畏れに焼けず罪に沈ます	甘露の法を深く味ふ。

仏教の全面目が此等の短かき章句の間に躍如として居る。されば吾等は更に一步を進めて第四聖諦の教へる正しき行為、生活に就て研究せねばならぬ。出家修行の生活は仏教の信仰より来る論理的結果である。仏陀の熱心なる帰依者は出家僧となつた。彼は両親を棄て、妻子を棄て、一切の財産を捨てた。彼は仏陀とその教法とその僧團、即ち仏

法僧の三宝に帰依し、其の表徴として袈裟を纏ひ、鉢を携へ、樹下石上を宿として、処定めず遊行し乞食して歩く。

これが仏教徒の眞の生活である。三ヶ月に亘る雨期には、一切の俗事を振捨て、親密な道交と、敬虔な思索とを昧ふために、總ての比丘等は精舎に集まつて来る。かくの如くにして僧侶の生活は、修行・仏説の読誦・遊行の外、何事ともなさぬ單調な者であつた。而して此等の一定せる僧侶と相並んで、出家せざる、又は出家するを得ざりし信男信女は、在家信者教団のやうなものを形成して居た。彼等は尚世間を出離しないけれど、根本の五戒を守り、仏及び仏弟子の教訓を奉じて、出家僧と同様に淨意達徳の実を擧げんとして居た。されど仏教の眞の敬虔なる信者は、ただ出家僧のみであつた。而して此事は非常の注意を要する。出家僧のみが無上安穩の涅槃を成するのである。在家の信者は単に正しき道を幾何か進み得るにすぎぬ。而して来世には出家して涅槃を得ん事を望み得るにすぎぬ。

若し道徳的の力と云ふ概念を、広い意味に解釈すれば、仏教の独特なる道徳力は、此の僧侶と其の熱心なる伝道の精神とに存して居る。仏陀が無上菩提を成じて、將に其の偉業を始めんとするに当たり、仮令涅槃を得ても直ちに世を遁れて世間に其教を宣伝せしめまいとする悪魔の誘惑に会つたが、仏陀は堂々と之を征服したと云ふ説話は、吾等が之から述べんとする仏教倫理の特色を最もよく表白して居る。抑え難き衆生済度の慈悲心が、仏陀をして自家一身の安穏を庶幾する心を克服せしめ、新しき眞理を宣伝する使命に伴ふ一切の艱難と困苦とを怖れて躊躇する事なからしめた。仏陀をして起たしめたのは、世間の多苦に対する強烈なる慈悲心であつた。而して此の慈悲心が一切の仏教倫理の根基をなして居る。婆羅門教の僧侶に於けると全然反対に、仏陀は其の教団に飽くまで此の思想を吹込んだ。婆羅門教の僧侶及び医者等は、ただ自己及び自己の属する僧侶階級のみが幸福ならむ事を求めて居た。学者は自家の思索に耽り、苦行者は自家の功德を積み、一般の衆生の事は少しも念頭に置かなかつた。然るに仏陀の帰依者は四姓制度を無視し、国民国境を超えて普く自ら得たる宗教的生命を弘めて行つた。解脱を獲得せる歎呼の声を挙げ乍ら、彼

は広く世界を遊行した。かくて仏教は世界伝道を始めた。西の方は遙かにギリシャの国までも仏教が入り込んだ。而して東北に於ては、西藏、支那、日本、後印度其他に及んで、深く法本を植え付けた。仏教は今尚ほ偉大なる一世界教となつて居る。

仏教の道德力は此處に存して居る。世間に處する道を教へた実際的教訓も、多くの点に於て、道徳に対する該博な且つ自由な理解を有して居た事を示すけれども、前者の如く貴くはない。仏教興隆後の一世紀間に、印度人の生活は全体として新たなる元氣を得た事は事実である。当時の印度人は再び歴史ある生活を営んで居た。然れども果して仏教が其原因であり根本であるか、寧ろ仏教が此の新氣運によりて生み出された一現象でないかと云ふ事は、疑問であるし、又は當時印度の近隣諸国に影響を及ぼし始めて居たギリシャ文明が、如何ほどまで印度にも其の感化を与へたかと云ふ事も明瞭に知られて居ない。乍笄孰れにしても此の新氣運は幾もなくして消え去つて了つた。仏教に於ては世間的活動及び之に關する道徳は末事であり、要するに第二義のものと看做されて居た。仏教の中心なる究竟の目的は出世間に在る。されば仏教は向上の一路を辿りて努力しつつある第一流の人物を、常に世間的活動より遠ざからしめ、示すに解脱安穩の門を以てして之を隠遁せしむる故に、仏教の榮ゆる所では世間的文明及び道徳は一般に停滞して進歩発展の路を失ひ、かくて終にその文明と道徳とを化石せしめ、次第に精神的滅亡に陥れるのである。要するに仏教は前にも述べた如く一の修道僧団で、修道僧団たる所にその特色がある事を忘れてはならぬ。説話の伝ふる如くんば、其長子の誕生に際し仏陀は『これ吾が破るべき新しき且つ強き繫縛の一なり』と叫んで、羅喉羅即ち「煩累」と命名した。

此の一方に偏した解脱教の特質を明らかにする前に、吾等は仏教と相並んで種々なる点に於て類似せる今一つの現

象を研究しよう。そはプラトー及び後期ギリシヤ文明の行はれた世界に於て、プラトーの思想を根柢とする宗教的風潮に就てである。

ペルシヤ戦争時代は啻にギリシヤの国民的覺醒を促がせるのみならず宗教的覺醒をも促がした。ギリシヤ國民は堅く古來の諸神を信じて、世界を統一せんとする強大なペルシヤの侵入を擊退し、能く其の自由と独立とを保つ事が出来た。其後古來の神々は尚崇拜を受けて居たが、今や諸神に対する信仰は新しき色彩を帶び来り、醇化された美はしきものとなつて來た。エスキロスと同時代の悲劇作者等は、殊に深い宗教的情操を有して居た。諸神は遙かに人間を超えるものと/orして來た。人間の驕慢を打破し去る。『ツォイスよ、汝を讃むる讚誦の中に万人の平和あり』。乍併一方では此時代以後古來のギリシヤ文明の中に、次第に不純な要素が加はつて行つた。ギリシヤ文明は種々な國民の文明と接觸した。ペルシヤ戦争が起つてゐる間に、アテネでは民主的思想が勝利を得た。アテネは領土を根柢とする軍と貴族との国ではなくなつて、海上を支配し世界の商權を握る第一流の海軍国兼商業国となつた。こは固より進歩には相違ない。乍併この新興の世界文明は、一切の習慣や伝承を打破し、宗教上の風俗伝説をさへも躊躇して了つた。各地を遊歴して知識を伝へつた哲學者や、世界の各地を旅行して來た人々は、従来共同生活の動かすべからざる根柢と思はれて居たものが、總て偶然に得られたもの、人間の勝手な意志や習慣によりて作られたものに過ぎぬと主張し始めた。エスキロス、ソフォクレス、及びオイリビデスの戯曲を比較してみれば、古來の宗教が一步々々其力を失つて居つた道筋を明かに迫る事が出来る。已にして榮華を極めたペリクレス時代は去つてアテネの国威一朝にして地に墮ちた。第二流の小人等が次第に共同生活を左右する勢力となり、アテネはその偉大なる姿と元氣とを失つた。有為の材は活動の舞台が次第に狭められて行つた為に、最早其力を振ふ事が出来なくなつた。そは實に退嬰の時代・停徊の時代、懷疑の時代であつた。共同生活の根柢は已に動搖し始めたのに、代るべき新しきものは未だ現はれぬ。大多数

の民衆及び教養ある少數の人士は、尚古來の神々を崇めて居たが、其心の底では最早以前の如き信仰を抱いてゐる人
がなかつた。

かくの如くにして第一等の人物は公共的生活から退いて了つた。彼等は已に亡び去れる美しき世界の残址に拠りて
これから新しき而して更に善き世界を創造せんと希望して居た。

ソクラテスは人間の社会的生活に確固たる基礎を与へんとした。彼は一般に証明し且つ教訓し得べき理性の原則に基いて社会的生活を復興せんとした。而して其の弟子プラトーは、前にも述べたやうに、ギリシャの宗教改革者と云ふべき人であつた。彼の趣味は極めて広汎で多面であつた。従つて宗教は彼の唯一の関心事ではなかつた。乍併彼は尚宗教を以て自家が築き上げた精神的殿堂の要石^{かなめいし}とし冠頂とした。

吾等は暫くプラトーを中心とする此の一群の生活及び其の思想を研究しよう。此等の人々は始めはソクラテスを中心とし、後にはプラトーを中心とせる真摯なる小团体で、群衆の公共生活とは極めて反対な生活を送つて居た。而して其の反対は時と共に甚しくなつた。彼等は種々なる束縛あり約束ある極めて狭隘な世界に出でて公共生活を営む事が出来なくなつて來た、而して退いて私の生活に入った。彼等は彼等を囲める世間及び其一切の制度を無視し（固より理論の上のみであつた）大胆な熱烈な観念論によりて自らの理想国を築き上げた。

プラトーの世界觀は此点に於て最も明瞭に現はれて居る。こは最も深刻な厭世觀であり、且つ感覺によりて知られる経験の世界に対する徹底した否定である。そは感覺の経験に入り来る全世界を以て、必然的に不完全であり且つ低価値であるとする絶対的確信を表はして居る。然らば此の経験の世界を測る標準となるべき善なる世界は何處に在るか。プラトー及び其の学徒は下の如く答へる。

そは此處にあり、賢者の思想の中に在り。放恣氣隨にして空想的なる思想の中にはらずして、合法的にして合理

的なる思想、即ちイデアに於ける思想の中にある。眞実にして唯一なる世界は、肉眼の見得る所に非ずして、ただ心の眼のみ之を見る。賢者的心は如是の世界を忠実に映し出す淨玻璃鏡なり。

此のイデアの世界に属するもののみが眞の至高なる存在である。感官によりて知覺せらるる経験世界は、十全なるイデアの世界の不完全な影、暗黒と光明との混淆、根本的に不完全なる物質の姿をとれる純一なるイデアの仮現に過ぎぬ。

プラトニーの此の哲学的思想は同時に彼の宗教的信仰であつた。賢者がイデアの世界に登高する事は、其の至深の性質より云へば一の宗教的行為である。賢者をして実体界を看取せしむる其の思想は、同時に宗教的のインスピレーションである。當時弘く行はれしオルフォイスの醇化せられた失神的信仰に心を惹かれて居たプラトニーは、上の如き賢者の精神状態を神々しき狂心、神聖なる狂熱と呼んだ。賢者をして更に高く更に美はしき世界を愉悦せしめるのは天上を思慕することである。地上の愛の美しき兄弟なる天上の愛である。かくの如き力のみが、能く光耀のイデアの世界に翱翔すべき翼を人間の理性に与へる。而して此イデアの世界は神々の世界である、神格の世界である、至高のイデアは円満完全なる神的実在のイデアである。

下界の桎梏に繫縛せられたる地上の人間が、如何にして此の存在を超脱し、遙に天上の世界に登高する事が出来るやうになるか。人間の本質は二重、否三重若しくは四重になつて居る。人間は精神と肉体とより成り而して精神は更に二つ又は三つの部分より成つて居る。即ち第一は人間の肉体に繫がれて居る内生命で、更に上下の別がある。上なるは氣概で下なるは物欲である。第二は肉体と離れた高等なる靈智の生命、即ち純一なる直観的理性である。人間は此の至高至深の本質、精神なる理性を与へられて、天上の眞実なるイデアの世界から來たものである。彼は暗黒な感覺の世界に墮在して居るのである。そは人間自身の罪か、又は其以上の必要に出でたかに就ては、種々議論が

ある。乍併兎に角人間は現に此地上に住んで居るが、そは恰も獄屋に繋がれて居るやうなものである。人間は半ば夢みつつ半ば醒めつつ、暗黒な洞穴の中で、何処の隙間よりか僅かに洩れくる薄明りに照らして不可思議な巨大な幻の姿が動きまわるを見て居る。これが人生である。

一切を忘れしむるレーテの水を飲んで、全く天上の故郷を忘却した人間が、次第に忘れたるを思出して來た。一切の学問は想起である。人間は想起せる故郷に對して聖なる憧憬のこころを抱く。されど幽囚の間は痛ましく長く、現世の繫縛はいとも強い。而して此処でプラトーは仏教に於けると同じく、オルフォイス崇拜に行はれたる民間信仰、即ち輪廻転生の思想を採用して重大なる意義を之に与へた。一度び天界より墮ち来りて輪廻を始めた靈魂は、或は下に或は上に、痛ましき彷徨を続けねばならぬ。されば過去世の業は現世に、現世の業は未来世の運命を決するものである。そは印度の宗教に於ける如く爾く明瞭ではないけれど、死後應報の觀念と堅く相結んで、此処にも亦仏教同様の思想がある事は事實である。

併し乍らこの永遠の鉄鎖に繫縛されて居る痛ましき輪廻転生を解脱する登高の一途がある。賢者は能く此の一路を発見する。賢者が此の感覺の世界を出離して、再び之を至深の自我に近づかしめず、内なる心の眼を常に永遠なるイデアの世界に注ぎ、かくて次第に自己の高貴なる合理的生命を長養して往けば、已に現世に於て或程度まで感覺の繫縛を脱し得たものである。而して死んで後は、解放された彼の靈魂が次第々々に高き世界へと登り行き、最後に輪廻の鉄則を破つて、永遠なる光耀の故郷に帰りつく。

吾等は能ふだけ簡単に仏教及びプラトー教の梗概を説き終つた。今や吾等は此等の極端なる解脱教に共通なる特点を容易に発見する事が出来る。吾等は項を分ちて次に之を述べよう。

第一。宗教に於ては自然の制約を受くる経験的日常生活と相対して、根本的に之と相異せる更に高き生活があると云ふ意識は、解脱宗教に於て極めて明瞭になつた。而して此高き生活を信じ、之に到達せんとする真摯な努力が起つて来た。国民宗教では未だ此感じが現はれて居らぬ。ユダヤ教もペルシャ教も回教も、予言者時代の崇高なる努力とは反対に、高尚なる精神が物質的制約を受けるやうになつた事實を示して居る。然るに解脱宗教に於ては、人間を囲める一切の外界の事物が、全く拒否せられ且つ消失して了つた。一切の外面的手段、一切の外部の支柱は最早何等の価値をも有せぬやうになつた。宗教は醇乎たる精神的のもの、内面的のものとなり、一如にして且つ十全なるものとなつた。かくの如くにしてそは国民的束縛を脱却し、之を超越するに至つた。プラトーネ教も仏教も其の本質上、等しく世界的である。

第二。乍併仏教及びプラトーネ教の教へる高き生活は、極端な而して偏狭な形式のものである。仏教の至高善は涅槃即ち人生の絶対的否定で、その究竟の目的は生の断滅に在る。プラトーネ教でも同じく一切の経験世界を否定し、殊に此の現實界と交渉ある活動、此の現實界に於ける活動を否定する。而して單に知的要素のみを人生に於ける唯一の価値あるものとして居る。其の究竟の目的は、外物に煩はされぬ理性の生活、徹底せる直観的生活、純乎たるイデアの生活にある。仏教に於ては出家遁世の僧侶、プラトーネ教に於ては日常の生活を離れたる哲学者が人生の理想である。

第三。かくの如く全然又は半ば人生を否定し去つた為に、激刺たる神の觀念も亦消え去つた。人間の「吾」が消滅し、または微かになると共に、「汝」と呼びかける神も姿を隠した。プラトーネ教に在りては神は最も抽象的な且つ冷静な觀念であり、婆羅門教に於ては必然的に多苦なる個別的存在と対立する普遍的無差別的実在であり、仏教に在りては神の觀念を全く放棄して了つた。信仰の主体と共に其の客体も亦消え去つた。

第四。その自然の結果として両宗教では特殊の道徳的方面が著しく退歩した。仏教の多苦説は、全然人生を自然的

に観察した結果で、道徳的欠点及び不完全と云ふ觀念、罪の悩み、又は罪悪を脱却せんとの欲求の如きは、其の閑知せぬ所なりし事は已に述べた。プラトー教に於ても人間の衷に存在する至高なる者、永遠に価値ある者は、善を求むる意志に非ずして、イデアを直觀する理性である。人間を繫縛して其完全を妨ぐるものは、道徳的惡に非ずして、物質的世界である。固より此等の二大宗教に於て、道徳的要素が高き階段に達しなかつたとは云はれぬ。ただ仏教に於てもプラトー教に於ても、道徳と宗教との内面的統一を欠いて居た。宗教が人間に与へ又は与へんとする至高のもの、独特のものは、善惡を超越せる彼岸に在る。

第五。極端なる解脱教が人生と道徳的行為とに対する態度と相結んで、此等宗教と其の宗教の行はれる周囲の生活との間に特別な一種の關係を生じた。仏教は全く相異なれる多数の国民を征服し、且つ現に今日も征服して居る。されど到る處で仏教は単に全然外面向に国民生活と混一して居るに過ぎぬ。そは油が常に水の表面に浮んで居ると同様な現象を呈して居る。些々たる変化を度外視すれば、到る處で懶き單調の姿を取つて居る。仏教は其の入込んだ国民の風俗・習慣・道徳・甚だしきは其の信仰をさへも何等の妨害を加へず、且つ聊も之を醇化する事をせずに、自教と並立する事を許した。西藏を除く外は、仏教は孰れの國に於ても其の国民生活に徹底した感化を与へた事がない。而して教養あるギリシャ人の哲學的宗教も、國民の信仰となるべき力を有して居なかつた。そは狹少なる一部の人士の間に限られ且つギリシャ國民の信仰を改革せんとする勇氣をも有して居なかつた。そは民間信仰と微温的な調和を試み、而も實際の生活に於ては、衷心に侮辱して居た風俗習慣、さては信仰の前に膝を屈して了つた。而してこは仏教に於ても同然である。仏教が一國民の宗教となつた時には、概して全然異端の迷信に墮し、就中聖樹崇拜、仏骨崇拜の如き、淺薄な呪物崇拜に類せる遺物崇拜となつた。かくて極度まで精神を重んじた宗教は、却つて其の反対の極端に走つた。人民が貴しとする一切のものを擯斥する運動に始まつて其の威力の前に降服するやうになつ

た。

かくの如く宗教の歴史は予言者の時代より二つの流をとりて、一は律法教となり他は解脱教となつた。前者に於ては道德と宗教とが密接に關聯し、敬虔とは神の意志に従つて云為する事なりの信仰が行はれた。されど道德と宗教との此の親密なる關係は、其間に入込んで來た風俗や法律や儀礼の為に妨げられる。これが為に宗教は再び日常生活と同水平面に引下げられ、物質的・外面的のものに墮落し、其の信仰に於て根本的に更高の生活を發展せしむべき機能を失つて了つた。然るに解脱宗教に於ては、全力を挙げて更高の生活の觀念を高調して居る。されど其唱ふる生活は最も極端なもの、現實の生活と激しき対立をなすものなるが故に、其の宗教に於ては道德的要素が價值を失し、宗教的善は善惡を超越せる彼岸に在るやうになつた。

此二つの流れが相会する所、極端な兩個の宗教形式が相合して其短を棄て其長を取る所、解脱の觀念と道德の要素とが相結ぶ所、其處に宗教の完全な姿が現はれる。吾等は次章に於て基督教が果して此等の前提を満足せしむるや否やを見よう。

第七章 基督教の本質

予言者の時代去りて茲に五百年、人類の宗教的生活は新しき而して高き發展を見るに至つた。而してこは現在に於て到達し得べき至高の發展と云ふを妨げぬ。

此の發展は突如として準備なしに現はれたのではなかつた。地中海の沿岸並に内地の諸國民は、共同の生活を営み始めて居た。歷山大王出づるに及んでギリシヤの文明は遙か東方に弘布された。而して西方の文明が東方に影響し始

めた時は、取も直さず東方の宝庫が西方のために開かれた時であつた。而して東西文明の融合は、極めて豊富なる内容と充実せる生命とを有する、新しき生活を生み出した。ギリシャ語は世界語となりて諸国民結合の絆となり、種々なる外国の分子を混じたるギリシャ文明は、世界を支配し始めるやうになつた。偉大なるローマ帝国は、ギリシャ人の手より此の遺産を受け読みだ。ケーザル、殊にアウグストゥスの偉業は、混沌たる当時の情態に新しき秩序を与へた。而して此結果として一般の文化が非常なる高潮に達した。確固たる社会組織、厳格なる外部の秩序及び調和、新たに開け且つ規則立てる驚くべき世界交通、日に繁昌し来る世界貿易、新たに興りし燐然たる文学藝術及び科学、總て此等の文明の花を以て飾られた世界の中に、基督教が入込んで來たのであつた。而してまたローマの諸地方では、殊にアウグストゥス皇帝を以て、世界の救済者と尊崇して居た時代であつた。

而して此時代には人間の宗教的生活も亦普遍的になりかけて居た。種々なる信仰や理想が、互に融和し始めて居た。今當時の宗教界を見渡せば、第一にギリシャ、ローマ帝国の教養ある人々は、プラトーを根柢とする後期ギリシャの宗教を奉じ、現實界を拒否して理想界を高調し、靈魂の永遠の故郷を歌つて居る。バビロンの宗教はその天体觀測から割出した宿命論と、そのト占術とを以て西方の人心を動かし、半ば化石し去れるエジプト宗教は、その下等なる魔法と、来世を信ずるイシス・オシリス崇拜とを弘め、ペルシャの宗教はミトラ教となりて西方に入込み始めて居た。就中ユダヤ教は、ユダヤ人の發展と共にギリシャ、ローマ帝国内の殆ど總ての大都會に広まり、到る處で有力なる伝道を始めて居た。此等の勢力ある諸宗教は悉く帝国内に行はれて互に相接觸するに至つた。而して其間に此等の宗教の混合より生じた各種の宗教形式も現はれて居た。

此等の宗教は国民的境界を打破した。そは概ね秘密を以て蔽はれたる密儀宗教、又は秘密講社の形式を以て行はれた。其等の宗教団体は、恰も吾等が其の存在を知るも其の詳細を知り難き今日のフリーメースン結社の如きもので

ある。而して其中には隨處に世界的傾向が現はれて居た。人々は聊かも國民的觀念に支配されずに、ただ自己の為に求め、自己の為に努力する。人々はそれが自己を満足せしむる限り、總て来る者を拒む事がない。かくて宗教は個人の關心事となり確信となる。而して來世の應報に対する極端なる個人的信仰が、此等の宗教の中心となり、現世を厭離する思想が之に伴つて居る。解脱の觀念、救世主の信仰が、宗教生活に於て最も重要な役割を勤めるやうになる。凡そ此等の諸傾向が相結べる現象は到る處に現はれて居た。而も國民的多神教的分子は未だ全く絶滅せられず、宗教は依然として風俗や儀式のために束縛されて居た。奇怪な修法、不思議な神事、神秘的な祭礼、極端な修行、呪法、降神術、總て此等は當時広く行はれた宗教生活の特色であつた。

先に当時の諸宗教中最も意義あるものなりしことを述べたユダヤ教、その胎内から基督教が生れ出でたユダヤ教もまたこの宗教進化の大勢に動かされた。褊狭で且つ國民的束縛を受けて居たにも拘はらず、ユダヤ教は此の澎湃たる靈界の新潮に動かされた、而して其間に著しき進歩を遂げた。世界教たらんとする傾向、國民及び國民的儀礼より宗教を解放せんとする運動、個人主義の高調、死後審判の思想、現實界に対する厭世的態度、惡魔の信仰より来る二元論的傾向、總て此等のものは特に鮮かにユダヤ教の中に現はれて居た。されど此處でも亦此等の諸傾向は充分に發展を遂げる事が出来なかつた。ユダヤ教は今や世界の各地に廣まり、世界伝道を始めかけて居たにも拘はらず、其の宗教は尚ほユダヤ國民を離れる事が出来なかつた。そは次第に國民的桎梏を脱したが、其代りに更に煩瑣な儀式と法律的規則との為に束縛されるやうになつた。そは將に個人の信仰、人格的確信たらんとして、再び律法の文句に対する盲従に堕して了つた。個人的審判の思想は覺醒された。されど狂熱的なる國民的希望が之に伴つて居た。聖書の編纂儀式を離れた精神的礼拝、一定の祈禱制度等の如き新しき宗教生活の形式が興つた。されど之と同時に信仰界に於ける學問の跋扈、至深なる宗教的生活に於ける文字及び外面的事物の跋扈を見るに至つた。

耶穌及び彼の説教は如是の世界に現はれたのであつた。されど此新しき現象が、過去に對する關係を定める事は容易でない。總て福音の中に存するものは已にユダヤ人の過去の宗教史上に存在し、又は出現の準備が出来て居たものである。ユダヤ人の学者は常に誇り顔に基督の福音がユダヤ教より藉り来れるものなる事を證明して居る。基督の言へる所は、ユダヤのラビ即ち学者等が既に言つた所であると云ふのは事實である。乍併悲しいかなユダヤの学者等は、耶穌の言つた以外に余りに多くの事を語り過ぎて居る。凡そ高等なる宗教の眞面目は、単純と云ふ点に於て最も著しく發揮される。クラシカルなものは単純である。而して単純化と云ふ事は同時に過去の重荷を除き去る事を意味して居る。吾等は先づこの点について考へよう。

耶穌は第一に宗教を国民的束縛より解放した。ユダヤ教には繫縛があり、基督教には解放がある。一見すれば此の主張は言ひ過ぎのやうにも思はれよう。耶穌の生涯も其の事業も、共に国民と離るべからざるものゝやうに見える。彼は自分がイスラエルの迷へる羊の為にのみ遣はされたものであるからと云つて、カナン人の女の病氣を癒す事を拒みさへした。耶穌の直弟子は異邦人に伝道する事を拒んだ。異邦人の伝道は使徒ポーロのやるべき事業であつた。されど之にも拘はらず福音の中には已に国民的束縛が解放されて居る。尤もそは内面的のものであつた。耶穌は飽迄も忠実なるユダヤの子であつたが、彼の其信仰は単純なる国民的利害の羈絆を脱する事が出来た。こは耶穌の説教の根本概念なる神の國の思想を研究すれば最も明瞭に理解する事が出来る。彼と同時代のユダヤ人は如何なる意味に於て神の國を翫望して居たか。そは第一にイスラエルの民が勝利を得て世界を統一する時代、憎むべきローマ帝国を蹂躪し得る時代、ダビデの王統がパレスチナ、エルサレムより全世界を支配する時代、異邦人は朝貢し、イスラエルの囚人は帰還し、エルサレムが華々しく建立される時代、従つて神は地上に在りて其民を治め、信者等と共に住み給ふ時

代、かくの如き時代の出現を待ち望んで居たのである。然らば耶穌の説教に於ては神の國の意味が如何になつて居るか。そは非常に靈化せられ、且つ極めて明瞭な信仰となつて居る。耶穌の期待せる國は、眞實に神の支配し給ふ國、即ち神の意志が天に於けるが如く地に於ても成就せられ、信仰篤き者は神を見、其の慈悲に浴し、神人帰一の永遠なる歡喜を味ひ得る状態を云ふのであつた。而して總て自余のユダヤの國民的希望は其姿を隠して了つた。かくの如くにして耶穌は内面的に未來に對する信仰を解放し、而してこの信仰と共に國民的思想の束縛より信仰を解放した。

其後五十年にしてポーロは宗教を外面的にも國民的羈絆より脱せしめた。『此處にはユダヤ人もなくギリシヤ人もなく、奴隸もなくまた自由民もなし』との歎呼の声を世界に於て始めて挙げたのはポーロであつた。されどポーロの世界伝道は決して絶対的に新しいものでない。そは有機的發展、換言すれば既に耶穌の説教に含まれて居たものを外部に發表したに過ぎなかつた。而してポーロ以来基督教の世界的宗教たる特質は、聊かも害はれずに今日に及んで居る。

今や國民の代りに個人が宗教生活の主体となつた。ユダヤ教は種々なる点に於て個人的要素を混じて居るに拘はず、飽くまでも國民的宗教であつた。基督の福音は醇乎たる個人主義を高誇して居る。デンマークの偉大なる思想家キールケガルトは、多少誇張の氣味があるけれど、曾て基督の福音を以て『個人の範疇』に於て考へて居るものと評した。党派を離れ『善き社会』を離れて、耶穌は虐げられて居るもの、擯斥されて居るもの、孤独なるもの、罪を犯せるもの、又は万人に憎まれたる税吏等の間に教を説いた。彼はパリサイの人や学者たちに向つて、一人の罪ある人悔改めなば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりば、天に於て喜びあらむと告げた。耶穌は審判は個人に向つて下さるべきものなるを説いて、肉をも靈をも地獄に投げ入れ給ふ力ある神の面前に個人を立たしめた。彼は各人の運命は各人の手中にある事を説き、個人の生命は、全世界の総ての財寶よりも更に貴き事を教へた。到る所福音の中には

個人の解放が成就されて居る。

耶穌がやり遂げた第二の偉大なる解放は、宗教をして儀式の羈絆を脱せしめた事である。かく言へば或は驚く人もあらう。耶穌自身が既に吾が来るは律法を廃せんが為に非ずして之を全うせんためなる事、律法の一点一画にも違ふべからざる事を言つて居る。されど今少しく精細に観察すれば耶穌が此点に於ても内面的解放を成就した事を知り得る。彼は固より何等の革命的打撃や形式の破壊を試みなかつた。かくの如きは要するに如何なる儀式を廃して如何なる儀式を採るべきやの問題となる。然るに耶穌及び耶穌の内面的生活に取りては、其等の形式は總て何等の価値もないものであつた。彼は己れの精神並びに弟子等の精神を充たすに、儀式よりも更に高きものを以てした。彼は一切の法律及び之に纏綿せる一切の重荷が、自ら暗黒と過去との裡に葬り去られる日を悠然として待つて居た。但したゞ一つの点に於て彼は堪へ忍ぶ事が出来なかつた。其点に於て彼の帝王の如き戦振りが現はれて居る。若し下等な無意義な事物が人の心を支配して、之が為に高尚なる生活を妨げんとするが如き事ある場合に於て、彼は古の予言者の如く戦つた。彼は愛と慈悲との為には律法を破つて顧みなかつた。両親に孝なる事は犠牲を献ぐるに勝り、人と和ぐは祭事に列なるに勝り、忠実、慈悲、正しき裁判は十分一税に勝るとした。

而して儀式の羈絆を断じ去ると同時に、律法の章句に拘泥する弊風をも一掃した。此点に於ても亦耶穌は忠実なユダヤの子であつた。旧約は彼に取りて聖書であつた。彼は飽くまでも之を尊重し、其の文句を藉り来りて種々な事の証拠として居た。されど内面的には彼は旧約の束縛を脱して居た。彼にとりては宗教は全体であり一如であつて、律法の文句を根拠とする煩瑣な規定の集合ではなかつた。されば若し聖書及伝説が、自己の所信と牴触する場合には、彼は最も大胆なる態度で議論して居る。パリサイの人が彼を試みんとて、離縁状を与へて妻を出せとモーゼが命ぜしは何ぞやと質問せるに対し、モーゼは爾曹の心の不^{れなき}情に因て妻を出す事を容したれど、元始はかくあらざりきと断言

して居る。彼は古の人かく言へり、されど汝等に告ぐと言つて憚らなかつた。彼に在りては何等の『書籍信仰』なく、また過去の規定がない。彼は徹底せる眼光を以て自然と人生との真生命を洞観して得来れる自己の経験を聖書と並び立しめたのである。

之と共に彼はまた信仰を學問より解放した。彼の最も憤慨せる敵は、律法に明るき學者たち、即ち神學者連中であった。彼に取りて信仰とは理論的にも実際的にも、名づけ難きほど簡単なもので、決して学んで後に知り得べきものではなかつた。彼は學者の価値を全く無視して『天地の主なる父よ此事を智者達者に隠して赤子に顯はしたまふを謝す』と言つて居る。而して質朴なる人民が彼の説教によりて得たる印象は下の数語に尽くされて居る。『彼は學者の如くならず、權威を有てる者の如く教へ給へり』。

耶穌によりて始められたる解放運動がボーロによりて完成された事は已に述べた。但しボーロは結論を引出したので、基督は『律法の終』である。彼は『基督我等を釈きて自由を得させ給へり』と云ふ言葉で、よく這般の消息を伝へて居る。此の絶妙なる文句は實に基督教の至深の本質を道破した大明呪だいみょうじゆである。されど吾等もし耶穌の自由とボーロの自由とを比較すれば、耶穌の方が更に自由であるように思はれる。彼は内面的に自由であつた。彼は取除かうともせずに平氣で非常なる重荷を負ひ続けたほど自由であつた。彼は着くが儘に振り落さうともせぬ種々な塵埃の為に、少しも其潔き生命が汚されざりしほど激刺たる自由を有して居た。然るにボーロに在りては種々な桎梏が、彼が之を除き去る前に、已に深く彼の心に喰込んで居た。福音の解放は内より外に進んだ。そは外部より破壊と打撃とを加へたるにあらずして、内部より胚胎し発育し来れる、遲々たれども禁めがたき、確乎たる過程であつた。

かくの如くにして耶穌は解放者である。彼は一切の国民的要求、国民的羈絆儀式、文字及び学者の跋扈より宗教を解放した。

今や純一にして簡明なる福音の至深の意義が自ら現はれて來た。此處には何等の束縛をも受けざる神に対する信仰の力が澎湃として流れて居る。ユダヤ教の神は厳格な、超越的な、恐るべき神で、人は其前に跪いて絶体的に服従せねばならぬものとされて居た。而して此恐るべき壮大なる神は、耶穌の信仰及び其の敬虔の背景となつて居る。彼は自身の生きた経験によりて此恐るべき全能の神を親しく知つて居た。神は彼の生涯に何等の善きものを賜はらなかつた。謎の中の謎とも云ふべきは、耶穌が其の生涯に於て誤解せられ且つ敵視せられ、憂慮に悶えさせられ且つ等閑視せられ、迫害に苦しめられ且つ暗黒なる死の予感に悩まされ、其の弟子の不忠実と謀叛とに苦しめられて居る事である。乍併此處にも『されど我は信ず』と云ふ勝誇れる信仰の闘の声が朗かに響き渡つて居る。この高く天上に在す不可思議の神に対しても『父よ』と呼び継る事を得た。而して其弟子たちには『天に在す我儕の父よ』と禱るやうに教へた。赤子の如く大胆な信頼を以て、彼は總て天上の父の命するがまにまに動いた。彼は天の父が賜はれる謎と苦痛とに充ちたる生涯を喜んで受けて、何人も曾て知らざりし悩みの生涯を送つた。而して最も偉大なる彼の繼承者は、彼に倣つて何者にも怖れざる大胆な宣言をなして居る。『われら患難に欣喜をなせり』。

耶穌の信仰は律法に於ける超越的な、峻酷な、曖昧な神に対する信仰を征服し且つ鮮明にしたと同時に、遙かに極端なる解脱教の信仰を超脱して居る。吾等は之を比較せんために、再び婆羅門教の神に対する信仰を一瞥しよう（仏教は神観を欠くが故に比較する事が出来ぬ）。婆羅門教は精神的生活と人格との尊嚴を自覺する意識を強める事を根柢として居る宗教である。印度人は其の宗教的生活に於てすらも、人間を以て彼を取囲む全世界と根柢に於て一如なる一生物にすぎぬと思つて居た。従つて印度人の神は無差別なる唯一の实在で、その宗教的生活に於ける根本の氣分は、個人的存在の必然的に多苦なるを確信し、此の無差別なる普遍的实在の中に没入せん事を思慕するに在つた。然るに耶穌の説教は、其の性質上言語を以て尽し難きものではあるが、人格の尊嚴と其の個人としての意義に対する最

も深刻なる自覺を根柢として居る。耶穌は自然的生活に対しても遙かに印度人に立勝れる徹底した觀察を下して居るに拘はらず、根柢に於て彼の前にには唯だ人間が在るのみであった。自然即ち低級なる精神界の生活は、彼に取りては要するに趣味の対象であつた。何となれば彼は自然の中に入人生のシムボルと其の法則とを発見し得たからである。但し彼は人生を自然界の存在階段に引き下げたのではなく、比喩によりて自然界を精神界に引き上げたのである。神の信仰も亦之と同様に比喩によりて表されて居る。彼が神を以て不斷に父と呼び、之を人格的の『汝』として、人間の『われ』に対立せしめるのは、要するに一のシムボルに過ぎぬ、一切を抱擁する不可思議なる全能の神の本質を覚束なき片語で呼んで居るに過ぎぬ。たゞ福音の中に鮮かに現はれて居るのは、神の本質は普遍的・無差別的実在に非ざる事、仮令その至深の本体は吾等が理性を超越して居るにしても、之を精神的・人格的の力として会得する時に、最も真理に近づき得る事、神の本質は自然的存在の中に存せずして、此の方向に向つて居ること等である。福音が神を以て創造者・依持者・吾等の高貴なる精神的実在の父と解釈して居るのは、同時に人格的生命の力を其到り得る至高処に達せしめたものである。かくの如くにして福音に現はれたる信仰は、同時に律法教並に解脱教の信仰を超越して居る。

而して最後に耶穌の信仰の中には、従来の高尚な宗教が成就せんとして能はざりし道德と宗教との関係が、驚くべく密接に結合されて居る。耶穌にとりては精神的なる且つ人格的なる神を信ずる実際上の手蔓はたゞ一つしかなかつた。善行即ちこれである。神は善である。神以外に善きものはない。神を求むるものは善に於てしなければならぬ。

一人の女が燃ゆるが如き信仰に駆られて耶穌の前に現はれ、かかる子を有てる母は幸福なりと叫んだ時に彼は下の如く答へた。『されど神の道トマスを聽きて其を守る者の福には若かず』。

耶穌は種々な点に於て道徳と宗教とを結び付けた。就中彼はユダヤ教の熱烈な審判の思想を繼承して下の如く言つ

て居る。『われ懼るべき者を爾曹に告げん、殺したる後に地獄に投入る、權威を有てるものを懼れよ』。彼はこの思想を一切の国民的束縛、宗派又は党派の対立より救ひ出した。耶穌は個人をして赤裸々に且つ単独に神の永遠の審判の前に立たせた。彼はユダヤ教に於て此の思想に纏綿せる法律的・煩瑣的解釈を放棄し去つた。審判は外部に現はれた行為に下されるのではなく動機に向つて下されるのである。善き樹は善き実を結ぶ。彼はまた此の思想を外部的報酬の観念、神を相手の商売取引の観念より解放した。耶穌は極度の単純と動かすべからざる權威とを以て其の弟子等に下の如く教へた。『僕主人の命ぜし事に従へばとて主人彼に謝すべきか、然らずと我は意へり、斯かれば亦爾曹命ぜられし事をみな行したる時も、我儕は僕、なす可き事を行したるなりと云へ』。

而も耶穌は宗教と道徳との結合に向つて更に深き根拠を与へて居る。父なる神に対する信仰は、之によりて人が生の重荷を卸して悩みを取去られる神の難有き賜物たるに止まらずして、人間の最も重大なる義務である。神を父とする事は子たる義務を人に負はす事である。子は天の父が完き如く完くならねばならぬ。これが善き神の望み給ふ所である。天なる父の意思を成就すると云ふ事が、神を父として意識する信仰の精神になつて居る。

一切の儀式や祭事、一切の些々たる律法や議論、一切の不要なるものや外部的のものより解放された道徳は、耶穌の福音の中に於て、一切の繫累を離れたる醇乎たる宗教と最も密接に結合されて居る。

此点に関して或は異論を唱へる人があるかも知れぬ。そは福音の中に現はれたる純然たる超自然的・禁欲的道徳を指摘して、かくの如きは人生及び文化に対して対抗的態度を取るものとするのである。耶穌及び其の弟子等が其の一切の思想と、其の一切の希望を以て、当時の人々の世界とは異なる世界に住んで居た事は事実である。耶穌は第一着に心情の覺醒を促した。地には何の宝をも積む事なく、天に一切の宝を納めよと告げた。家族・職業・國民・都市等に於ける人間の社会的生活の諸形式の価値を定めるやうな事は、福音の殆ど関知せざる問題であつた。耶穌は自己

及び其の弟子等を家族・故郷・日常の仕事等の束縛を脱して、更に高き、更に偉大なる目的の為に活動させた。彼は一切明日の事を思ひ煩ふ勿れと告げた。地上の富は彼より見れば靈魂を賊するものであつた。如何なる場合にもそれは道徳的価値を有せざるものであつた。法律も權威も当然必要のものであつたが、何等の道徳的価値を有せざるものであつた。彼は当時の堕落せる文明と極端に反対の地位に立つた。彼は全く腐敗せる時代に住んで居た。而して其の国民と祖国との為に世間的活動を試みんとの考へは彼の心に存して居なかつたに相違ない。一切の苦心も竟に水泡に帰すべき時勢であつた。簡単に今迄述べた事を再言すれば、耶穌は其の福音に於て現世の価値に對して多くの注意を払はなかつた（但し彼の豊かなる天分は此方面に就てもサグゼッショーンを与へる思想を到る処に洩らしては居る）。彼は人をして其心を永遠なるものに向はしめた。彼の目を以て見れば、一切の世間的のものは、仮令それが最も貴き実であつても、要するに之を以て神の意志を成就せしむべき物質的方便に過ぎなかつた。耶穌の説教の特色と力と偉大とは、取も直さず此の徹底せる而して厳肅な観念に存する。

乍併吾等は更に他の一面をも見なければならぬ。此点に關しては耶穌の福音と、かの極端な解脱教との比較研究が最も吾等に教ふる所が多い。耶穌は未だ曾て仏陀の如く人生其者を禍惡となし、又はプラトーの如く俗事及び日常生活を以て敬虔なる賢者の涉^{たど}つてならぬものとなした事がない。彼は如何なる僧団をも築き上げなかつた。而して此事はエッセネ宗の如き僧団に類せるものが、已にユダヤ教の中に存在して居た時代に於てであるから殊に注意を要する。されど苟くも自分の宗旨以外の人々と身体を触れた時には、清水に浴して之を潔めねばならぬ事を規定して居たエッセネ宗の奇妙な苦行僧と、耶穌及び其弟子等とほど著しき対照をなして居るものはあるまい。耶穌はまた如何なる学派をも始めなかつた。彼は洗礼のヨハネの如く荒野に行く事をもしなかつた。彼の生活は普通の生活で、人間の日常生活の間に交はりて其の仕事をして居た。彼の比喩を見る時には、如何に彼が日常の生活を熟知して居たか、如

何に喜ばしげに之を観て居たかを知る事が出来る。彼は其弟子をして神に向はしめる為に用ゐたと同じ力を注いで、彼等が他人と交はつて此世を送つて行くに必要な道徳的義務を教へて居た。『汝の神と隣人とを己れの如く愛すべし』。かくの如く福音の中には畜に道徳習慣を拒否せざるのみならず、却つて其が直接に宗教的生活と関聯して居る點を闡明し來りて、至高の力と意義とを之に向つて賦与して居る。従つて福音は其の至深の本質を探れば、決して現実の生活と其事業とに反対して居るものでない事を知り得る。

基督教の歴史を一見すれば上述の主張は愈々確実になる。福音は当初に於ては單に一切の道徳的生活の精髄たる、人と人との間の直接の関係だけを認めて居た。而してそれが具体的に實現されて居る色々な生活の形式に対しても無頓着な態度であつた。乍併現世の威力が犇々と基督教に迫つて來た。而して基督教は茲に二つに分れて、一は人類の文明的生活と和睦せる世間的教会となり、他は出世間的僧院制度となつた。然るに其後千五百年にして独逸の宗教改革によりて更に偉大な進歩を見た。そは僧院制度及び世間的勢力を求むる教会を両ながら放擲して、人は世間的活動の間に神に事ふべき事を教へた。基督教は能く此等の変革に堪へる事が出来た。而して宗教改革は決して退歩に非ずして、健全なる發展であつた。かくの如き歴史を辿り来れば、耶穌の倫理は決して禁欲的でもないと云ふ判断を下して差支ないと信する。そは原則として人生並にその事業を承認して居る。何となればそは其中に現はれたる道徳的のものを極力高調するからである。

上に述べただけでは固より福音の全面目を發揮して居らぬ。倫理は福音と云ふ隋円形の一の焦点で、解脱救済の思想の一つの焦点となつて居る。耶穌は單に其弟子の道徳的勇氣と決断力を出来るだけ強大にするに止まらなかつた。彼はたゞ『汝等完くならざる可からず』とのみは叫ばなかつた。彼は之と同時に人間の道徳的能力を考へて『汝等悔改めよ』と教へて居る。彼は道徳的生活の畢竟戦鬪である事を知つて居た。『汝かくせざる可からず』と云ふ神

の声が人間の意識に響き始めると共に、塵もて造られたる人間が、之に対して反抗の声を挙げるために、茲に生死の大葛藤が起る事を知つて居た。彼は人間が此の争闘に囚はれて、永遠に其到るべき目的地に達し兼ねて居る事を知つて居た。

耶穌は此事を熟知して居た為に其弟子に向つて罪を赦す神を教へた。そは單に外部に現はれた行為を監視する事をせず、發しては善行となるべき動機を慕みし、且つ日毎に人間の犯す罪を赦す神であつた。耶穌の福音は此点に於て真に最高調に達して居る。放蕩息子の比喩は此の高調なる信仰を説明したものに外ならぬ。一方には家を出でて淪落と窮乏のどん底に沈める罪の重荷に堪へざる人間が居り、他方には少しの非難も加へず、何等の条件をも要求せず、將又一言の詫をも求める事なしに、迷へる且つ堕落せる其子を赦し給ふ深甚なる神の愛がある。彼は心底から喜んで其子を迎へ、肥えたる犢こぶしを宰さり、舞楽して楽しむのである。『おゝ愛よ愛よ汝は強し』。いとも正しくいとも謹厳な兄が、見て矛盾となし、殆ど不正となしたのは此強烈なる神の愛である。

不可能を可能とする此神の大愛をば、單に比喩を以て説明するに止まらず、耶穌は自身の生命に之を実現して居る。如何に微かでも尚一脈の光さへあれば、如何に淪落した生涯でも其中に求める心と高きを慕ふ念が聊かにも潜んで居りさへすれば、而して最後の絶望の叫びを挙げさへすれば、耶穌は即ち其の余燼をして炎々と燃え立たしめ、沈み行く夕陽を変じて新しき生命の曙光たらしめるのである。耶穌は人々に蔑まれた税吏や罪人の友であつた。

かくの如くにして解脱救済の思想、即ち人若し神を愉悦すれば、旧き生命は消え去つて新しき生命が現はれると云ふ信仰は、基督教の中心となつて居る。律法教に在りては、解脱救済の思想はただ国民の現実界に於ける政治的救済に対する希望としてのみ生命があつた。此点に就て基督教は寧ろ解脱教と近似して居るけれど、其の解脱は決して『生の解脱』でもなく、また『感覚的・経験的現実界の解脱』にも非ずして『罪の解脱』である。父が子に対する如き

親切を以て神が吾等の罪を許すのである。基督教は道徳的解脱教として一切の宗教の上に位して居る。

解脱の思想は彼岸の觀念によりて睛を点ぜられるやうである。解脱は現世よりは更に高き他の生活に於て完全に成就される。其の時に心の清き者は神を見るべく、一切の憂慮と不幸とより解放せられ、一切の道徳的不完全より解脱させられるのである。かくの如き来世に入る前には神の審判を受けねばならぬ。されど耶穌は其弟子に向つて審判を怖れてはならぬと教へた。彼は彼岸を以て現世よりも更に善き更に高き故郷と思ふべき事、而も苟くも之が為に現世の生活を忘れ、又は此世に於て為すべき仕事を怠つてはならぬと教へて居る。

さて總て此等の事は單に教義として福音の中に述べられて居るのではなく、偉大なる力と意義とを有する一人格の姿を取りて現はれて居る。

此点よりして耶穌の面目を想ひ浮ぶれば、彼自身が既に弟子等に対する自己の人格の意義を明かに意識して居たやうに見える。耶穌の自覺が如何なる歴史的形式を取つたかに関する資料は極めて不確実であつて、耶穌が果して其の国民のメシヤたる事を自覺して居たかと云ふやうな問題は現に盛んに論議せられて居るのみならず、仮令此の問題が解決されても、然らば耶穌はどんな風に自分をメシヤと思つて居たかと云ふ次で起り来る問題を解決する事は更に困難である。されど福音を読み来れば、基督が自己の人格に対し驚くべき權威ある自覺を抱いて居た事は、其等の困難と伴つて愈々鮮かに現はれてくる。彼は自分より以前、又は自分と同時にユダヤ国民の間に現はれた總ての人よりも、無限に自分の方が卓絶して居ると感じて居た。彼は自分の衷に、イスラエルの民の心に訴へる神の最後の声が響いて居ると感じ、之に次で偉大なる審判がくると信じて居た。彼は王者の態度を以てモーゼ以来の神聖なる伝説を思ふ程に取扱つて居る。彼は自分を以てヨナ及びソロモンに勝り、予言者とエルサレムの神殿とよりも勝つてゐると思つて居た。而して彼は如何にして其弟子を支配すべきかを知つて居た。彼一度び呼べば声に応じて弟子が之に従つた。

而して彼等をして家を棄て職業を捨て『死者をしてその死者を葬らせた』。彼は上流の人々の反抗ありしにも拘らず進んで罪ある者、蔑まれる者、世に棄てられたる者の中に入った。而して彼がかくの如き事を能くしたのは、一切の誹謗を念頭に置かぬからであつた。彼はまた人間の生理的生命のどん底まで動かす程の精神力を持つて居た。飽くまでも彼に帰依して居る人々に取巻かれて、真剣に其使命を果たして居る場合の如きは、『立ちて歩め』と命ずれば、跛者も立どころに歩みだしたのであつた。彼は一切の悩める者、重荷を負へる者を引付けた。彼は己れの天分が爾く強大であり豊富であると感じて居た。彼は群がる大衆に向つて『凡そ我に来りて其の父母を憎む者に非されば我が弟子と為る事を得ず』と叫んで居る。彼はかくの如き大胆なる言を敢てして憚らなかつた。免れ難き死を目前に控えて、彼は其の弟子等を呼び集め、最後の晚餐と其のシムボルとに由て、己れの生命と弟子等の生命とを結び付けた。彼は罪人として責められ罪人として死んだ。而も彼の光輝ある道徳的並に精神的生命は、恥づ可き十字架上の最期を以て、人間の至聖なるシムボルとなして了つた。この忍従が取も直さず彼をして宗教界の第一人者たらしめたのである。総ての自余の光輝は比類なき彼の十字架の光輝の前に其光を失ふのである。

而して如何なる宗教に於ても、基督教に於ける耶穌の如く、一個の人格が爾く重大なる意義を有して居るものがない。死して墳墓の中に埋められ乍ら、依然として彼は其の弟子の精神を支配して居た。其の師が十字架上に非命の最期を遂げてから、暫くは弟子たちも失望落胆の底に沈んだが、やがて信仰の目を曉^{みづら}きて耶穌の姿をありありと見た。彼の姿は現に生ける者のみが能くする如く目に見、手に触れ得るほど鮮かに弟子の心に光り輝いて現はれた。かくの如くにして復活祭と聖靈降臨祭とが行はれるやうになつた。而して一見耶穌が恥づ可き最期を遂げた其ところに、彼等は勝利の旗を樹て、十字架は名誉の徽章となり、十字架上の死は最も偉大なる神の奇蹟となつた。

爾來基督教は幾多の動搖変遷を経た。而して其間に種々な衣裳を着けたり脱いだりした。されど此の宗教が其の本

領を実現して行つた限りなき諸形式の間にありて、耶穌の人格に対する尊敬の念、少くとも耶穌の人格と自己の人格とを融合せしめんとする意志だけは、一貫して易る事なき精神であつた。固よりそは屢々外部の衣裳に蔽はれ、議論に動かされて、其の面目を傷けられ汚された事があるけれど、尚ほ常に伝承の纏綿を断じ去りて赤裸々の純一なる姿を現はすに足る力を有して居た。而して基督教が新しき道を開拓して進み始めたのは、必ず彼の人格が新たに生命を得来りて、新たなる光耀を發揮した時であつた。吾等は歴史時代の児である。神は長い間の倦まざる働きによりて吾等以前の如何なる時代の人々よりも、更に明瞭に過去を見得る能力と視力とを吾等に与へ給うた。かくて吾等は耶穌の姿に充実せる生命を認めて喜びの胸を躍らすのである。而して此の人格の中に今も尚ほ吾等の生命に浸透したる深刻なる感化を与へ得る偉大なる力を認めるのである。

而してこはまた福音其者の中にも潜在して居る。福音は到る所に吾等をして社会的生命の融合、靈的生命の融合を成就せしめんとして居る。仏教又はプラトー教に在りては、僧侶たるにもせよ哲学者たるにせよ、個人をして飽くまでも個人たらしめんとする。然るに基督教に在りては、其の鮮明なる個人主義なるにも拘はらず、總てが悉く共同生活を根柢として立つて居る。かくて耶穌は神の国を説き、ポーロは教会を説いた。共同の生活は、神の姿を宿す神殿である。其の教団と共に基督は幾世紀の間世界中を歩いて居る。

基督教の本質を研究するに当り、吾等は之迄主として原始基督教だけを対象として來た。されど原始基督教は基督教の全体ではない。基督教は其の組織力、其の共同の生活を築き上げる力の偉大なるに相應して、如何なる他の宗教にも之を見ざる歴史を有して居る。新約時代以後のユダヤ教は、單に停滞沈淪の歴史である。ギリシャ教史は滅亡又は基督教へ没入の歴史である。ペルシヤ教は僅かに数万の信者を有するに過ぎぬ。仏教には其の現はれて以後百年間

だけは実際の精神力を有する歴史があつた。回教は中世紀に於て殆ど基督教以上に偉大なる発展を見たけれど、爾来同じく沈淪して了つた。今日に至るまで連綿として断えざる偉大にして有力なる歴史を有するものは独り基督教のみである。

此の歴史に於て基督教は如何なる国民の生活とも同化し得る事を示して居る。而して此は他の宗教の決して能くせざる所であつた。如何なる宗教もかくの如き力を有して居なかつた。仏教は何處に往つても一様な出世間主義として行はれた為に、国民生活の一部分となつたけれど、其の核心に徹する事が出来なかつた。回教は其の弘まつた国々によつて非常に違つた形式を以て行はれ、殆ど其の間に精神的統一を見出す事が出来ぬ。然るに基督教は凡ゆる種類の國に弘まりて、而も其間に連絡を失はざる激刺たる姿を以て行はれて來た。福音の全部、または少くとも其の大部分は純然たる内面的のものである。従つて時と処とに応じて之に附加せらるゝ外部的形式の如きは、要するに一時的の覆面に過ぎなかつた。而も其の内部に潜在する力は、時勢に応じて外部の服装を幾度も取換へて、凡ゆる変遷を経たにも拘はらず、其の本体は依然として至深の実質と精力とを保持する事を得せしめた。かくの如くにして福音は諸々の国民の生命に浸潤し、種々なる形式を取りて凡ゆる種類の宗教となつて現はれたが、而も此等は悉く同一の根原を有して居るのである。

吾等は之より基督教の発達を概説しよう。耶穌の福音は已に其の初期に於て最も強大なる發展を遂げて居る。而して之を成就せるものは耶穌の最大なる弟子、偉大なる異邦人の使徒ポーロである。

第一にポーロは耶穌の福音をパレスチナよりギリシャ・ローマの世界に移し、セム民族より印度アールヤ民族に移した。当初アラム語で伝へられた福音は、彼によりて始めてギリシャ語の世界に紹介された。多くの点に於てポーロは其の師の遺業を最も手際よく進歩せしめた。偉大なる宗教的解放の過程がポーロの裏に於て行はれた。彼は断乎と

して宗教を国民的束縛より解放し、此年若く元氣よき宗教をユダヤ教に結び付けて居た最後の羈絆を断離した。彼はまた宗教を儀式や祭事の羈絆より解放して『基督は律法の終なり』と教へた。

彼は基督教を以て教会、即ち国民を結合する新しき精神的の宗教団体と解し、基督教を鼓舞策励せる神の精神を説くに当りては、ユダヤ教の律法的理想と対照せしめて基督教の生命の内面的な事、自由なる事、統一ある事、抱擁的なる事を最も抱括的に表白して居る。

されどポーロの人格に於て、及び其の人格によりて体現せられたる福音は、決して単に幸福な発展とのみは云へなかつた。福音は已に此時に於て殆ど根本的の変化を蒙つて居る。

第一。最も重大なる且つ根本的なる変化は、耶穌が伝へた單純なる神の福音、及び罪人に対する愛の福音から、基督に対する信仰が起つて來た事である。耶穌は其の説教に於て、並に其の生涯の全態度によりて、己れと神との間に截然たる区別を劃して居た。彼は神に対する信仰を要求したやうな意味で自己に対する信仰を他人に要求した事は曾てなかつた。されど最初の基督教徒の間にさへ、再び此世に降臨する『世界の審判者たる基督』に対する信仰が中心思想となつて居た。而して世界の審判者として基督は已に多少神の代理を勤めたのである。ポーロは此の信仰を長養した。尤も彼は特に基督を神とは言つて居らぬ。また彼は神と基督との間に明瞭なる区別を劃し、且つ基督が其の権力を神に奉還して、神が總ての物の上に主となり、基督は新たに生れる者の首となる時の事を説いて居る。されど之と同時に彼が基督教の信仰を以て神と同様に基督を信するに在りとし、基督を以て天地の始より存在せる天界のもの、神の其の姿を具へたものとして居た事も確實である。ポーロの此の信条は一面に於て偉大なる真理を含んで居る事は拒まれぬ。基督の人格が其の教團に対して有する絶対的の意義は、之に由て最も鮮明に且つ確實に表白されて居る。基督は其の性質上、彼の教團に取りては如何なる自余の宗教家よりも立勝つた意義を有して居る事は争はれぬ事

実である。されど他面に於て耶穌の人格を神化して、基督は根本的に吾等と性質を異にする超世間的本体であると解釈する事は、基督教をして種々なる紛糾せる思索や空想に走らしめる危険な路となるのである。

第二。ポーロの獨特な救濟思想は此處から出でてくる。ポーロの救濟觀は極めて簡単に概括する事が出来る。人間は其の感覺的・肉体的性情のために、アダム以来必然に罪と死との鉄鎖に繫縛せられ、それが異教及び猶太教となつて現はれて、其の間に益々深く罪と滅びの底に沈み行く。更に高貴なる生命が人間の衷に一道の光明を發して居るけれど、此の善なる自我は次第々々に微かになつて行く。かくて救済者、人間とは異なる更に高き實在、第二の精神的人格が、吾等を肉と罪と死との沈淪より救ひ出し、自由と無垢と精神との世界に登高せしめん為に、天上より此の暗黒なる下界に降臨するのである。此等の思想は單純な耶穌の福音と相距ること極めて遠いものである。かくの如きは福音の上に全然新たなる概念の世界を築き上げたものに外ならぬ。吾等は此ポーロの福音に於て明かにプラトの世界觀と其の信仰とを認める事が出来る。感覺的・物質的世界を峻酷に対立せしめる事、現世に対する悲觀的态度、人間の善にして高貴なる自我が感覺の桎梏に繫縛されて其の力を失つて居る事、この感覺の解脱を求める憧憬の情（ポーロは『此の死の体よりわれを教はん者は誰ぞや』と叫んで居る）、總て此等はポーロとギリシヤの偉大なる哲学者とに共通の思想である。固よりポーロがプラトの思想を藉り来つたのではない。ポーロの宣伝した解脱教には倫理的性質が依然として總てに卓絶して居る。而して其の解脱もプラト派の賢者等のやうな自力解脱に非ずして、救済者基督を中心とする解脱である。ポーロの事業は確かに偉大なものであつた。基督教が世界教たり得る能力、即ち諸々の国民の価値ある偉大なる思想感情と逢会する毎に、能く之と同化し得る能力が、此處で最初に現はれて居る。但し単純なる福音が、ポーロによりてかくの如く發展せしめ複雑ならしめたのが、果して福音の醇なる表現とすべきや否やは疑問である。

第三。基督の死と云ふ事實を救済に結び付けるに及んで、ポーロの救済觀は更に獨特の色彩を帶びてくる。基督の死は其の弟子たちに取りて偉大な不思議な謎であった。而してそは基督復活の信仰が勝利を得た後でさへも依然として大なる謎とされて居た。最初彼等は旧約の中にメシヤの死と悩みとが予言されて居ると云ふ外部的解釈を加へて居た。されど幾くもなくして（恐くは已にポーロ以前に）、基督の死は吾等の罪を贖ふ犠牲であるという解釈が現はれた。神が禁めるには犠牲を以てすべき事、犠牲は罪を贖ふ力ありとする事を以て、極めて当然の事と思つて居た時代に在りて、基督の死は罪を贖ふ犠牲なりとの信仰を生み出したのは決して不自然な事ではない。而して之と伴ひて更に第二の思想が起つた。即ち殉教の価値と意義とに関する思想これである。此の思想は最初にイザヤ書第五十三章に於て驚嘆すべき語調で表白されて居る。人は悩みと苦しみとによりて始めて至善至貴のものたり得る事、個人は群衆のために、正しきものは正しからざる者のために悩む事は、偉大なる神の掟であるとイザヤは考へた。『まことに彼はわれらの病患なきみを負ひ我儕のかなしみを担へり、然るにわれら思へらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるゝなりと。彼はわれらの愆おとがめの為に傷けられ、われらの不義の為に碎かれ、自ら懲罰さらじめを受けてわれらに平安やすを与ふ、そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり』。シリヤの宗教迫害が行はれ、マッカベー人が勃興し来れる、かの偉大なる殉教時代に、此の思想は再び旺盛になつた。耶穌が自分の生命を多くの人々の贖身金みうけいんとして与へると云つたり、または最後晩餐のシムボルに於て自分の死は彼等の為であると言つた時には、明かに彼も亦此の事を考へて居たらうと思はれる。而してポーロは已に種々に結合し纏綿して居た此等の思想を繼承した。彼の思想の新しい処は、唯だ救済の福音を耶穌教の中心となし、非常なる価値を之に置いた点に在ると云つても過言ではない。かくの如くにして神は基督の死なくしては人間の罪を赦す事なく、律法の呪詛は正義者たゞしきしゃの光榮ある患難なきみによりてのみ除き去られると云ふ厳酷な教義が起つて來た。而して此の教義に於て基督の十字架上の死と云ふ謎は、徹底せる合理的解釈を得たのである。さ

れど此の為には非常に高き代価を払はねばならなかつた。若しポーロが更に大胆な見地に立ちて、自己及び其他の総ての基督者の患難を以て、基督其人の患難と同類のものと観じ、かくして上述の峻厳なる思想を和げたならば、此の教義は次第に消去つて了つたらうと思ふ。憾むらくは茲に出づる事をせざりし為に、『吾等の為に遂げられたる基督教の死』と云ふ觀念が、個人に向つて下されたる福音の無上大法に代りて基督教の中心となるに至つた。

第四。最後にポーロ時代に行はれた單純なる福音の根本的變革は、基督教徒の共同生活に特別なるサクラメント（聖礼）を採用した事に現はれて居る。通俗の見解に従へばサクラメントとは物質的方便、又は人格的信仰、又は人格的行為により、之を通して神の恩寵が人間に加へられる神聖な物質的行事である。宗教に於て物質的方便の効力を信ずる此の信仰が、低級の宗教生活に於て已に存在して居た事は第二章に述べた通りである。宗教に於て物質的方便の効力を信するこの信仰が、低級の宗教生活に於て已に存在して居た事は第二章に述べた通りである。こは宗教の墮落と、諸宗教の混同とを示す一特徴で、此処には密儀・修法・聖奨等が非常に重視せられるのである。基督教はかかる宗教の間より更に高き宗教として其の頭角を現はしたのであつた。然るに今や基督教の神聖なる行事、即ち洗礼及び聖晚餐式に、サクラメントの觀念を付するやうになつたのは、明かに基督教を囲める異端の世界に降服したものである。この変化は特にポーロ一人によりて行はれ、又は促がされたのではなく、寧ろ自らくなつたのである。ポーロは決してサクラメントを重んじるやうな性格の人ではなかつた。されど之がポーロ時代に於て如何ほどまで行はれて居たかを示すために、吾等は二つの例証を擧げる事が出来る。コリントに於ては生者が死者のために洗礼を受くる習慣（死者に向つて恩寵を加へられるために）が行はれて居た。而もポーロは此の魔術的な器械的な洗礼の觀念に対し非難を加へて居らぬ。而してポーロはまた聖晚餐の飲食を以て、主耶穌との精神的並に肉体的交通と考へ、異教徒の獻供餐も亦惡鬼との精神的並に肉体的交通と信じて居た。かくの如くにして晚餐の不當なる享受は、疾病又は死の

如き危険なる外部的結果を惹起するのである。

かくて基督崇拜、プラトー思想に影響せられたる極端に高調せられた教説觀、犠牲及贖罪の教義、サクラメントの觀念の如き、幾多の新らしき要素が、ポーロ自身を通して、並にポーロの時代に於て、單純な福音の上に附加せられた。信仰によりて義とせらるるとするポーロの赦罪説は、彼の信仰の中核にあらずして、寧ろ律法に執着するユダヤ教徒に対して用ひたる武器であつたが、之も亦注意すべき一新要素である。吾等は後に宗教改革の性質を説く時に、また此赦罪説に就て一言しよう。兎に角ポーロに至りて基督教の歴史は複雑になつた。

基督教其の後の発展の歴史は、吾等福音基督教徒たり宗教改革の詛歌者たるものに取りて、無限の価値を有して居るが、今は極めて簡短に之を叙述して置かう。

第一に研究すべきは基督死後二世紀末の情態である。吾等は此處で基督教会の偉大なる出現を見る。ポーロにも教会の觀念があつたけれど、そは主として精神的の力たるに止まつて居た。然るに今や教会は確固たる根柢の上に巧妙に築き上げられたる有機体として現はれた。そは聖書の編纂、共通の告白文、及び公認の信条によりて其の統一を保つた。而して聖書に加ふるに更に伝承を以てし、而して其の伝承はまた色々なものを伴つた。教会の首座には僧正等は一体のものとせられ、純乎たる教説の護持者として尊敬されて居た。神学者が勢力を得来りて茲に神学もまた現はれた。教会は一定の組織ある堂々たる礼拝を有して居た。而してそは大体に於て靈と真理とを以てする礼拝であつたが、既にまた儀式即ちサクラメントの要素を取り入れて居た。而して教会の中に既に司祭 Klerus と俗人との区別さへも出来て居た。此の教会本位の基督教が如何に多くの点に於て律法教の組織的形式を繰返して居るかは、非常に注目に値する事である。

次の百年間に成し遂げた此の教会の発展は、大体に於てポーロが福音に附加せる色々な要素が次第に実現されて行

つた跡を示して居る。

第一。基督の人格論。基督を神とする信仰は、所謂異端基督教会に属する大多数の信者の間に、殆ど最初から深く其の根を下ろして居たやうに見える。固よりポーロの神学に見るやうな微細な区別は、彼等の未だ知らざる所であつた。たゞ異邦の多神教から改宗した人々にとりては、基督の神性を信ずるは極めて容易な事であつたけれど、基督教の指導者たる神学者や教養ある人士にとりては、基督教の根本たる一神教の観念と、基督を神とする信仰とを調和する事が至難の問題であつた。彼等は子なる基督は、父なる神の下位に在ると云ふ思想を保持する為に長い間あらむ限りの力を尽した。されど俗人のインテレストが終に最後の勝利を得た。而しそは基督と神とは全然同一であると云ふ教義を築き上げねば満足せられぬ性質のものであつた。されどニケヤの信条には、父なる神と子なる神と、而して幾くもなくして之に加へられた聖靈とは、類似の存在者であるとされた。類似の存在ではあるけれど、全然同一のものではない。三個の人格にして而も一個の神である。後代の信条、例せばアタナシウスの信条は、或る辛辣な芸術家がいみじくも『木製の鉄』と冷罵したやうに、之と同類の矛盾撞着に充ちて居る。されど矛盾や困難は之のみに止まらなかつた。若し基督が神ならば、基督の神性と人性との関係、基督の神格と其の受肉降生の事実との関係は如何であるか。而してカルケドンの会議では、此処でも亦驚くべき矛盾撞着を敢てして、基督の内に二つの性（後には二つの意志）ありとし、此等の二つの性は一個の人格の中に、混ぜず、変せず、不可分にして不可離なるものとして存在して居るとなした。

第二。解脱及び供養の觀念。ポーロによりて表白せられた救済觀、即ち吾等とは絶対的に性質を異にする超自然的救済者に対する信仰は、長く基督教会の中心觀念となつた。而して東方教会に於ては之と共に救済を自然的に解釈する傾向が盛んになつた（此は既にポーロの教説の中に其の萌芽を徵^{きさ}して居る）。東方教会の信者等が究竟の目的とする

所は、自ら神になる事、即ち救済の至極の恩寵として不死を与へられる事であつた。其の救済に関する信仰を簡短に言へば、神なる基督は人にならなければならなかつた、それで吾等人間は何時かは神とせられると云ふにあつた。さればかかる宗教に於て基督の神性に対する信仰が中心を占めるのは極めて明瞭な事である。然るに西方教会に於ては之と反対に、解脱思想は基督の十字架上の死、及び彼の道徳的方面、更に切言すれば其の赦罪の方面と結び付けられた。かくて西方教会では基督が其の死によりて人間の為に無限の功德を施したと云ふ教義、及び其の犠牲は無限に罪を贖ふ力があると云ふ教義が極度に高調された。

第三。サクラメント（聖礼）の観念。基督の教会内に於て、サクラメントの観念が次第々々に純一なる信仰を蔽ひ始めた。而して是まで無かつた新しき観念と教義との世界が現はれ、多くの迷信が基督教に入り込んで来た。三世紀此かた、サクラメントは基督教の全礼拝の主たるものとなつた。而して基督の贖罪死を繰り返すものとされて居る聖餐式、即ち弥撒が其の中心となつた。僧侶階級は著しく其の権力を拡張した。而して殊にギリシヤ教会に在りてはサクラメントの信仰が、解脱思想の自然的解釈と相伴ひて、一切の精神的信仰を滅ぼして了つた。

第四。新たなる重大な問題が教会内に起つた。教会は異教徒の世界を征服して、國家の教会となつた。初代の教会は現世と其の文明とを敵視したが、新しき教会は現世と握手し、且つ現世に於て其の勢力を張らんとした。而して現世を敵とする当初の精神は僧院の中に立籠もるやうになつた。此の僧院は基督教の最も善き最も貴きものを自身の中に引入れて了つた。東方の僧院は出世間的な且つ寂靜な性質を何処までも失なはなかつたが、更に活気に富んだ西方に於ては、僧院は西欧文化の極めて重大な動力となつた。基督教会は、西方に於ても東方に於ても、当初は殆ど革命的に起つた此の運動を巧みに善用し、同時に世間的な且つ出世間な姿を取りて現はれようとした。

初代基督教会は次第に分離し初めて、東方及西方教会の二つになつた。こはローマ帝国が東西に分れた時に既に其

の徵候を呈し、中世紀に至りては完全に分離したのである。

東方教会即ちギリシャ・カトリック教会では、大体に於て基督教は低度の宗教生活に退歩した。そは精神と發展の能力とを失なつた。神学は固定して進歩の跡を絶つた。信者等は其の眞の意味が益々不可解になり行く教義を固執した。サクラメントの觀念が何者にも超えて宗教を支配した。解脱の思想は益々自然的に解説されるやうになつた。宗教は戦々兢々として奉行せられる外部的の儀礼や祭事に墮落した。而して其の上に聖徒崇拜、聖跡崇拜、及び殆ど呪物崇拜に近き神像崇拜が行はれた。而して後期ギリシャ文明の世界に於て、到る處にかの神秘的な修法を中心とする外教が、新たなる生命を得て來た。宗教は恰も国民宗教時代に於けるが如く全然習慣となり伝習となつた。而してビザンチン帝国が回教徒の侵入によつて滅亡して此かた、東方教会は當時東方に於て興起しつゝありし多くの小基督教国民と密接に相結んで多數の小教会に分離した。此等の中でただロシヤの教会のみは、其の國民と共に偉大なる歴史を作り、今尚ほ作りつゝある。而してそは益々發展すべき種々なる力もあり又可能性もある。かく言へば諸君はトルストイが描寫せる露国の農民生活を想ひ起すであらう。

然るにローマ・カトリック教会は、ギリシャ教会と事變りて、其の精神的生長力を失なはなかつた。西方教会は当初より國家との関係が薄かつた。そは歴史を有し且つ歴史を作つた。其の歴史とは何か。曰く中世紀の法王及び十字軍の歴史である。其の神学は回教の哲学に刺激せられて、已に中世紀に於て全盛を極めて居た。ローマ教会は啻に教会に伝はり来れる在來の要素（教義・伝承・基督論・救濟及び報償思想・サクラメント）を發展せしめたのみならず此の教会に於ては更に全然新しき要素が重大なものとなつて來た。吾等は項を分ちて以下に之を述べよう。

第一。ローマ教会にはローマ法の精神が入り込んだ。ギリシャ・カトリック教会が殆ど国民宗教の階段に墮落したやうに、羅馬教会では恰も律法教に於けるが如く宗教と法律とが密接に結合した。宗教は神と人との法律的契約とな

つた。基督教は格守すべき種々な義務の組織となつた。之に落度があれば第二の組織、即ち多少ペルシャ教の懲悔組織と似通へる種々な懲悔によりて贖はれた。教会は此の贖罪を司る偉大なる滅罪設施である。基督の死は全く法律的見地より万人への奉仕、並に万人の為の贖罪を遂行せるものと解釈された。教会は基督及び其の聖徒等の無量功德の管理者である。かくて儀式、宗教的習慣が宗教の中心となつてくる。

第二。法律の精神と共に更にローマの特別なる精神、即ち世界統一の精神も教会内に入り込んだ。ローマ教会の位置は、偉大なる東方首都の教会の位置とは当初より全然事情を異にして居た。ローマは西方に於ける唯一の相承監督管区であった。東方に於ては多くの監督等が互に勢力を争へる間に、ローマの教会は競争者なしに霸を西欧に称して居た。西帝国の政治的権力が地を拝み、且つビザンチンの勢力が次第に衰へ行くに従つて、ローマはまた西欧の政治的主腦となつた。民族大移動の狂瀾怒濤の間に在りて、ローマだけは巨巣の如く屹立して居た。そは諸蛮族を教化して之を文明に導く大任を双肩に担つた。かくてローマは世界統一の精神を作興した。東欧及びコンスタンチノープルとは全然没交渉なフランクの諸帝が劫興した時代以後、ローマは霸氣満々たる新興のゲルマン帝国と共に、中世紀に於ける至高の政治的権力を握るやうになつた。幾世紀の間ローマは世界統一の為に苦心したが、現に今日と雖ローマ教会は尚ほ其の政治的性質を棄てないのである。

而してローマはローマ・カトリック教会其の者に於て、世界統一の努力を最後まで続けて行つた。今日に於てさへも教会と云ふ思想は非常な発展を遂げて居る。中世紀に至りては宗教會議即ち監督等の総合体が法王の上に位して信仰上の諸問題を決議し、法王を廢立する権利を有して居たが、宗教會議と法王との間に行はれた数世紀間の衝突と争鬭との後に、後者が最後の勝利を得て、ローマは一八七〇年ヴチカン會議により、信仰上的一切に關する法王無謬説を確立し、茲にローマ教会に於ける永久的な絶対的な主権を握るやうになつた。

第三。次に注目すべきはローマ教会が殆ど予言者の力を備へた偉大なる一人格を有して居る事である。その偉人は言ふ迄もなくアウグスチンである。吾等はアウグスチンの懺悔録の第一章を読んだだけで、已に彼が如何に偉大なる人格であるかを知る事が出来る。ローマ・カトリック教会が激刺たる信仰を得来る処には、常にアウグスチンの感化の跡が現はれて居る。されど彼の信仰は或程度までポーロの信仰の改新である。彼も亦ポーロと同様に罪惡と恩寵、墮落と救済、人間の意志の絶対的無能及び束縛と、定命に基く一切成就の神寵との樹立より一切を説明せんとした。されどアウグスチンはポーロと異なつて、神の恩寵はカトリック教会を通じてのみ人に来るものとした。かくてアウグスチンの感化は、宗教的生命を深刻にし強烈にしたと同時に、教会制度及び之に伴ふ外部的儀式の発達をも促がした。

第四。ローマ教会の第四の特長として最後に挙ぐべきは西欧の僧院制度である。これは前にも述べたやうに東欧の僧院とは事變りて、道徳の上にも文化の上にも至大なる意義を有して居た。ローマ法王の権力が絶頂に達した時代に、僧院も亦全盛を極めた。雄風堂々たる法王インノセント四世と絶好の対照をなして居る淳朴な謙遜なアッシシのフランシスは、中世紀の生活に偉大なる感化を及ぼした点に於て、アウグスチンと匹敵し得るものである。而して彼の感化は、文学に於てはダンテにまで及び、絵画に於てはフランシス一代記を書いたジョット及びフラ・アンゲリコよりバルトロメオ及びラファエルにまで及んで居る。

上來吾等は基督教が複雑になり行く歴史を辿つた。千五百年の間、基督の福音は次第に多趣多様の姿を取り来つたが、そは同時に次第に統一なき撞着せるものとなつて行つた。かくて茲に解放と醇化との新紀元が現はれた。

第八章 基督教の将来

基督教の将来に関する問題を解釈する為には、先づ此の宗教が到着せる最後の形態及び發展に就て考へるのが最良の順序である。宗教改革は独逸魂が基督教に向つて試みた偉大なる解放運動である。而して基督教は之によりて当初の純一と真実とに復帰する事が出来た。

第一に宗教改革は、ローマ教会が一千年以上を費やして築き上げた一切の外部の組織を打破し、教会の政治的・國家的性質を排除し、從来尚ばれし一切の外部の權威を否定した。キッテンベルヒの僧侶の良心の前には、如何なる圧迫も其の力を失つた。教会は最早教義に関する最後の權威たる事が出来ぬ。法王自身も、宗教會議も、將又全教会の委員会も誤謬に陥る事がある。ルートルは諸大学が鼓吹せる新しき知識と、科学的良心とを以て、一切のものを棄て、千五百年來の伝説を棄て、直ちに聖書其者に參向した。而して彼は百尺竿頭更に一步を進めて、聖書の一言一句が必ずしも全く權威を有するに非ずとした。聖書は基督に悖らざる限りに於て權威を有すと云ふ偉大なる原則は、ルートル自身の手では完成されなかつた。されど其の萌芽は已に彼が聖書に対して価値判断を加へた事に胚胎して居た。尤も彼自身が既に屢々此の大胆な立場を踏み外して居る。されど聖書を以て基督に現はれた啓示の原始史料と觀する近代聖書批評と一致して居る彼の態度は、聖書に与ふるに當然福音教会内に存在する權利を以てした。

第二に宗教改革は、福音の信仰と道徳とを、長い間の歴史に於て纏綿し来れる厖雜たる外部の儀式より解放した。赦罪制度の廢棄と共に決して止む事なき進歩が始まつた。カトリックの礼拝の骨髓たり中枢たる弥撒・僧侶の特權、懺悔贖罪の全制度・法王に獻げる喜捨金制度・巡礼・聖徒及び聖母崇拜・其他の數多が、今や放棄されて了つた。そ

は實に驚くべき解放であつた。ポートの思想を根拠とし、律法によりて義とせらるとするユダヤ教の思想に反対せる彼の教義を再興し、純一な赤裸々の信仰を振かざしてルーテルはカトリック教会の事業に對抗した。さればルーテルの宗教改革の精髓は、信仰によりて義とせらるとする教義を高調した点にあると言つてもよい。固より彼の事業は之だけではなかつた。彼はローマ教会が從来附け加へた粉飾を剥落して、再び宗教の眞面目を發揮した。彼は信仰とは不斷に慈眼を開いて吾等及び吾等の行為を見給ふ大愛の神に全心情を獻げる事、及び吾等の良心を神に向ける事に在りと云ふ千古の真理を堂々と宣伝した。彼に従へば宗教とは生命ある全人格の所為で個々の善行を行ふ事ではない。

ルーテルはまた總て此等の外部の儀式と共に、特別なる意義を与へられたるサクラメント、及び此のサクラメントを中心とする信仰を、根柢から排斥した。彼は聖書の教訓を逸出して、カトリック教会内に蔓つて居た一切のサクラメントの信仰を拒否した。而して更に一步を進めて、一切のものは、『道』^{トロ}を根柢としてのみ存在し得ること、サクラメントに於て真実なるはただ『道』^{トロ}だけなる事、サクラメントは單に『道』^{トロ}の特殊なる一形式に過ぎぬ事を一生の間力説して居た。かくして彼は福音に対する一切の自然的解釈に対して、飽く迄も精神的信仰を高調し、福音初発當時の發展を再現した。茲に注意すべきはルーテル自身が再洗礼派並にツキングリ派の如き狂熱主義に反対して、サクラメントを自己並に其の教会に採用したのは、カトリック教会の思想を踏襲したやうに見える事である。されどかくの如く考へるのは誤つて居る。彼はサクラメントに対する其の根本的態度よりして、全然此の聖礼（洗礼及び聖餐）を、精神的若しくは象徴的に解釈し、かくしてサクラメントに与ふるに永遠に福音教会内に存在し得る権利を以てしたものである。

ルーテルの宗教改革が吾等に与へた最後の且つ至要のものは、世間及び世間の道徳並に事業に対する基督教の態度を、全然一変せしめた事である。ルーテルは僧院制度を排斥した。彼はこれに由てカトリック教会の世間に対する特

別な曖昧な態度、即ち同時に世間的たり且つ出世間たり得るやうな巧妙なる結合を排斥して、全然其の二重性を打破した。彼は少くとも原則として基督教の遁世的性質の最後の残穢を覆へした。今や神に事へる道はたゞ一つあるのみとなつた。其の道とは道徳的に善良な生活を営む事である。其の主人に事へる僕婢、其の子を育てる母親、一家を支へ行く家父、其の国を治める王、此等の人々は牧師や修道僧と同様に神事を行なつて居るのである。福音は世間の道徳となり、日常の生活は靈化された。こは真に偉大なる發展と云はねばならぬ。此点に於て宗教改革は、殆ど当初の福音の中にさへも認め難く、是迄は全然埋没し閉息して居た尊きものを長養したと云つても宜い。

これが福音の究竟の發展である。固より宗教改革にも束縛があり制約があつた。ルーテル及び彼の後に起つた福音教会は、永遠なる価値を認め難き多くの思想を、適當なる思慮を費す事をせずして中世紀の教会より伝承して居る。例へば福音教会に於て絶對的勢力を得た聖書天啓説、基督論、及び之に伴ふ三位一体説の如き形而上學的思索、始めて中世紀に組織された代理受難説、罪惡と恩寵との対立を以て終始するアウグスチンの根本思想、此等は皆中世紀の遺物を相承したものである。

福音をして更に純一なる發展を遂げしむる為めに宗教改革は如何なる問題や仕事を吾等に遺したかと云ふ問題は、同時に基督教の将来は如何と云ふ問題である。吾等は之に就て少しく精細に研究しよう。

吾等は先づ第一に基督教の将来は如何と云ふ問題なる事を言つて置く。これまで宗教進化の跡を辿り來りて吾等が知り得た事実は、基督教が一切の自余の宗教に立優つて居ること、基督教は從來の宗教的進化の絶頂に達して居ることである。

然り基督教は實に發展の絶頂に達して居るのみならず從來の總ての宗教的思潮の流を綜合して居るやうに見える。

先づ吾等は基督教が宗教史上に占める外部の位地を見よう。そはかの偉大なる予言者時代を距る五百年にして、斬然として四辺を拝む雄姿を現はして居る。総ての予言者の宗教の中で、イスラエルの予言者教のみが基督教に於て更に高き階段に登高した。其後約五百年に現はれた回数は、明かに退歩せる宗教であつた。

吾等は以下項を分ちて基督教が内面的に優越なる諸点を述べよう。

第一。基督教は宗教に於ける特殊の国民的要素を絶滅して了つた。而してそは長い間の歴史に於て、仏教及び回教よりも遙かに深刻に、種々な国民の内面的・精神的生活に入り込んだ。今日吾等が、ローマの基督教又はドイツの基督教、露国の又はアルメニヤの基督教、英國の又は北米の基督教等と呼んで居るのは、基督教が能く諸国民の内面的生活に同化して居るからである。

第二。基督教に於ては、宗教は一切の外部の儀式を離れて、生きたる神に対する純一な精神的信仰として現はれて居る。福音の本質は全然内面的である。長い間の歴史の中には、往々にして岐路に入り邪径に迷つたこともあるけれど、基督教は常に其の内面的・精神的なる本領に復帰することが出来た。而して基督教が多趣多様を極めたる外部の形式をとりて現はれることを得たのも、其の本質が醇乎として内面的である為に外ならなかつた。根本信条五ヶ条を以て人心を支配する回教や、最も厳酷なる禁令によりて些々たる日常の行為を律する印度教の如きは、之を基督教に比すれば、非常なる圧迫を人間に加へて居る。

第三。基督教は宗教を国民的並に儀式的束縛より解放する事によりて、宗教生活に於ける個人の解放をも成就し、最も鮮かに且つ最も力強く個人主義を提唱して居る。而もまた個人を単に個人として離在せしめる事をせずに、人間の社会的生活に其の全力を注がしめるやうにした。

第四。従つて基督教は卓絶せる倫理的宗教である。そは行為の価値判断を重んずる点に於て律法教と握手し、両者

共に意志の力を策励する正義の観念を中心思想として居る。されど基督教は其の道徳の純一なること及び強大なることに於て、遙かに律法教の上に在る。基督教にては醇化せられたる宗教と醇化せられたる道徳とが、最も親密に相結んで居る。

第五。基督教はまた卓絶せる解脱教である。そは吾等に示すに更に高き生活を以てし、現世の生活は決して至高の幸福でないことを教える。されど同時にそは現世の生活を絶対的に否定はせぬ。そは已に現世の生活の中に潜在せる高尚なる要素を發現せしめ、而して之を知的生活に於てに非ずして倫理的生活に於てする。されば基督教は倫理的解脱教で、其の至高の目的は、罪惡の赦免と、善なる意志の解放とに在る。

第六。基督教は倫理的解脱教なるが故に、人間の生活、及び其の文化に對して、貢献こそすれ、決して之を阻害しはせぬ。基督教の眞面目を僅かに僧院の中に求めねばならなかつたような時代でさへも、当時の文化を策励する最大の動力となつたのは此の僧院の一派であつた。此点は仏教の僧院制度と著しく相違する所である。基督教国が文明の指導者となつたのは決して偶然の出来事ではない。されど之と同時に基督教はかのベルシャ教の如く、決して世間的事業と其の發展とに没頭しなかつた。そは一切の現実の事業を以て目的を達する手段と看做した。そは個人に教ふるに、一切を見給ふ神の前に神命を自覺して己れの仕事を行ひ、神と偕に平和に生き、永遠の影を宿す生涯を送るべき事を以てする。

かくて吾等は再び繰返して言ふ、基督教の将来に關する問題は、宗教の将来に關する問題であると。吾等は現に全人類の三分の一を支配して居る基督教が、他日世界に於ける唯一の宗教となるや否やと云ふ問題を、此處で論じようとは思はぬ。たゞ世界に於ける進歩的国民の宗教たり得べき宗教が、唯一つあるものとすれば、それは基督教でなければならぬ。自余の宗教は到底比較にならぬ。そは歴史が明白に証明して居る。歐洲文明に仏教を接種せんとする總

ての試みは、要するに成功を期し難き冒険に過ぎぬ。五十年前シヨーベンハウエルが此の東洋の宗教を以て究竟の知見となし、仏陀を以て特別の聖者と崇拜したのは、偶々彼の成長した小聯邦が、悲惨な化石した状態に在りし事を反映するものである。人々が尚ほビスマルクの雄姿を仰いで居る時代、国民的覺醒の時代、社会問題の時代、ニッチャエのツアラトウストラが盛んに読まれる時代に於て、此偉大なる哲学者の跡を追ひて仏教を奉する人々の如きは、要するに不思議な聖者とでも云ふべきであらう。歐洲仏教徒は仏蘭西の首都に其の本部を設けた。其處此處に独逸でも同志を得るであらう。されど總て此等の努力は水泡に帰するであらう。

基督教の将来に関する問題は更に他の意味に於ても宗教の将来に関する問題である。こは一切の歴史的宗教を（従つて基督教をも）否定し乍ら、而も尚ほ宗教を有し且つ之を保持し得べしとの意見を抱く人々に對して、特に言つて置き度い点である。基督教は現に吾等と交渉ある唯一の生命ある宗教である。之は非常に重大な事実である。吾等が宗教の歴史を忠実に辿り行けば、宗教の發達は極めて長い星霜、幾百年及び幾千年の日月を経て、徐々に行はれて来た事を知り得る。人間の宗教的生活が登高すればする程、其の信仰の形式も亦一定して來た。従つて新しき形式の出現は次第に稀になる。而してその新らしき信仰は、人生の驚く可き動搖の間に生れ出づる偉大なる奇蹟である。それは海はあせ山は裂ける驚天動地の間に現はれてくる。然るに現代人の間には、一朝にして新宗教を作成し得べしと信ずる人々がある。彼等は基督教を以て旧き教として排斥し、雜多なる思想を混一して、茲に新しき宗教を作り上げんとして居る。されど宗教界の事は爾く単純には行かぬ。かくの如き思潮に雷同して、基督教を拒否する人の如きは、偶偶其の無宗教を表白するものに過ぎぬ。

されば基督教の将来に関する問題は、極めて重大なるものである。而して基督教の将来と云ふ問題は、基督教は更に発達すべき可能性ありやと云ふ問題になる。或は基督教には最早発達の必要がないと言ふかも知れぬ。其等の人々

は従来の信仰で己に充分でないかと言ふであらう。併し乍ら吾等は之に対して下の如く答へる。曰く宗教改革以来人間の生活の全組織が変化した。而して生活状態が全然一変すれば、其の度毎に宗教も亦新たなる形式を取る事は、歴史と経験とが吾等に教へる所である。従つて基督教は更に発達の必要があると。

されば吾等は基督教が更に発展の必要あるか、若しありとすれば孰れの方向に発展の必要あるかと云ふ問題に答へる為に、先づ宗教改革以後人類の社会生活に起つた変動を述べねばならぬ。此点に於て最も明瞭な且つ重大な事実として吾人の目に映するのは、全然教会又は宗教を離れた文明が勃興した事である。初代基督教会は文明を敵視して居た。而して中世紀の文明は全然教会に依属して居た。吾等は文芸復興に於て教会より独立せる文明の最初の産声^{うぶごゑ}を聞く。されど此の文明は其の外部的永続と云ふ点よりすれば尚ほ一時的文明であった。教会の感化及び勢力は、激しき争闘の後に根本より覆へされたのではなく、單に傍に押しやられたに過ぎなかつた。而して教会は之に対して痛切なる復仇を加へた。近代文明が発達したのは、英國及び和蘭を先駆とする新教国に於てのみであつた。先づ其の外面より云へば近世星学及び自然科学（ニュートン）並に近世工業（器械及び世界貿易）が起つた。自然を支配せんとする此の努力と相応じて、人間社会の法則を研究し支配せんとの努力を生じ、茲に近世の国家学・経済学・統計学が起つた。かくて此處に宗教を離れて、人間社会と云ふ思想を根柢とした、全然現世的の倫理体系が現はれた。吾等は此の全思潮を理神論^{リスムス}と云ふ名称の下に總括し得ると思ふ。此の文明は革命的でもなく、又直接に教会の敵でもなかつた。そは單に世間的たるに止まる。強烈な自意識を具へ、人生に対し、其の官能の生活に対して激しき歡樂を求める、双脚は確と大地を踏み占め乍ら、われ此處に在りと呼ばはつて居るのが此の文明である。和蘭及び普蘭の絵画並に沙翁は此の文明のシムボルとして永遠の意義を有して居る。

而して其の結果は宗教的生活の驚くべき荒廃であつた。此点に於て、真先に基督教と近代文明との結合を図りたる

独逸のアウフクレーリング即ち合理学派は、常に其の先見の明を賞讃せらるべきものである。而して独逸の唯心論の芸術と哲学とは、アウフクレーリングの文明（殊に其の宗教的方面）を深刻にし且つ豊富にした。されどそは一面に於て（殊に其の一般的態度に於て）、全然アウフクレーリングの精神を根柢として其の仕事を進めて行つた。即ち夫自身に於て価値を有し、教会の力を藉る必要なき、独立独歩の文明と云ふ事を前提として、其の仕事を進めて行つた。

第十九世紀は此の傾向に對して何等の新しきものをも齎らさなかつた。第十八世紀の独逸の精神生活を忠実に研究すれば、該世紀に於ては一切の精力が一点に集注せられ、其を出発点として一切の發展が行はれた事を知る。一方に於て宗教的生活の領域には、全世紀を通じて偏狭なる精神が次第に勢を得来り、教会は自己の築ける城壁内に立籠るやうになつた、而して之に伴ひて宗教は社会の実生活に對する感化を失つて行つた。他方に於ては始めて該世紀に独逸に現はれた实用科学・大工業及び世界貿易、並に外面的に燦然たる文明の偉大なる勢力と相並んで、英仏の実証論的・唯物論的世界觀が跋扈したために、独逸人は唯心論的文明の純一と完全とを失なふに至つた。されど一切の此等の思潮の男波女波が寄せては返す其間に、屹然として巨巖の如く立てる新しき事實は、夫自身にて有力なる、夫自身を根拠とする欧羅巴及び北米の文明の出現である。

此の近代的亾人生理想のシムボルとして吾等の前に現はれるものはゲーテ其人である。彼の人格は内面より湧き出づる生命、自己を顕現して行く内在的且つ普遍的なる發展の法則に従へる生命と云ふ印象を吾等に与へる。當時的一切の思潮を吸收し、驚くべき勤勉と能力とを以て働き、一切の惡魔と勇敢に格闘して見事に之を足下に踏み据ゑたゲーテは、光榮ある勝利の間に、統一ある世界觀と、人生に対する態度とを体得して、恰もオリュムポスのツォイスの如く、栄誉の冠を戴いて高座に坐し乍ら、其の豊富なる賜物を惜氣もなく吾等に下して居る。而して此の文明は英仏のアウフクレーリングの如く、外面のみ燦然たる文化に非ずして、一切の人生の高尚なる精神力、従つて宗教に對して

も其の活動の舞台を与へる至深なる内面的文明である。夫自身に於て完全なる、夫自身の上に立脚する豊富なる文明である。

ゲーテと相並んで吾等の前に立つものはビスマルクである。彼も亦内在せる普通の法則に従つて活動する生命、英雄的な、精力的な、無限の才能を有する人間の姿を現はして居る。双脚を以て、確と大地を踏み占め、たゞ与へられたるもののみを念頭に置いて、ビスマルクは慘怛たる生存競争の間に、其の疲弊せる国民をば、夢想だもせざりし勢力と権威とに到達せしめた。恰も魔の笛でも吹鳴らしたやうに、彼は独逸の唯心論者を覺醒して一斉に振ひ立たしめた。到る處で、固より独逸に於ても、自己保存、自己主張の義務、世界征服の争闘と云ふやうな叫びが反響を呼び起した。到る處に新たなる生の欲求、新たなる向上の努力、新たなる組織、生存競争、階級争闘が起つて來た。

此の近代文明の世界に於て、果して基督教は能く自家の当然占むべき地位を主張し、前世紀の發展の間に失へる感化力を回復する事が出来ようか。基督教は今日まで行はれて來た根本的態度に於て、上に叙述せる生活理想とは峻厳なる対立をなせる根本觀念の上に立つて居る。即ち基督教はアウグスチンによりて發展せられ、ルーテルによりて更に確立せられた褊狭なるポーロの救濟觀によりて支配されて居る。読者は吾が言を誤解してはならぬ。自分は固より基督教史の光彩たる此等の偉人は、其の無尽に豊富なる天分の中に、上述の救濟觀以外にも種々な貴き宗教的要素を有して居た事を知つて居る。されど此の事を論ずるのは自分の當面の仕事ではない。吾等の目前の問題は、實際基督教史上に生命を有して最大多数の人心を支配して居るのは、彼等の信仰の孰れの部分かと云ふ事である。而して吾等は之に対しても下の如き信仰であると答へる事が出来る。曰く、人間はアダム以来根本的に腐敗して居る。人間は自らの力では如何なる善をも為す事が出來ぬ、ただ益々罪惡と墮落との深淵に淪落し行くのみである。人間の全力を挙げて僅かに贏ち得る所は、殆ど無価値なる外面向的『市民的』道徳、全然外面向的なる文明に過ぎぬ。此の迷へる世

界に吾等を救済すべき救主が現はれた。彼は全然吾等とは異なるものである。彼は上よりし、吾等は下よりし、彼は神性に充ち、吾等はたゞ人間たるに過ぎぬ。一切は罪惡と恩寵との対立を根柢として立ち、宗教の唯一の中心力は罪惡の自覺と、其の救済の慰藉とである。

吾等は近代文明の間に在りて尚ほかくの如き宗教観を尊重し固持すべきであらうか。吾等は牢乎たる精神を以て之を信奉した昔の信者に対しても至高の尊敬を払ふに躊躇せぬ。されど吾等は之と同時に、かくの如き信仰が如何なる結果を今日に及ぼすかを考へねばならぬ。此の觀念を固執する事は近代生活の骨子を抜き去りて其の自滅を強ぶる事に外ならぬ。従つてそはゲーテの如き、ビスマルクの如き偉大なる人格を拒否する事に外ならぬ。かくの如き宗教観は、基督教が外教の間にありて之と闘つた時代には許すべきものであつた。而して中世紀の教会が自ら創造せる文明を此の態度で批判して居た時代に於ても尚ほ許すべきものであつた。されど教会と独立して発達せる近代生活に於ては、最早かくの如き觀念を許すべきでない。

されば吾等は少しく問題を更めて之を論じて見よう。吾等は先づ問うて見たい、基督教は『ボーロ・ルーテル』説以外に解釈の余地がないか、福音は自余の姿をとりて現はれる事が出来ぬか。吾等は先づ耶穌自身の姿を想ひ浮べて見よう。吾等は彼の人格にも将又彼の説教にも、ボーロ及びルートルの思想に見るやうな峻酷な対立や極端な調子を殆ど認める事が出来ぬ。彼は其の聴衆をして人間の性質が根本的に堕落して居る事を知らしめるのを以て自分の説教の目的とした事は決してなかつた。彼は人間の道徳的精力を策励して『斯くすべし、然らば汝は生命を与へられむ』と云ひ、『されば汝も天の父の完きが如く完かる可し』と言つて居る。彼が当時の人々に悔改めを説いたのは、主として意志の革新をすすめたのであつた。彼は其の理想を無限の高處に置いて、神の外には善きものなしと言つた。彼の福音は救済の福音、赦罪の福音であつたには相違ない。されどこは彼の説教の一面で、他面には道徳的完全の進歩

を力説して居る。彼は好んで罪人や税吏の間に往つたが、總ての人が罪人や税吏であるとは言はなかつた。彼は放蕩息子の比喩を説いたが、總ての人が放蕩息子であり又はある筈だとは言はなかつた。彼はまた天国を距る遠からぬ人人、福きはむなるものとして讀めるに足る人々をも知つて居た。罪を赦すと云ふのは、善なる意志の革新に外ならぬ。そは天父の意を成さむと努めても自らの微力を如何ともし難き人々の為の慰藉に外ならぬ。

かくの如くにして吾等は、福音が決して絶対的に人間を堕落せるものとし、一切の人間の行為を腐敗せるものとは説いて居らぬと主張しても、基督の精神に悖るものでないとの確信を得る。加之現今の男女に向つて、福音の中には十全なる人生、即ち人間の至高至極の理想を説いて居る事、一切の彼等の努力及び仕事は、若しも福音の要求する如く神と偕に生くる生活、神の意志に従ふ行動を以て究竟の目的とするに非ざれば、遂に無意義無価値に終るべきを説いて居る事を力説するのは、寧ろ極めて重要な事である。而も此の理想に達する為に人間は自己の不完全なる事、常に墮落せんとしつゝある事をも自覺せねばならぬ。『罪の赦さるゝ所に、生命と祝福とあり』。

かくの如く福音の教濟觀が從来とは異なる形相をとりて吾等の前に現はれる以上、教濟者の思想も亦一定の変化を受けねばならぬ。吾等は最早耶穌を以て天上より降臨せるものとし、吾等地上に生れたる人間とは全然異なるものとする信仰を堅持する事が出来ぬ。寧ろ吾等は基督を以て、人間が低きより高きに登り往く長き旅路の間に授けられた至尊至全の姿、吾等の生命の冠冕、何人も比肩すべからざる指導者と言ひ度いのである。

従つて吾等は最早基督の『神性』を云々せぬ。基督は神なりと云ふ信条は、多くの敬虔なる基督信者の為には、基督教の信仰を受認するシムボルとなり、此の信仰の動搖は、取りも直さず基督教に対する信仰の動搖となつて居る。古き信仰に対する独逸諸帝の告白は、今日に至りても尚ほ止まざる反響を伝へて居る。されど吾等は仮令かの古き信仰を抱く人々に苦痛と憤怒とを与へるにしても、尚ほ此の見解に反抗せざるを得ぬ。吾等は反対の根拠を述べねばな

らぬ。曩にアドルフ・ハルナック氏がカイゼルの公書に反対して、古き基督論の解釈では、基督を神とせずして神人と信じて居た事、而して神人と云ふのも亦聖書の言葉ではない事、並に福音記者は決して基督を神と呼び、又は基督の神性に就て語つて居らぬ事を主張したのは、固より正当である。されど此の事に關する最良の証人は基督自身である。其の全生涯を通じて基督は自分を人間と同位に置いたけれど、神と伍することをしなかつた。彼を善き師よと呼んだ一人の青年に向つて、神の外に善き者なしと言つたのは、基督を以て神とする一切の神学を払拭し去るに足る言葉である。彼は絶対的の美德を帰せられることを拒んだ程、吾等人間と異ならざるものたらむことを望んだ。今日まで伝はつて居る一切の彼の比喩、殊に最も真実なる比喩の一つに於て、彼は人間の精神を直ちに天父の前に立たせて居る。吾等は彼自身が要求せざりし神性を認めずとも、決して彼の名誉を損ずるものでない。吾等の信仰は、超人的救済者を根柢とするものに非ずして、吾等の主の現実の生涯、死を以て封じたるの信仰、其の生活の態度、罪人をも抱擁する其の愛を根柢とするものである。吾等は此の地上の人耶穌を以て、賢愚を論せず万人を神に導く先導者として尊崇する。然り、彼の人格に対する信仰の中に、吾等は神の現前を感得するものである。かくて吾等は喜んで基督の中に神在りきと告白するものである。

かくの如くにして吾等は基督の神性、父なる神と子なる神との關係、其二つの性質の關係、三位一体等に關して、是以上に思索を用ゐる事を避けよう。吾等の信仰の中心には、最早かの全然相容れざる矛盾が存在して居らぬ。若しも基督教の核心に徹することを得さへすれば、吾等は喜んで其他の一切を閑却しそることを公言するものである。

基督教の救済觀は、長い間の歴史に於て、基督の死に特別なる意義を認める信仰の中に集注された。基督の死は吾等の罪の為に獻げられたる偉大なる犠牲で、身代りの価値と意義とを有するものと信仰されて居る。吾等は此点に就ても考へて見ねばならぬ。吾等は主として理論上より之を是非することをせずに、むしろ解放せられたる吾等の道德

的意識の上に立ちて之を論じよう。蓋し吾等の道義感情が、最早宗教を權威とする奇怪な道德觀念を受容れぬほど不羈独立のものと為つたことも、亦近代生活の一標徴である。カントの倫理学を根柢とする吾等の道念は、最も明瞭に下の如く語つて居る。曰く、自ら作せる罪は自ら之を贖ふ外に滅罪の途がない、如何なる人も如何なる神も吾等の為に之を贖ふ事が出来ぬ。そは品物のやうに金さへ払へば誰でも買へるやうなものとは違ふ。罪はまた自己若しくは他人に課せらるゝ刑罰によりて贖はれる事もなく、自己の罪惡感情が他人によりて除き去られるやうな事は尙更ある筈がない。罪惡は之を赦し給ふ吾等の神の、自由なる道徳的人格的行為によりてのみ払拭せらるべきものである。神が罪を許すは其の自由意志よりするのである。神を以て何等かの仲介や情実に動かされて罪を赦すものの如く考へるのは、神の尊嚴を傷ふものである。

吾等は此の感情の正当なる事を主張する為に、再び耶穌の人格を証拠としたい。吾等は彼の説教の何処を探しても贖罪説の跡を認める事が出来ぬ。彼が己れの死を以て衆生の為に払ふ贖罪金なりと言ひ、最後晩餐に於て己れの体と血とを弟子等に与へると言つたのは、彼の死に關する在來の教義に於て解釈されるやうな意味があるのでなく、單に殉教の精神を言表はして居るに過ぎぬ。彼はまた其の説教に於て己れの死と父なる神の赦罪との間に何等の關係ありとも述べて居らぬ。放蕩息子の比喩に於て見る如く、何等の条件もなく、『若しも』も『乍併』もなしに、父は其子の罪を赦すのである。或人は比喩の中より代理贖罪説を繰繹せんとした。而もその結果は全然此の比喩の眞意義を誤まるに過ぎなかつた。

上來吾等は人類の社会的生活の全組織が、著しく変化した為に、基督教の中心思想たる救濟觀も亦從来とは異なれる形相をとらねばならぬ所以を明かにしようと努めた。之と同じく從来動かす可からざるものと思はれて居た多くの他の要素も亦変動を免れぬ。さて茲に近代文明と相応じて、全然その特有な一種の考へ方がある。此の近代的思索の

根本特色は、一切の世界の出来事を説明せんとするに当りて、飽くまで内面より之を試みんと努めることである。換言すれば一切の自然的並に精神的現象を支配する普通の法則によりて之を解釈せんと努めることである。

一方に於て此の近代的思索の根拠たるものは自然法である。吾等の外面的文明並に其の自然科学及び其の実用工学は、一定の法則に従へる、自然なる、破るべきからざる秩序の認識を根拠として居る。科学は深く吾等の精神的生活の中に入り込んで、一切の出来事は自然の法則に従へる、規律ある、測定すべきものなるを感じしめるやうになつた。かく言へば吾等はかの精神物理学・経済学及び統計学の出現や、境遇の力を高調する思想や、史学の中にさへも合法的關係が高調されるやうになつた事を想ひ出さずに居られぬ。而も合法性に対する此の感情は更に一步を進めて、吾等の生活の根本的感情となつて來た。理論の上だけでは吾等は自然現象の合理性は單に表面だけの相であつて、そは何時でも破壊され得るものであると考へる事が出来る。されど實際に於て吾等は決して此の思想に従つて行動しては居らぬ。吾等はかの合法性を根柢として吾等の生活を維持して居る。吾等はゼネレーションと云ふ事を念頭に置いて行動して居る。例へば星学者の多くのゼネレーションが一つの星学上の問題を説くために其の頭脳を使ふのである。吾等は法則を設ける。而して其の全意義は次で来る後繼者によりて發揮されることを信じて居る。吾等は確乎たる實在の上に立つて居ると云ふ根本感情を基礎として生きて居るのである。

かくの如き世界に於ては最早厳密なる意味の奇蹟の存在を許すことが出来ぬ。即ち自然の法則を破りて、此の自然の出来事の中に行はれる神の干渉と云ふ意味での奇蹟は、吾等の世界には適はしからぬものである。然るに他方に於ては奇蹟と云ふ事が十重二十重に基督教と纏綿して居るやうに見える。基督教史の全時代を通じて、即ち新約の時代に於ても、初代の教会に於ても、中世紀に於ても、将又ルーテルの時代に於ても、奇蹟に対する信仰は強大であつた。この奇蹟に対する憧憬の情はピュルソンの『人力以上』の中に最も鮮かに描き出されて居る。

されど吾等は最早かくの如き奇蹟の信仰を固持する事が出来ぬ。そは單に吾等の思想と相容れぬ為ではなく、吾等の神に対する新たなる信仰と矛盾するからである。吾等の神は混沌の神に非ずして秩序の神である。そは最早訂正の必要ないほど、精細に且つ確實に此の世界を作り出だせる神である。そは一見残酷に思はれる生存競争の間に、一定の法則に従ひて一切の衆生を低きより高きに導き給ふ神である。いつまでも奇蹟によりて其の事業を補はねばならぬやうな神、編み落した網の目を時々修復せねばならぬやうな神は、吾等にとりて価値なき神である。

かくの如き見解に立ちて、翻つて再び吾等の信仰の歴史を探れば、想半に過ぐるものがある。奇蹟に対する如是の態度は要するに歴史上の成行を承け継いだものに外ならぬ。福音教会に於ては已に奇蹟信仰の大半を放棄して居る。熱心に奇蹟を信奉したのは、初代及び中世紀の教会だけである。当時の人々は奇蹟の間に住んで居たので、奇蹟は日常の出来事であつた。福音教会に於ては（殊にカトリックの聖徒崇拜と相争ふに当りて）、奇蹟は大体に於て最早現はるべきものではないこと、大なる奇蹟は過去に属するものなることを確信するやうになつた。人々は單に福音及び新約の奇蹟だけを要求して居る。されど奇蹟に対する此の態度は、所謂奇蹟に非ざること、信仰の人格的経験は奇蹟を根柢として得べきものに非ざることを前提として居る。されば奇蹟が信仰を支持するに過ぎぬ。此点にするのである。従つて吾等が奇蹟を否定するは、過去の福音教会が半ばやりかけた仕事を完成するに過ぎぬ。此点に於て吾等は更に耶穌其人の生涯に溯つて見よう。耶穌及び弟子たちが奇蹟に関して吾等とは違つた思想を持つて居た事は事実である。彼等の知識では可能なる事と不可能なる事との間に明瞭なる限界を劃する事が出来なかつた。而も耶穌は未だ曾て奇蹟を以て信仰の至要の根柢とした事がなかつた。耶穌は奇蹟を行つた。されどそは彼のみ能くするに非ずして他の人も亦之を行つたのである。人々が耶穌に向つて彼に対する信仰を起させんに足る奇蹟を求めた時に、彼は断乎として其の要求を斥け、而して下の如く言つて居る。『若しモーゼと予言者とに聽かづば、縱ひ死よ

り甦る者ありとも信仰を起さる可し』。耶穌の行へる奇怪な異常な奇蹟は容易に之を彼の生涯より分離し去る事が出来る。(但し彼が常に人の疾病を癒やし、悩める者を助けたる如き行為は、厳密なる意味の奇蹟とは言はれぬ) かくして吾等が耶穌の生涯より其の奇蹟を取り去りても、豊富にして統一ある彼の人格は、その為に何等の損失をも受けぬ。

かくの如くにして吾等は基督の生涯及び其の精神に鑑み、且つまた福音の歴史に鑑みて、厳格なる意味の奇蹟信仰即ち吾等をして自然現象の合法性を無視せしめんとするやうな奇蹟信仰を放棄するものである。但し広い意味での奇蹟、即ち人間の精神生活の奇蹟の如きは、固より之を否定せんとはせぬ。吾等はたゞかの奇怪なる自然的奇蹟信仰を斥けるだけである。

而して近代の世界觀は、實に自然現象が普遍的法則に従つて起ることを前提として居るのみならず、精神的生活の發展にも破るべからざる規範と法則とが存在することをも前提として居る。近世の特徴として自然科学と並び立てるものは、十九世紀に於て殊に旺盛を極めた史學である。近代思想の根柢には自然法の觀念と相並んで歴史的進化と云ふ思想が横はつて居る。此の進化の觀念を根柢として、史學は一切の精神現象を内面的に説明せんとするのである。

史學は歴史を双肩に担つて立てる偉大なる個人の至深の謎までも解き去らんとはせぬ。されどそは歴史の自然的進行の間に突如として現出する超自然的現象を承認したり、又は自然的現象と、神の啓示に基く現象とを対立せしめるやうな事を決してせぬ。

さて近代の史學は、一切の人類の精神的生活の出来事と同様に、宗教的生活の歴史をもその研究の対象とした。此の場合に史學は宗教と他の精神現象との間に、何等の境界をも設けない。そは同一なる研究法で新約及び旧約の歴史をも探し始めた。而して非常なる精力を以て極めて微細な点にまで其の研究の歩を進めた。吾等は之に反対するこ

とも賛成することも出来る。孰れにもせよ研究の歩は益々進められて行く。而して旧き解釈を固持する人でさへも最早歴史の力を藉らねばならぬことになつた。基督教史に附纏つて来た超自然的現象の後光は搔き消された。而して其の背後には其自身の進行の中に領会せらるべき出来事の潜んで居ることが判つて來た。到る処に吾等は低きより高きに登る進化が行はれること、而して其の際には精神的発達が多少自然的進化の力に待つこと、宗教の發展は常に一般文明の發展に制約せらるゝこと、宗教は常に四圍の世界と關係して居ることを知るのである。一切は互に融会し且つ互に制約し合つて居る。かくの如く歴史を観じ来れば、人類の特殊の一部分に限られた天啓と云ふやうな古き信仰は最早維持する事が出来ぬ。

然るに基督教は尚ほ天啓の思想を根柢として立つて居る。ルーテルは一切の教会の権威を打破した。されど彼は聖書の金城鐵壁に拠り、その一字一画が悉く神の口より出でたりとする教義の上に教会を築き上げた。此の教義は今や放棄されたけれど、人々は尚ほ聖書の中には特別な天啓が含まれて居るとの信仰を正しきものと考へて居る。人々はそれだけでは古き城壁が如何ほどまで破壊されて居るかと云ふことに気が付かぬ。彼等は色々な城壁を築いたけれどそは決して永続するものでない。歴史は到る処で旧約及び新約に現はれたるインスピレーション、即ち特別なる超自然的天啓の思想を打破せんとして居る。カイゼルの公開状によりて広く世に知られるようになつた二重天啓説の如き神学も、最早生命を保つことが出来ぬ。歴史は之れを承認せぬ。

さらばかくの如き歴史を以て正当なりとする時は、如何なる結果を生ずるか。かくの如き見解が眞実なりとせば如何にせば可なるか。曰く、思切つて更らに一步を進めるのみである。若しも史學が秘封を破り去つて特別なる天啓を放棄すべきことを吾等に要求するならば、吾等は最も厳粛に普遍的天啓の思想に就て考へねばならぬ。一面に於て吾等はかく言ひ得る。歴史の孰れの処にも特別なる天啓、即ち人間の仕事と相並んで行はれ、且つ之と區別し得るやうな

神の仕事を見ることが出来ぬ。歴史上の一切の仕事は人間の仕事であると。而も他面に於て吾等は又かく言ひ得る。

一切は神の仕事である、人間の偉大なる全歴史、何等の外部の権威に拘らずして次第に創造せられ獲得せられ行く道德的価値、此等は常に吾等を己れの方に引上げ給ふ神の仕事であると。此の偉大なる精神現象の中軸たるものは、宗教的生活の進化である。而して全進化の究極たり目的たる新旧約の歴史の中軸たるものは、福音及び耶穌の人格である。かくの如きは事實を根拠とし且つ從来の古き解釈とも（特別に神の超自然力によりて作られたる神聖なる歴史と云ふやうな思想を離れさへすれば）調和し得る宗教的歴史観である。

若し此の見解を飽くまでも進めて行けば、一つの新しき問題が吾等の前に現はれてくる。一切は進化の過程にありとする此の歴史的見解は、吾等をして基督教も亦一の過渡的宗教形式に過ぎずして、必然更に高き階段に移り行かねばならぬものでなからうか。自分はさう思はぬ。歴史は固より事物に對して絶対的判断を与へることが出来ぬ。歴史は決して宗教の究極の發展が基督教に於て遂げられて居ると主張し又は証明することが出来ぬ。かくの如きことを敢てするのは自己の領域より逸出することである。されど歴史はまた如是の仮定を不可能なりと断言することも出来ぬ。かくすることも同じく越権の所業である。成程歴史は人類の生活の各方面が次第に其の価値を高め来れることを示して居る。されど歴史は此の過程が際限なきものなることを証明して居らぬ。そは寧ろ多くの方面に於て人間の生活は最早踏み越えることの出来ぬ点まで達して居ることを示して居る。信仰の天地は自由の天地である。そは何等の科学的確実を必要とするものでない。乍併若し吾等にして純一平明なる福音の姿に於て至高の宗教的信仰を獲得せんとするならば、先づ第一に福音は吾等並に吾等の時代の要求に応する唯一にして至醇なる信仰の姿なることを確信せねばならぬ。かくして吾等は基督教の将来と云ふ最初の問題に立帰らう。

吾等は種々なる方面に於て基督教は思ひ切つた進化を必要とすることを見た。救濟觀、基督を神とする教義、三位

一體論、贖罪及犠牲觀、奇蹟、古き天啓觀、總て此等は進化の波浪に洗ひ去らるべきものである。然らば残れるものは何か。或人は憂へて言ふだらう、役にも立たぬ殘墟のみだと。乍併吾等が如上の諸点を批評し来れる時に已に驚き且つ喜んだやうに、一切を取除いた跡に耶穌自身の純一平明なる福音が残るのである。仮令吾等は種々な点に於てボーロやルーテルとさへも意見を異にする事があつても、そは吾等をして愈々堅く耶穌の人格と福音とに取縋らしめるだけである。

而して耶穌の福音と雖、其の末節に存するものまでも、悉く之を探る訳にいかぬ。福音の中にも内面的の部分と外的の部分とある。福音の終末觀の大部分、即ち此世界の最期が一朝にして来らむとの期望、此の世界觀を根柢とする一切の思想、地球を以て宇宙の中心に位すとする思想、天は円天井の如く地球の上に懸つて居ると云ふ思想、天使に取巻かれて此の天上の雲の上に住し、審判の日に現はれる神と云ふ思想、天地の間を上下する天使に対する信仰、悪魔及び悪鬼、奇蹟及びインスピレーションに対する信仰、其他之に類せる多くの思想信仰は、悉く福音の外面的分子である。かくの如きは要するに外部の覆面に過ぎぬ。福音は暫く之に蔽はれつゝも、其の至醇なる内面の光輝は到る處を照して居る。

されど吾等は福音の内面的分子すらも簡単に写し取ることが出来ぬ。そは翻訳されねばならぬ。啻に吾等の言葉にのみならず、吾等の全靈的経験に翻訳されねばならぬ。而して此を成すに当たりて吾等は故意に歴史的發展の網を断ち切り、純一を誇張して全然福音の原始に還らうとは思はぬ。歴史的發展が若し福音に対して何者か価値あるものを齎らせる場合は、吾等は常に之を採用し之を相続して行かねばならぬ。（茲に史的發展と云ふのは世間的事業其他に対する宗教改革の態度を意味するのである）。如何に純一にして内面的なる宗教と雖、時代の糸で織られた覆面を着けずに全然素顔で現はれることは決してないのである。

吾等は全心身を獻げて人格的な天上の父に対する福音の信仰を奉するものである。福音によれば此の神は世界を支配し且つ世界を超越し乍ら、同時に此の世界及び其の労作の中に姿を現はし給ふ神である。而して吾等は神に対する此の信仰を吾等の知識、吾等の神觀に移し取るのである。吾等の神は最早星辰をもて莊嚴せられたる衣を纏ひて蒼穹に住まひ、信者を守護する為に天使を降し、肉眼に見ゆる奇蹟の力を以て天地の法則を破りつつ此の世を左右する如き親しき父ではない。吾等の神は茫茫たる星界に、時空の無限に、無限小と無限大とに潜在して、其前には一切の思想が其力を失ふ無限者・全能者である。そは自然の鐵則を衣とし、人間の目には見ることを得ざる引き裂き難き厚き覆面を着け、恐るべき生存競争の間に其の造れるものを導きて道德的・人格的自由に到達せしめ、巨大なる淵の如く吾等の四辺を取囲む神である。吾等は耶穌の手に縋りて此の巨いなる淵に飛込むのである。吾等は双手を挙げて「天に在す吾等の父よ」と祈る。そは決して易々たる仕事ではない。信仰とは不斷の戦闘、労作、新しき努力、新しき發展である。

吾等は耶穌と同じく最も單純なる立場に立ちて、神は善の中に求むべきこと、天父に対する信仰は同時に、人間社会に於ける道徳的行為、道徳的活動を含むことを疑はぬのである。吾等は此の善なる生活に対する無上命令を福音の中より惹き出すのである。即ち己れの完き如く其の子も完からんことを望み、其の後見の下に生きつゝありと感じ、其の審判の前に吾等が送れる生活を申述べねばならぬ父なる神に対する信仰より之を續繹し來るのである。

されど此處でも吾等は大いに注意を払はねばならぬ。初代基督教徒の採れる如き道徳に対する禁欲的・出世間的態度は之を近代生活に採用することが出来ぬ。吾等は福音の發展の潮流に飛込んで、宗教改革によりて確立せられし世間的倫理を取らねばならぬ。神の旨によれば善なる行為は外面に表はれたる事業の中に存せずして、たゞ吾等の現実の本務を尽す所に在る。此の大きくなり広くなつた世界、末期に瀕せるに非ずして新しき時代が始まりつゝある世界

難解な問題に充ちたる世界、近代実用科学、世界貿易、世界工業、社会問題、諸国民競争、階級戦争の此の時代の中に、吾等は福音の要求を提げて立つのである。福音の要求とは何ぞ、曰く他人の為に働く生活、人の為に獻げる高貴なる愛、一切の人生に対する偉大にして高尚なる理解、一切の反目嫉視の間に在りて神より与へられたる牢乎たる道德的安心を得ること、これが即ち福音の吾等に求むる所である。

されど吾等は自らの行為の不完全なること、為すべき事と為し得る力との間に永遠の矛盾が横はれること、永遠に吾等の神の要求を満足せしめ難きことを沁沁と感ぜずには居られぬ。而して神の要求が愈々明かに意識せられ、愈々厳肅に之に対するに及んで、自らの不完全を悲しむこゝろは益々強くなりまさる。此点に於て吾等近代人の如く深刻に神の偉大と全能とを感じ、吾等近代人の如く痛切に救済を説ける福音の一面を味ひ得たものはあるまい。吾等は始めより神と比ぶれば自己の甚しく微弱にして殆ど虚無に等しきこと、殊に其の道徳的に殆ど無力なることを感じて居る。かくて吾等は罪を赦し給ふ神を教へた耶穌の福音に取縋るのである。凡そ何人の生涯にも、耶穌が放蕩息子の比喩を以て説いたやうに、吾等の罪を赦し給ふ大愛の神を信するに非ざれば、何ものを以てしても到底救はれ難き道徳的苦惱を味ふ場合が必ずあることは吾等の知る所である。乍併之と同時に吾等は一切の自余の思想を排除して、只だ罪惡觀のみを吾等の生活の根柢たらしめんとはせぬ。吾等の生活の中には、神の恵みによりて喜んでその御旨を行ひかくて嬉しく有難く感する時もある。但し吾等はかかる時と雖、耶穌が吾等に向ひて教へたる言葉を忘れてはならぬ。『爾曹命ぜられし事を皆な行したる時も、我儕は僕、なす可き事をなしたるなりと言へ』。

かくて最後に吾等に残れるものは大胆にして而も喜ばしき希望である。此の永遠の希望は基督教の基礎にはあらずで其の至高の表現であり究極の目的である。吾等の望む所は神と偕に住む高貴なる生活、一切の心を痛むる問題や懷疑の解決、恐怖と憂苦との解脱、俗惡と罪惡との厭離である。此の希望は一切の利己心を離れねばならぬ。そは單に吾

等の小なる生命にのみ關することではない。吾等の此の生命は基督を支配者とする大いなる社会、大いなる精神的國家に結び付られて居る。吾等の生命は吾等と共に働く過去の偉大なる精神と相連なり、また現在に於て吾等と共に働く總ての精神と相結んで居る。吾等は一切がうたかたの水の泡の如く、やがては消え去るべき果敢なき姿とは考へられぬ。吾等の衷には激刺たる希望が働いて居る。

諸々の偉人の声々

諸々の師主の声々

久方の雲井より呼ぶ

「諸善奉行の道心を

弛めされ、かりそめにも」

長久の静寂のうちに

精進不退の人々に

洩れなく賜はるべき

榮譽の冠冕かゝれり

人々よ振ひ起たずや。

父なる神、善なる意志に従つて世界の為に働く生活、罪惡の赦免及び永遠の希望、總て此等のものは主耶穌の人格の中に最も鮮かに綜合せられ體現せられて居る。吾等は彼に向つてかく叫ばざるを得ぬ。耶穌こそは吾等の導師であ

る。人生の凡ゆる方面に無数の導師がある。されど耶穌こそは肩を比ぶる者なき吾等の導師、至高の導師、吾等の靈を神に伴ひ行く先達、耶穌は道なり真理なり生命なりと。

主我的傾向が著しく、極めて不羈独立なる意見を抱いて居る吾等近代人は、之が為に自我の孤立に陥らぬやうに戒心せねばならぬ。吾等は耶穌に始まりたる人類の共同生活の間に吾等の双脚を踏み占めねばならぬ。吾等が述べ來れる所のものを単独に保持し得べしと考ふるは誤りである。暫くの間は個人として之を保持することも出来よう。されど幾くもなくしてそは單に伝承的觀念に墮して了ふ。人々はたゞ共同生活の間に於てのみ不可見の世界に翱翔し得る羽翼と力とを養ひ得るのである。歴史は最も明瞭に此の事を吾等に教えて居る。たゞ共同生活の間に於てのみ吾等は福音の道德的要求を未知の世界にまで及ぼし得るのである。而してかくの如き共同生活は、吾等が教会組織の実際の歴史的關係の中に入り来る時に、始めて現はれるのである。排除し難き古き伝説の殘址や、多数の奇怪な古風の形式や、教会の伝承の障壁などに煩はされずに、吾等はかくの如き一共同員の生活たる権利を飽迄も保有し、且つ此の権利に伴ふ一切の義務を喜び且つ厳格に守らむとするものである。将来の基督教と云ふ問題は同時に吾等教養ある近代人の心情と良心とに懸れる問題である。吾等は十分に此の事を考量し且つ理解したいと思ふ。

吾等は人類の宗教的生活の流れに棹して來た。吾等は能ふ限り其の源頭に溯り、不斷に鮮かになり強大になり行く進化の跡を辿り、遂に現に達し得た最後の境まで到着し、翻りて過去の経験に鑑み、その将来取るべき方向に就ても多少の揣摩を加へた。自分は此の長き旅に於て吾が心の衷に——望むらくは總ての諸君の心の衷にも——朗かな且つ沁みりした謝恩のこころの間に湧き来れる根本感情を、アウグスチンの言葉を藉りて表白し、而して茲に吾等の旅路を終らうと思ふ——

汝は已れに向けて吾等を造り給へり。されば汝に在りて息ふまで吾等に安息なし。